

別冊・おなご

農民文化賞受賞記念特集号



小鳥も歌っている

2017・11・21

35号

2017・12

セキさんはネ ホントに
背の高いカライツとすた人で十
見れば顔丈な
いつもニコニコで十
いや味言われでも
その場でおさめてた

えっつも ごんご
ほうほうご 燃やすて
眼めちやめちやごすてる人たつたご
煙りばりてなご
息子征^だして
息子に戦^な死れて
泣いてるんじゃなご
子ごも心にも

／
そう 思ったた。

へ小原昭^{こはら}さん談

高橋セキ 1966年 2月23日没



「牛や犬のようになくねえと思って、ながい間に少しづつためた金で墓石つくってやった。オレ死ねば、戦死した千三を思い出してくれる人もなく、忘れ去られてしまうべと思って、人通りの多い道のそばさ建でだス」と73歳になる母親の高橋セキさんは言うのだった。

〈小原徳志著『石ころに語る母たち』未来社刊より〉

昭和十一年の日本農林文化賞受賞者、刊かれた農民活動文化の発展に立ち

脚燈の光を世界に広げ、その中心に、家庭、より、精神、昭和60年

日本の新*問題もまじくくまじく*トク大博覧の商標

相沢、シタラ、ハの花のほろろ

日本農林文化賞として、農林の事実に向き合

農林文化賞の受賞者について

農林文化の問題を問う、農林文化の発展に立ち

農林文化の発展に立ち

別冊・おなご

35号

○ 農民文化賞受賞記念特集号

農林文化賞の受賞者について	表紙・見玉智江	160
農林文化の発展に立ち	157	
農林文化の問題を問う	152	
農林文化の発展に立ち	148	
農林文化の発展に立ち	143	
農林文化の発展に立ち	138	
農林文化の発展に立ち	133	
農林文化の発展に立ち	128	
農林文化の発展に立ち	123	
農林文化の発展に立ち	118	
農林文化の発展に立ち	113	
農林文化の発展に立ち	108	
農林文化の発展に立ち	103	
農林文化の発展に立ち	98	
農林文化の発展に立ち	93	
農林文化の発展に立ち	88	
農林文化の発展に立ち	83	
農林文化の発展に立ち	78	
農林文化の発展に立ち	73	
農林文化の発展に立ち	68	
農林文化の発展に立ち	63	
農林文化の発展に立ち	58	
農林文化の発展に立ち	53	
農林文化の発展に立ち	48	
農林文化の発展に立ち	43	
農林文化の発展に立ち	38	
農林文化の発展に立ち	33	
農林文化の発展に立ち	28	
農林文化の発展に立ち	23	
農林文化の発展に立ち	18	
農林文化の発展に立ち	13	
農林文化の発展に立ち	8	
農林文化の発展に立ち	3	

セキさんのことば	渡邊真吾	5
遠い声	田村浩志	7
ノーマア戦争(その二)「平和への祈り」	東野 正	20
満州をめぐる関連本の紹介・旧満州国の歴史について	東野 正	20
何度も繰り返すのか 何度も	東野 正	25
父と母にも青春時代があった 父の章	佐藤弘子	27
穴薬師	佐藤岳俊	35
青い空の下で	兒玉智江	37
次世代に受け渡す女性史を	小原道子	41
カタクリの花	小原道子	43
汽車	多田テル	44
父と旧満州国のこと	及川恵美	47
日本軍「慰安婦」制度の事実に向き合う	千葉ちた江	56
駄句	麗舎読書会	68
日本の「歴史問題」とヴァイツゼッカー・ドイツ大統領の演説	佐藤英夫	69
戦争のない世界へ・9条と24条を中心に	北原陽子	90
短歌・和賀の月	菊池留蔵	99

麗ら舎読書会・第26回 農民文化賞受賞「受賞によせて」 101

麗ら舎読書会・農民文化賞受賞・開かれた農民活動文化の先頭に立つ	102
和賀町に麗ら舎が出来た・岩手日報《婦人・家庭欄》より抜粋・昭和60年4月25日付	103
古い手帳とアルバムから	106
白いシクラメンの花のような人	107
小原麗子さんから戴いたもの	111
麗ら舎読書会を振り返って	117
戦争と女の問題を問い続ける小原麗子さんに出会って	123
花の力	127
麗ら舎へのお誘い	130
麗ら舎読書会と私	132
麗子さんへのラブレター	136
麗子さんとの出会い	141
絵本との出会い	142
わたしと麗ら舎	144
仲間とのつながり	148
私の中の「東北のおなご」を書き換えた麗子さん	152
「地域」に根ざし、「地域」を越えた麗ら舎	157
あとがき	160

表紙・兒玉智江

淑々青

遠い声

おなご 35号

表紙・良木賢五

渡邊真吾

サラリーマンだった頃

一年間だけ一緒に働いた引揚者の先輩がいた

お互いに酒が好きで

仕事が終わると眼配せをして赤提灯へ直行した

単刀直入で飲み相手として不足が無かった

ただ酔うと必ず出る話があつて閉口した

もつ煮込みをつまみにして飲み始める

先輩は中国の五十三度もある強い酒

白酒や紹興酒 無い時は沖繩の泡盛

私は清酒一筋で二級酒の辛口だった

仕事の話はあまりしなかった

終戦の日まで住んでいた大連の話

繰り返し 繰り返し聞かされた

酔いが深まると いつも叱責の声があった

受賞「受賞のまじり」

101

「こつちを向け 俺の眼を視ろ！」

黙って話を聴け 眼を逸らすな！」

(私は太宰治の「走れメロス」の話をしただけだったのに)

敗戦の夏 大連から朝鮮半島に入り

釜山港まで歩き続けたと言う

旧制中学四年生だった

友達と遊んでいて遅くなり急いで帰宅したが家族全員がいなかった

危険が迫ったので一足先に出発する と書いたメモと地図 お金が添えてあった

「家族に見捨てられた その時の俺の気持ち解るか」と一喝される

大連港の海に月が出ていたか

アカシアの街路樹に雨が降っていたか

どんな邸宅に住みどんな生活をしていたのか

家族の後を追った一人での逃避行

無事に追いついたのかは訊きそびれた

定年後 間もなく亡くなった先輩

好きな酒を飲みながらじっくり話を訊きたい

会いたい

ノーマア戦争（その二）

「平和への祈り」

田村浩志

はじめに

ごく最近、若い友人から、一月六日の早朝放送のラジオ深夜便で与謝野晶子の特集があり、吉岡しげ美さんが晶子の「君、死に給うことなかれ」に自分で作曲した歌を唄うから、聞いてみたら、と勧められた。当日朝四時、やや雑音が気になる放送に耳を傾けた。情熱の詩人、与謝野晶子の人となり、代表作いくつかの短歌の紹介があり、吉岡さんのきれいで透き通った歌声が流れた。歌も良かったが、私は女優の今は亡き岸田今日子さんによる晶子の「君、死に・・・」の詩

の朗読に涙を流さんばかりに聞き入った。まだ何も外の音が聞こえない早朝に、若き高校生の頃の自分が蘇ったからである。

高校一年生の時だったと思うが、自らも文学青年だった国語担当の先生が教材としてこの詩を取り上げ、「この詩は晶子が、日露戦争で旅順に赴いている弟の宗七を偲んで書いたものだが、君たちは、晶子が君たち一人ひとりに向かって書いた詩だと思って読んでみなさい」と言った。弟思いの姉の心情が溢れる素晴らしい文学作品だと思っていたが、私にも向けられた晶子のメッセージとして読み直すと、胸が抉られるような重い情感に捉われた。

昭和二八年、朝鮮戦争特需で日本の景気が次第に上向きになっていたが、戦後まだ年月も浅い頃で、私にとっても第二次大戦の記憶が新しい時であった。「ああ、弟よ、君を泣く、君死に給うことなかれ。末に生まれし君なれば、親のなさは勝れしも、親は刃をにぎらせて人を殺せと教えしや、人を殺して死ねよとて二四までを育てしや・・・」、「旅順の城はほろぶとも、ほろびずとても、何事ぞ・・・」、当時の同級生たちにとっても重い記憶になっていると思う。その時以来、

私は本を読んだ時、フィクションであれノンフィクションであれ、自分がその場にいればどうしただろう、と考えるような習わしになったのではないか、と今になって思う。書物は楽しければ良いというだけのものではない。読書の際、その中に自分を置くことで、生き生きとした面白さを捉え、学ぶことが出来るのだと思う。いま、世の情勢は危うさを覚える状況にあり、誰かが再びこのような悲壮な詩を詠まなければならなくなるような気配にもある。だから、吉岡しげ美さんの言葉に、私は回顧以上のものを感じたのだろう。

私は、「おなじ」第三三号に「ノーマア戦争」(その一)を書き、戦争の不条理と平和への願いを訴えた。手短にその概要を列記すれば、「何びとも人を殺せば法律で罰せられ、世の批判を受ける。しかし、徴兵制下の戦時では、若者は武器を持たされて人を殺せ、一人でも多くの人を殺せと国家に命じられ戦地に赴く。あまつさえ、人類が脈々と築いてきた文化遺産を破壊し尽くせと命じる。こんな二律背反で不条理なことがあつて良いのか。そして、これからは世界平和を目指

して、憲法九条を抱く日本は平和外交に貢献するため、に平和外交官を多く育成することが大事だ」とした。その後、この私の論理が果たして通用するののかと思ひ、聞その検証のために色々な書物を漁ってきた。その過程で新たに得た知見と考えをここにエッセイ風にまとめて記しておきたいと思う。少々長くなるかも知れないが、どうぞ暫くのご辛抱をいただきたい。

一、【戦争について】

戦争に関する様々な本を読んでいると、突き当たることが多いのはプロイセンのカール・フォン・クラウゼヴィッツが一九世紀に著した「戦争論」である。哲学的で、稀代の難解な内容の本だと言われているが、私も随分と難航し、途中で投げ出した気持ちにもなつた。しかし、暫らく間を置いて読み続けているうちに、なぜ難解なのかが分かつてきた。この本はプロイセン軍の将官にもなり、陸軍大学の校長にもなつた職業軍人が、一般の人の読み慣れぬ戦争用語を多用し、戦争を鼓舞するために書いたものであることが分かつたからである。戦争を領土的野心で起こすことも可

とし、戦争を始めたら徹底的に相手を打ちのめし、再起不能な状態にすべきだという「徹底論」を何度も何度も力説し、持論を展開する著作に私は不快感を催した。エスタブリッシュメント（既定の秩序、権威、支配体制の組織）の軍人の著書とはこんなものだろうと思う。軍人とは言え、つまりは体制と自己の立場の保持を述べているのだ。この著作は、マルクス、エンゲルス、ヒトラー、毛沢東など、いろいろな国の指導者によっても読まれ、実際に応用された。日本でも多くの指導的政治家は代々、この本の進講を受けてきたと言われている。今日、世界の士官学校でクラウゼヴィッツの「戦争論」を教えないところはないと言われ、日本の防衛大学校でもつかわれているようだ。最初に、この本について、私が尊敬する反戦ジャーナリスト、むのたけじ氏「詞集たいまつ」で述べているところを手短かに要約して引用したい。

。むの たけじ 「詞集たいまつ IV」

「私がこの本を入手したのは一九歳のときでした。この本が国家主義者の保守陣営を勇気づけて来ただけでなく、ロシアのレーニンやドイツのエンゲルスにも

影響を与え、彼らの『戦争を通じ革命へ』という路線を裏付けてきたことは知ったが、当時の私は何も自分の意見を言えなかった。以後、自身の戦争と戦場を経験して、いまは『戦争論』と正面から対決できる。あなたの主張の眼目は『戦争を支配するものは政治目的である。戦争は政治とは異なる手段でもってする政治の継承にほかならない。その目的も行動も国家の政治に包含される。従って政治が肯定される以上、戦争もまた肯定され、戦争を悪く言うのは間違いだ、という主張ですね。どこの国の憲法も、国民の幸福の追求を力説している。国家利益に反する者は皆殺しにするという政治行為がどこにあるか。クラウゼヴィッツさんよ、戦争を一種の政治行為として正当化するのは無理ですね。どうしても政治だというなら、戦争は政治の発狂だ、自己破壊である」と述べている。戦時中、大手新聞社の記者として自らも戦地に赴き、戦争を取材し、ときには世を鼓舞したことの責任を痛感して、新聞社には戻らずに、郷里の横手市で詞集「たいまつ」を出し続けた反骨の、むの氏の言葉は重い。

イギリス・女性研究者

ベアトリス・ホイザー「クラウゼヴィッツの『正し

い読み方、戦争論入門』

まさに、「戦争論」を読んでいるとき(二〇一七年)に、奇しくもホイザーの大部のこの本が出版された。著者ホイザーはイギリス・レディング大学教授として戦略論を講じている研究者である。解説書なので、クラウゼヴィッツを超越する理論はないが、懇切丁寧に「戦争論」の中の難解とされる部分を解説しているの、大変参考になった。難儀している私にホイザーを引き合わせてくれた「時間の神様」に心から感謝したい。お蔭で読み進めることが出来た、と言っても過言ではない。一読をお勧めしたい一冊である。私たちにとって有効と思われるホイザーの解説を手短に抜粋したい。

「戦闘における勝利の盲目的な追及は、第一次世界大戦の塹壕戦のように数百万人の命を無駄に奪うことになった。しかもそれは勝者にとっても犠牲に値しないような、無用な目的や曖昧な狙いをめぐって争われた。ドイツと日本も第二次世界大戦で同じ過ちを犯すことになり、数百万にのぼる不必要な死や不名誉な目的のために犠牲をかけ、自国民だけでなく他国民に対しても恐ろしい結果をもたらすことになったのだ。

クラウゼヴィッツに対する重要な批判点として挙げられるのは、彼が戦争における道徳・論理や、戦争の狙いの道徳性をほとんど考慮していなかったというものだ」と言い、「クラウゼヴィッツは奇妙な『三位一体』の理論を作り上げ、一、(国民に対して)盲目的な自然衝動とみなし得る憎悪・敵愾心といった本来的激烈性、二、(軍隊および司令官に対して)戦争を自由な精神活動たらしめる蓋然性・偶然性といった賭けの要素、三、(政府に対して)戦争を完全な悟性の所産たらしめる政治的道具としての第一次的性質、を挙げた。そして、結果として彼は、戦争の理論はこの三つの要素の相互作用を考慮に入れなければならない、と結論づけた」とある。しかし、この意味は理解できるだろうか。こんな哲学的で難解な文章がクラウゼヴィッツの「戦争論」には頻繁に書かれている。こんなことも書いているとホイザーは指摘する、「あらゆる状況において、我々は最大限集められるだけの戦力を集めなければならぬ。なぜなら誰も十分すぎるほどの戦力を備えることはできないし、勝利を得るための運を持ちすぎることもできないからだ。まだ分散された状態にある敵部隊がおり、しかも結集させられるとわれわ

れの部隊より数が上回ることが分かっている場合は、敵が結集させられるまで待たずに、わずかでもチャンスがあれば、持てる兵力をすべてつぎ込んで攻撃するべきである」、何をか謂わんやである。最後に、ホイザ―は次のようにも述べている。「クラウゼヴィッツは、終戦までは考えたが、終戦後の平和については考えていなかった。一八七〇年の（晋仏戦争）の成果は、クラウゼヴィッツを擁護し、彼の絶対戦争の理論が軍国主義が強かったヨーロッパに定着し、何れの国の軍人にも議論の余地のない真理と是認された。また危険なほど戦争に無知な世代の政治家たちにすんなりと容認されるようになってしまった」。先の大戦時の日本の状況がまさにそれであった。この本はまだまだ読みこなさなければならぬと考えている。

。孫崎 亨 「二一世紀の戦争と平和」

「戦争に突き進む、わたしたちの日本を止めるには？」と副題を付したこの本は是非読んでいただきたいと願う書籍である。著者は元外務省国際情報局長で、相当に頭脳明晰な、かつ勇気のある人だと思ふ。この書籍は三〇〇ページを超える大部のものであるが、内

容が詰まっついていて、しかも分かり易い論法で進行する。何よりもニコイン以内の安価で賢くなれるのが嬉しい。孫崎氏には後の項で再登場願うので、ここでは「戦争論」に関わることだけを引用したい。

「クラウゼヴィッツが影響を受け、アメリカの安全保障の関係者が必ず読む本は、古代ギリシヤの歴史家トウキユデイデースの『戦史』である。そして、更にその影響を受けた四世紀から五世紀の神学者アウグステイヌスの『正戦論』は、『個人は生命の危険があつても、いかなる場合でも殺人を正当化できない。しかし国の指導者は国民の平和を守る義務があり、この義務が戦争を正当化させる』、見事な、しかし相当に強引な、詭弁とも思われる論を展開した」と孫崎氏は言う。クラウゼヴィッツの要点として以下の主張を挙げると、「戦争とは、相手に自らの意志を強要するための力の行使であり、この目的を確実に実施するために、敵を無力化しなければならない。現代の戦争は全人民を動員する。敵国政府のあらゆる戦力の根源、すなわち経済力、運輸通信手段、食料資源さらには国家の威信すらも奪取しなければならない」。孫崎氏の日本の政治状況についての卓見は後に再度味わいたい。

。なかにし礼「天皇と日本国憲法」

著者は著名な作詞家で、日本レコード大賞を受賞し、一方、作家としても活躍し、「長崎ぶらぶら節」で直木賞を受けている稀代の名文家である。この著書の副題を「反戦と抵抗のための文化論」としている。旧満州の牡丹江に生まれ、終戦・引き上げでは残留孤児になりかねないほどの辛苦を体験した。氏の作詞は何か哀愁が籠っていて、人の心を揺さぶってやまないのはその体験が関わっているのかも知れない。食道がんで長い闘病生活おくり、再発の恐怖と闘いながら快癒を克ちとった強い心の持ち主でもある。胃の全摘を体験し、落ち込んだ経験を持つ私には氏の恐怖は他人ごとではない。「日本国憲法は世界に誇る芸術作品である。人間を尊重し、戦争に反対する。もはや沈黙している時ではない」と始めるこの著書は素晴らしく高潔で、読み進めると次第に心が温まる感動の名著であると思う。とりわけ、氏の博識には驚かされる。随分と私の頭に「賢さ」を詰めてくれた。現在タブー視されている、天皇と憲法に関して、「改憲派は戦後憲法は他から強制されたものだと言うが、日本国憲法には昭和二一

年一月三日付けの昭和天皇の御名御璽があるのだ、彼らはそれをいとも簡単に無視しようとする。この時、天皇はすでに『日本国民統合の象徴』になっていた。つまり昭和天皇は平和憲法の制定を国民とともに深く喜ばれたのだ。改憲派はまずここから始めるべきだ。我々日本人は明治憲法の下で三〇〇万もの命が失われたことを忘れてはならない。そもそも憲法とは、権力を握り国政を行う人たちの権限を制限するためにあるものなのだ。権力は疑うべしで、権力制限の論理が近代憲法の基本理念なのだ。そして、その憲法の主権者は国民であることを忘れてもらっては困る」と主張する。その他、短いエッセイ風の綴りは第一章から第五章までの五五項で、様々な方向と角度から鋭く切り込む文章となり、その迫力とウィットに引き込まれる。文庫本として発刊されたこの本はツーコイン以内で手に入ることが嬉しい。読書会などで教本として使い、議論し合うには格好の書物ではないかと私は思う。

二、【世界と日本の社会的現状について】

・内田樹・姜尚中「世界『最終』戦争論」

これは内田氏と姜氏の二人のリベラルな知識人が

「近代の終焉を超えて」の副題で交わした忌憚のない対談を中心としてまとめた書籍である。新書版なので安価で入手できる。冒頭、戦争は悲劇の最たるものである、との認識が始まるこの本は方向がはっきりしていて迷いなく読める。「戦闘で、ガス室で、空爆で、化学兵器で、原爆で、何万、何十万、何百万、何千万もの人命が失われてきたことか。その多くが、こともあろうに、自由の理念が勝利し、人権の尊重が謳われ、空前の豊かさが実現された二〇世紀に起きたのである。殺戮は決してやむことなく、大小の悲劇が世界中にばら撒かれ、歴史の断頭台の露と消えていく人命が絶えることがない。冷戦終結から四半世紀が経過した現在、自由の勝利が覆う世界は、逆説的にも、自由を押しさえ込む世界へと反転しようとしている」と世界の現状を分析している。「世界史はフランス革命の国とアメリカ独立革命の国を雛形に展開していくものと考えられていたが、いまはその両国がテロの標的と見なされている。例えば、フランスで二〇一五年起きた風刺週刊誌が襲われたシャルリー・エブド銃撃事件を含め、ここ一〇年くらい北アフリカの移民系若者による暴動が多発している。当時の内務大臣はサルコジで、

郊外に住む移民の若者たちを『社会のクズ』と言って反感を買った。自由・平等・博愛を国是としていた筈のフランスだが、実は移民たちが押し込められた状態の高層住宅は老朽化し、その地域全体が移民の『ゲットー』となつている」と言う。イスラム系で社会的上昇の機会がない移民系若者たちには絶望感が蔓延して、その中にいる子どもたちは怖くて外に出る気がしない状態だと言う。フランス人市民もいつかこんなことが起きると考えていたようだ。差別の中で蓄積した反感は無視できない。日本でもこの頃は差別を受けている若者が多い状態を看過していい筈がない。私たちは今、疑似戦時体制を生きているのだとか、グローバリズムという名の「棄民思想」の常態化やシンガポール化する日本の現在に警告を発する。世界の歴史や社会情勢に詳しいお二人の対談は息もつかせぬ緊張感がある。

・孫崎亨「二一世紀の戦争と平和」

孫崎氏には再度登場していただき、日本の現状を対世界との関係で見ておく必要がある。「日本は今、集団的自衛権で自衛隊を米国戦略に奉仕させるシステム

をつくり、防衛費を増大させ、ひたすら軍国主義の道を進んでいる。だが、私たちは『軍国主義化の道は国民生活の犠牲の上に成立する』と言う重要な点を忘れていた。アメリカのトランプは『日本はもっと我々に払え。さもなければ日本は自分で自分たちを守るようにしろ』と言うが、『はいはい、もっと払います』と、それでいいのだろうか。多くの日本人には驚きでしょうが、米国は厳密な意味で、安保条約上、日本を防衛する義務は負っていない。極めて巧妙に作ってある。日米安保条約の条文では米国は日本の防衛の義務を負っていないことを見過ごしてはならない。集団的自衛権行使容認は違憲であり、早稲田大の長谷部教授と慶応大の小林教授とともに衆議院憲法審査会に参考人として呼ばれ、「九五%を超える憲法学者が違憲と考えているのではないか」との見解を述べている。そして、孫崎氏の卓見は、ソ連体制崩壊の時、世界の軍縮が一気に進むものと一部では期待されたが、その時アメリカは敵国としてイラン、イラクを設定し、武器を作りつづけて世界中に売りまくった。その結果、各国の近代兵器の開発を促し、平和への歩みは実現せずに現在の状態を生み出した、という指摘はそうだったのか

と合点させられた。日本はこれから国際関係の中でどのように行動すべきなのか。「ドイツとフランスは両国の戦争の原因となってきた資源争奪を止めて、相互依存を確立することで不戦の関係を築いた。日本も東アジアでの相互依存関係を作っていくことが重要で、その一つの形が『東アジア共同体』構想だ」と見据えている。更に、「被爆国である日本は『核保有国は非核保有国に軍事攻撃しない』という国際的取り決めを推進すべき立場にあるのだ」と訴えている。

・大澤真幸編著「憲法九条とわれらが日本」

未来世代へ手渡す、と副題を付し、大学院教授などを歴任した大澤氏は現代を代表する二人の論客と対談した内容をそれぞれまとめた章と自己の考えに基づく章の四章からなる現在ホットな論考集で、充足感が得られる著作であると思う。

第一章は大学教授の中島岳志氏との対談で、「脱欧入亜」から「脱米入亜」へと題して綴られている。中島氏は「自衛隊は憲法が作られたときには想定されていないなかった組織であり、これと憲法との関係は曖昧である。集団的自衛権行使を認めてしまったいま、立憲

主義と平和主義との問題をはつきりさせるために、自衛隊の存在を憲法の中で承認し、その上で何をすべきか、何をしてはならないのかを規定したほうがよい。そして、岡倉天心の『Asia is one (アジアは一つ)』との概念はいま、新しい枠組みを作る端緒を開き得る」と言う。

第二章は大学名誉教授で文芸評論家でもある加藤典洋氏との対談で、「明後日」のことまで考える、と題した対談である。加藤氏は自衛隊を二種類の軍事組織に改組し、国連の指揮下で作戦を行う「国連待機軍」と国の防衛と災害救助にあたる「国土防衛軍」とにする。憲法には、核を持たず、作らず、持ち込ませず、そして使用もしない、と言う項目を九条に付加すべき、と言う。更に、九条に外国の基地の撤廃条項を入れ、それを根拠に米軍の基地撤廃を迫る。これはフィリピンで一九九〇年代に実際に成功した方式だと言う。国連は今、信用できないが、しかし誰かが国連を信用できる形に再建させなければならない、日本がこれに名乗りを上げよう、と提案する。

第三章は大学教授の井上達夫氏との対談で、我ら愚者の民主主義と題して行われた。井上氏は日本国憲

法から九条を削減したほうがよいと言い、驚かされるが、安倍政権は九条があるために幼稚化したと言う。「そもそもアメリカが日本を守るといふのは海外における代替不能な米国自身の戦略拠点を守るためである。米軍の核の下で守られていながら、九条をノーベル賞に、などと能天気なことを言う人々は欺瞞だ」と井上氏は看破する。「はつきりさせたいのは、九条を削減するからと言って、戦力の統制規範を憲法に書き込んではいけないということではない。逆に戦力統制規範を憲法に盛り込むことを可能にするためにこそ、九条を削除すべきなのだ」と言う。

第四章は編者の大澤氏が「こうしようと言える日本」と言う枠組みを設定して、憲法九条と積極的中立主義との立場から述べている最終章である。氏は絶対平和主義の下で憲法九条三項に、ガンディーの無抵抗主義を明記するのが良いと言う。「絶対平和主義とは侵入者に対して無抵抗で降伏すると言う思想ではなく、武器を持たずに徹底抗戦する、武器を持たない暴力を使用すると言うことである。そんな効果がない、と思うかもしれないが、そんなことはない。侵略者が日本を狙うのは、日本人を全滅させるためではなく、日本

列島を支配し利益を得るためです。侵略者は日本を統治しなければならぬので、日本人の協力が必要になる。そこで、徹底したサボターージュ（非協力）やゼネストをすれば日本を統治するコストはあまりにも大きく、結局、侵略は割に合わないものになる。併せて、侵略者は世界に重い道義的コストを支払わなくてはならなくなる。極東の小国日本はこれを基本的な外交方針にすればいいと思う」と著者は言う。そして、最後に、「平和主義の立場から日本は国連の改革を主導し、『こうしよう』と提言をする。絶対平和主義を国是とする国に侵略しようとする国はないだろう」と著者は考えている。読者の私が付け加えれば、外交のみならず、国内的には若者に平和教育を積極的に導入し、長い先を見ることも大事なことではないかと考えられる。

三、日本はこれからどうすべきか

・磯村英司「戦争する国にしないための 中立国入門」
安全保障政策である中立政策は二〇〇年以上の歴史を持つが、国際的な手続きが難しいため、実際に永世中立や中立主義を掲げるのは、有名なスイスを筆頭

にオーストリア、スウェーデン、フィンランド、コスタリカなどの少数の国に過ぎない。著者は大学で教鞭をとる研究者で、日本平和学会などにも所属している。「二〇一四年に安倍首相は集团的自衛権行使を容認する閣議決定をした。それ以前に日本が戦争に巻き込まれるリスク（危険性）がどれほどあったのか、閣議決定の後の国会審議において十分に説明されることはなかった」。このように始めた論議は専門家として、世界においての中立主義の歴史や変遷を一つひとつ取り上げて周辺国との関わりで、膨大な資料に基づいて詳しく記述している。「そもそも中立制度は一九世紀半ばから二〇世紀初めにかけて体系化された国際法上の制度である。中立は、国家間の戦争の発生により、戦争に参加することを望まない国家が選択する地位である」と言う。「中立国は戦争の終結とともにその地位も消滅するのに対して、永世中立国は実際に発生した戦争だけではなく、将来のあらゆる戦争に中立を維持する国家を指す」のだと言う。著者は中立国の国際的な手続きは決して容易ではないが、日本は中立を模索するのがよい、と考えている。日本の中立は永世的であり、いかなる事同盟にも参加せず、自国領土内

に外国の軍事基地の設定を認めない。また、日本の中立は積極的中立であるべきで、非武装的中立であることが必要と説く。日米安保条約や自衛隊を解消するために、集団的自衛権行使を認めないとする。そして、日本は集団的自衛権行使の容認をしなければ、本当に日本の存続と安全を確保することができないのか、我々はもう一度考え直す必要があるのではないかと問う。決めるのは我々一人ひとりだとのスタンス（立場）なのである。

・伊藤千尋「凜とした小国」

いろいろと書物を漁って、磯村英司氏の前著にたどり着き、もう一つ、これからの日本の方向を語る一冊がほしい、と書いている時、奇しくも新聞でこの本の出版を知った。この書籍は期待に沿ったものだったし、明快で分かり易く実例を提示してくれ、最後を締めくくるのに格好の本である。著者は朝日新聞社、アエラ編集部を務め、現在、「九条の会」世話人も兼ねているフリーの国際ジャーナリストである。

この本は、最近注目が向けられている四つの小国、コスタリカ、キューバ、ウズベキスタン、ミャンマー

を自身が訪れて取材した報告の書である。第一章を飾る中米コスタリカは平和憲法を冠する国で、日本の将来に関して示唆に富む、存在感の大きな小国である。この国は一九四九年に日本次いで世界で二番目に自ら制定した平和憲法を持った。しかも本当に軍隊を亡くし、軍艦も、戦闘機も戦車もない。周囲の国々が内戦に明け暮れた時代にも、この国だけは平和を維持した。大統領は内戦中の周辺の国々を回って戦争を終わらせ、一九八七年にノーベル平和賞を受賞した。大統領は「平和の輸出」を行い、自らの平和と中立を保ち、平和国家としての地位を確立した。この国では軍隊をなくしたために浮いた軍事費を教育費にあて、「兵士の数だけ教師を作ろう」のスローガンを掲げて国家予算のおよそ三〇％が教育費となり、奇跡的な教育大国となった。小学校で最初に教わるのが「誰もが愛される権利を持っている」という言葉だと言う。一九八〇年に「理解と寛容、平和共存」の精神を広めるために国連平和大学設立を国連に提案し、設立された。首都サンホセの郊外に敷地を提供し、日本などの外国から学生が来て世界が平和になるためにはどうしたらいいかを学んでいる。日本人の教授もいると言う。この

本でとんでもないことを教えられた。安倍首相は「積極的平和主義」を唱えるが、彼が米国の保守派シンクタンクで語った言葉は「Proactive Contribution to Peace」で、Proactive は先制攻撃を指す軍事用語とすること、結局は「やられる前にやれ」と言うことによるのである。日本語にするときに、外務省は付度して意図的に「誤訳」した、と指摘する。現地の女子高生に意地悪く「侵略されたら、あなたは殺されるかも知れないですよ。それでもいいのですか」と問うと、「この国を攻める国があれば、世界が放っておきません。私は歴代の政府が世界の平和に貢献してきた努力を誇りに思っています」と答えたと言う。日本では憲法九条を誇りに思うと胸を張る高校生がどれだけいるのだろうか。最近の大きな問題は隣国ニカラグアからの大量の移民の子たちだが、コストリカはこれらの人々を全て受け入れて、無償で教育し給食も与えている。「誰も排除しない」は憲法で規定されているのだそう。平和憲法を一番先に制定した日本の現状が哀しく映ると思うのは、私だけではないだろう。今からでも挽回することは可能なのだ。その他の三つの国も厳しい国際環境の中で、個性的な存在感を示している

が、この稿ではコストリカだけに限定しておく。

日本を国際的に永世中立国として認めてもらえる可能性があることがはっきりしたので、私たちはどの国とも軍事同盟を結ばずに、憲法九条は不戦の誓いとして手を付けずにおける。コストリカと同様に世界の敬意（リス・ペクト）を受け続けることはなんとという幸せなことであろうか。他の国も徐々にドミノ倒しのようにならなければ世界全体が平和になることは間違いあるまい。

おわりに

この草稿を起こすに当たって、戦争とは何なのか、日本を取り巻く国際的な状況はどうか、日本はこれからの様に進むか、を考察したいと考えた。憲法の吟味と第二次大戦時の日本の歴史的な考察もしなければならぬと考えていて、渋谷秀樹「憲法への招待」および加藤陽子「満州事変から日中戦争へ」も入れようとしたが、この稿も分量が予定を大幅に超えたので、憲法や第二次大戦前後の歴史は別な機会に回したい。私の意図することは、アメリカと一緒にいれば戦争で負けることはないという考えの人には理想論だと

言われるだろう。そして、日本が永世中立国になるなんてナンセンスな幻想だと笑われるかも知れない。でも、それは個人の考えで、別に声を高々に論争する積りはない。この様な考えを文章に綴って読んでいただくことによって、一人でも関心を寄せていただける人がいれば幸せなことである。私の願いが実現するには長い年月が掛かるだろう。でも、理想は諦めていけない。

この稿を進める過程で、いくつかの偶然の幸運に恵まれた。クラウゼヴィッツを読んで先が見えなくなりかけたときに、ホイザーの書物が出版された。随分と助けられた。磯村英司を読み、もう一つ背中を押してくれる資料が欲しいと考えている時に、伊藤千尋のコスタリカが出版された。力強い後押しで嬉しかった。だから、「叩けよさらば開かれん」、世の仕組みとはこうなっているのかと観念論的な考えが湧いたりした。更に偶然は続き、この稿を起す切っ掛けになるようなイントロダクション（導入部）が欲しいと探している時に、与謝野晶子の「君、死に給うことなかれ」の放送があった。そして、最後の締めとなる結びが欲しいと思っていた時、ほんの数日前だが、テレビで美空ひ

ばりの歌謡「一本の鉛筆」を聞き、これだと閃いた。松山善三のこの歌詞はひばりさんには稀な反戦の歌である。恋人を戦争で失った女性の思いを切々と、悲しみの表情を湛えて唄ったひばりさんの伸びのある声は胸に迫った。この歌詞の抜粋を書き留めて稿を閉じたい。

「あなたに聞いてもらいたい・・・一本の鉛筆があれば私はあなたへの愛を書く、一本の鉛筆があれば戦争はいやだと私は書く。あなたに愛をおくりたい・・・一枚のザラ紙があれば、私は子供が欲しいと書く、一枚のザラ紙があれば、あなたをかえしてと私は書く。一本の鉛筆があれば八月六日の朝と書く、一本の鉛筆があれば人間のいのちと私は書く」。恒久の平和実現を祈って・・・。(二〇一七年一月二〇日 了)

満州をめぐる関連本の紹介

—— 旧満州国の歴史について ——

東野正

「図説 満州帝国 太平洋戦争研究会編 河出書房新社」

満州国の歴史が沢山の写真とともに解説されていて、お奨めの本です。

韓国支配の背景とその経過からはじまります。清の属国であった韓国に、日本が江華島事件をきっかけに強引に進出したことで、清との対立を生み、それは日清戦争に発展します。この戦いのなかで1894年に日本軍ははじめて鴨緑江を渡って満州に

足を踏み入れています。

勝利した日本が様々な利権を清からもぎ取るうとしていた時に、シベリア鉄道建築中で満州・朝鮮への進出を目論んでいたロシアを中心とした三国干渉により、日本は当初獲得しようとしていた利権の一部をあきらめざるを得ませんでした。そのロシアは日本が放棄した利権の一部を、例えば大連を得るなどの行為をおこなったことに対し、日本国内でロシアへの憎しみの声があがり、またロシア脅威論が大きくなっていくのです。この時に清から得た賠償金は、日本の戦費の大部分をまかなうことができ、さらに軍隊の近代化に投資できてロシアとの戦争に備えることができたのです。

日英同盟締結後、いよいよ日本はロシアに戦争をしかけ日露戦争を始めます。アメリカもロシアの極東進出に危惧を持っていて、日露がほどほどの均衡状態でいることが望ましいという考えから、なんともルーズベルト大統領は日本に樺太占領を進言していたのです。それは領土の一部でも占領していたほ

うが講和条約の際に有利になるからという考えからでした。日本も適当なところで戦争を終結させたいと考えていた日本に対して、アメリカがイニシアチブを握っていたのです。

勝利した日本はロシアの利権を引き継ぐかたちで遼東半島を手に入れ、東清鉄道なども日本に譲渡されます。清の反対を押し切り、鉄道守備を口実に関東軍の前身となる部隊も駐留させ、植民地的な鉄道の付属地（撫順炭坑、森林伐採、漁業権なども含む）の行政権を満鉄が握り、満州経営が行われてゆくようになります。

そして韓国を強引に併合し日本領とし、第一次世界大戦時には日英同盟を口実に英国の敵であるドイツが支配していた青島を攻撃して占領します。さらに中国の主権を脅かすような驚くべき内容の二十一カ条の要求を突きつけます。ものすごく強引かつ脅迫的な内容です。またロシアで革命が起こり、それまでのロシアとの協定・条約が廃止されたことをいいことに、日本はロシアが押さえていた満州北

部をはじめロシア東部の占領さえねらってシベリア出兵を行います。まるで火事場泥棒です。ここから満州支配の歴史が始まります。これまでの歴史の背景や経過が実に簡潔に分かりやすく解説されていて、歴史が整理されてきます。ここまでで本文の三分の一を紹介しました。

そして満州です。満州を日本の重工業資源の補給基地にしようとした日本は本格的に満州支配を目論んでゆきます。群居する軍閥からのし上がってきた張作霖を、はじめは利用しようとした日本軍でしたが、意のままにならなくなるとそれまでの支援をうち切って、関東軍の高級参謀河本大作大佐が中心となり張作霖爆殺事件を起こします。それをつっかけとし満州を支配しようとして、柳条湖事件により満州事変をはじめたのです。

中国で軍事行動を起こすということは、実は天皇の命令（統帥）なしにできないものだったのですが、関東軍は暴走したのです。さらに朝鮮駐留の部隊が国境を越えて参戦することも統帥権にかかわるこ

となのですが、司令官の独断で進められたのです。しかし、それは最終的には天皇にも事後承諾されたかたちになるのですが、結局関東軍は満州を占領してしまつたのです。関東軍は満州に軍政をしくつもりだったので、参謀本部が溥儀を首長とする親日政権を樹立すべきとして反対し、結局関東軍は画策して溥儀を押し立てて1932年満州を建国します。勿論本当の権力者は関東軍司令官だったので、

おなじ年に「日満議定書」が調印されます。日本が満州国を正式に承認するという内容でした。この調印の五日前に治安維持法ともいふべき「暫行懲治盗匪法」が制定されています。その第7、8条には「臨陣格殺」という権限が盛り込まれました。格殺とは殴り殺すという意味で、軍や警察は日本に反抗する者は、状況によりその場で殺害できるといふ権限です。

そして「日満議定書」調印の日に約千名の反満抗日ゲリラによる撫順炭坑襲撃事件が起りました。

翌日、関東軍が出動して、撫順から周囲十キロの村落を焼きつくす作戦を実施しました。まず山あいの平頂山村を包囲し、住民三千人を殺害したのです。生存者は十数名です。次に千金堡村では約四十名、楊柏村では約二十名が殺害されました。こちらの犠牲者が少なかったのは噂を聞いて近隣の村民はほとんど逃げ出していたからなそうです。

日本で言えば江戸時代の五人組にあたる「保甲制」というものも真つ先に作られました。十戸一組で隣人同士にスパイ監視をさせるものでした。対ゲリラ対策として、強制的に一カ所に集めて住まわせる「集団部落」も作られてゆきました。周囲に外濠をめぐらせ、高さ3mの土塀を築き、四隅に監視塔をたてる。入り口は4カ所、12歳以上はすべて指紋をとり、居住証や通行許可証、購買携帯物品許可書などを持たせ、集落内には10名以上の武装警官が常駐したのです。

満州事変は国家が承認していなかった軍事行動だったため、その時の関東軍は軍事資金調達のため、

アヘン売買で捻出した時期があったそうです。さらに、満州国建国の当初予算の見積もりでは、その収入の15%をアヘン専売収入で計上していたそうです。その後は4、5%で推移したそうですが。

1941年当時までで中国人がすでに満州で耕していた土地の四分の1が日本人に収奪されています。抵抗するものは「臨陣格殺」で何十人単位で殺されていたのです。

1937年からは満州開発5カ年計画がスタートします。計画を実質的に指導したのが商工省文書課長だった岸信介で、その手先になって動いたのが椎名悦三郎でした。岸は満州国の実業部次長と総務省次長を兼ね、事実上も通産大臣兼副首相だったのです。国家主義的計画経済の提唱者であり切れ者と評判の高かった岸は、関東軍に嘱望されて満州に招かれたのです。

岸は、昭和になってから急成長した新興財閥の日産すなわち日本産業(株)を満州に進出させることに成功しました。日産の総帥の鮎川義介とは縁戚と

いう関係を利用したかたちになりますが、日産は満州重工業開発いわゆる「満業」と社名を変更し、満鉄が経営していたほとんどの企業を引き継いでスタートしました。当時の満鉄総裁は松岡洋右で、岸の叔父の義兄であり、日産の導入と満鉄の縮小は岸のこうした人脈によって成功したのです。

多くの中国人労働者が犠牲になりましたが、支配した側の日本人による正確な記録はほとんど残されていません。例えば撫順炭坑では常時4万人の中国人が働いていましたが、その約2万5千人が毎年補充しなければならなかったそうです。死亡と逃亡がそれだけ多かったのです。虐待に対して中国人炭坑夫はしばしば蜂起と集団脱走を試みましたが、軍隊が出動して容赦なく殺害されました。「臨陣格殺」の権限が存分に悪用されたのです。死亡した中国人は穴を掘って無造作に放り込まれました。何百人、何千人と放り込まれた穴は「万人坑」と呼ばれ撫順だけでも三十カ所もあったそうです。日本が支配していた四十年間で撫順炭坑だけで二十五万

三十万人の中国人が虐殺されたと当地では推定されているそうです。

関東軍は労働力不足を朝鮮人の移入で補おうとしましたが、それでは絶対的に不足するので、その当時事実上日本軍が支配していた河北省や山東省の中国人を活用したのです。食うや食わずの貧しい中国人農民が多く、一縷の望みを託して満州に移住してきたのですが、そこには日本軍がいたのです。・・・1940年からは人狩り同然に捕まえた中国人を強制的に送り込む方式もとられました。日本にも約4万人が送り込まれ主として鉱山で働かされたのです。

鉄道が襲撃されないように線路の両側500mは農作物の作付け禁止となるなど、反満抗日の感情は増幅される一方で、そのうえ、あらゆる学校で日本語習得を強制され、朝礼では東京の宮城に向かつて遙拝させ、校庭にもうけられた靖国神廟や建国忠霊への参拝を日常化し、市街地の方々に建立された神社のそばを通る時は脱帽と最敬礼を強制したの

です。これが満州における中国人支配のやり方です。

さらに、中国人・中国語の呼称を禁止しました。

満州国人あるいは満人、満州語あるいは満語と呼ばせたのです。戦中に日本でも英語を日本語に無理矢理置き換えたのと同じ発想ですが、満州では憲兵や警官が道行く人に「お前は何人か」といきなり質問し、中国人とでも言おうなら、満州国人と言い直すまで殴りつけたそうです。・・・

日本人は一等国民、朝鮮人は二等国民、中国人は三等国民として、すべての日本人が優越感に浸っていました。列車に乗るにしても中国人は日本人と同じ車輛に乗ることはできませんでした。1940年頃から主食穀物の配給制度が実施されましたが、日本人には米、メリケン粉、朝鮮人には米とコーリヤンを半々、中国人には高級官僚や医者を除いてコーリヤンだけが支給されたのです。

しかも、中国人は米を食べてはならないとされています。実際に米を食べたとわかると経済犯として抑留し、殴打し、思想補導矯正院という名の監獄

にぶち込まれたのです。そこは殺人院であり拷問院
だったのです・・・農民ですら米を食べられなか
ったのです。食べたと疑われた農民が、証拠を調べ
るとして生きながら腹を裂かれたこともあったそ
うです・・・

ソ連が参戦する前に日本が降伏すると、ソ連の発
言力が無くなると判断したスターリンの命令によ
りソ連軍は8月9日満州に侵入します。その動きを
察知していた関東軍は、ソ連国境近くの開拓民を移
動させると疎開によってソ連軍の疑惑を招くこと
を恐れ何もしようとはしませんでした。ソ連軍の侵
攻は開拓団にとつては突然の出来事でした。8月1
2日は麻山で四百数十名が集団自決した「麻山事
件」も起こりました（方正県の日本人公墓地に墓碑
がありました・・・）

そして満州国は終焉を迎えたのです。

三十万人の中国人が餓死したと推定されている。山東省
の済南府に於いては、この数字は更に倍増したと推定さ
れている。関東軍は、この数字を隠蔽するために、餓死
した中国人の数を、この数字の半分と推定したと推定
されている。

何度も繰り返すのか

何度も

東野正

何度も戦争を

紛争を 対立を

何度も破壊を

爆撃を 壊滅を

何度も何人も命が

犠牲にならなければならぬのか

何度も爆殺され 虐殺され 陵辱され

絶望の淵に突き落とされ

墓名碑をガレキの石に刻むしかなく

何度も希望や夢が

踏み潰されなければならぬのか

歴史は繰り返すため

最終的に人間が到達する世界は

何処にも見えない

最終的に人間は何になるのか

誰にも解らない

この世は地獄なのか

ならば何処かに天国はあるのか

ここではないどこかでは

歴史はどう流れるのか

人間の発達進歩進化はどこに消えたのか

好戦的で残虐なまま

退化する悪意のイキモノなのか

畜生道を下降する愚かな

あまりに愚かな糞袋なのか

歴史に学ばない学習能力ゼロの

存在意義のない迷惑な存在ではないのか

何度も家族を失うことはできない

何度も殺されることはできない

悲惨な死を当たり前のよう受け入れ

体が吹き飛ばされ 宙に舞っても

それでも世界は変わらないのか

小学対、中学対の同窓会の件は合はせぬあり、る。

父と母にも

青春時代があつた

父の章

父の突然の死によってショックの大きかった母は、父の物を全部封じてしまい、押入れの奥、奥にしまい込んでしまったのです。

父の形見であるので私は見たかったが、母の姿を見ていると、決して開けてはならない物のような気がし、妹と共にこの荷物の話には、あえて触れないで時を過ぎてきました。

あれから45年、母の死後17年目に、父の荷物を目にする事になりました。

佐藤弘子

小学校、中学校の同級会の打ち合わせがあり、50年ぶりに会う幼なじみも顔を出していた。その幼なじみから、私の家族父母妹の写っている新聞の切り抜きを渡された。それは昭和30年後期の頃の家族写真であつた。永年無事故で、勤務成績優秀者及び保安確保に貢献した者の表彰者というページに掲載されているのです。写っている本人でさえ忘れていたものを、よく幼なじみが忘れず取つてあつたと思うと感無量でした。写真ばかりでなく、父母へのインタビュも記載されているのです。

○43歳だそうですが、若く見えますね

「どう致しまして。一本一円で子供に白髪を抜かせています」

○この20年間をふり返って

「あつという間でした。仕事柄、昼間寝ている日が多いので、非常に日が短い気がします」

○ずっと消防ですか

「ええ、昔は守備も兼ね駐在所もなかつたので忙しく、一年間に三六四日出勤した事もあります。最近火事がないのが何よりです」

○いいカラダをしていますね

「少し太り過ぎて今、20貫ちよつとあります。今さらまた相撲をとる気もしませんが、。」

○今一番ほしいものは

「男の子。子供にテレビせがまれ参っています」

○奥さんに、ご主人評を一つ

「私も毎日勤めに出て働いていますので、二の方（午後4時〜午前12時）三の方（午前12時〜午前8時）の時など炊事までしてもらってすまないと思つています」

父と母の若い時の一ページ、本当に感無量です。

これをきっかけに、いよいよ父のバンドラの箱を開ける日を迎えました。

固く、固く縛った紐。二度と箱を開けまいとした母の意志の強さを感じる縛り方である。解すのに時間がかかりそうなので、ハサミでチョッキン！母に済まないなあと一瞬思ったが、何が入っているのか、こちらの方の興味が勝つていたので容赦なくチョッキン！キョッキン！数秒で箱のふたがあきました。横17cm、縦24cm、幅4cmのアルバムが一冊。中には、モノクロ写真が隅々までぎっしり貼つてある。説明記入は一切ない。軍服姿の若い父、そして同

期の方達と見える人と二人三人で写っているものが数ページ続く。名前だけでも解らないかなと思いい写真を剥がして裏を見てみる。やはり何も書かれていない。

10ページくらい進んだところ、ちよつと気になる写真があつたので全部剥がし、裏を見ると、昭和十六年一月、第三班、兵長他参拾名、と記入されてあつた。

20歳から22歳と思われる若い青年が一糸乱れず並んでいるのです。どの人の顔もキリツとしているのです。服装もどこか垢抜けている印象を受けるのであるのです。国家機関が取り締まった写真であることがわかる。

次のページを見てびっくりした。相撲をとっている写真なのです。今までの写真と違い、B5の大きさで、それも二枚どーんと貼つてあるのです。土俵の回りは軍人が椅子に座つての見物か、応援か、対戦車は左右に分かれて待機している。相撲取りは、皆立派な廻しをつけている。行司は和服に袴のいでたち。応援？している人々は真剣な顔をしている者もいれば、笑顔の者もいる。とてもいい写真である。

父のもしかしたら、この真ん中で取り組んでいるどちら

かが父なのかなと思ったりもした。私が物心ついた時から父が相撲好きなんだと思うことがたびたびありました。実際、消防隊の人達と相撲を取ったりしていました。大相撲の時期になると、ラジオに耳を傾け、巖戸の力士が勝つとニヤニヤし、敗けるとシュンとした姿をよく見ていました。

また、仕事で取り組みが聞かれない時は、私にちゃんと取り組みの結果を頼んでいたのが、おかげで私は大の相撲ファンになり、ほとんどの力士の四股名を覚えてしまいました。その当時の大横綱吉葉山は特別大好きで、父との会話は相撲の話で盛り上がったものでした。

父にとって戦場地での相撲はこの時が最後だったのかなと写真を見ながらそう思いました。

その後の写真のページは、隊の仲間一人一人貼ってあったが、ページが進むにつれ写真を剥がした跡が目立つ。その後は、戦闘機や戦死者の葬儀と思われる写真が続いた。

最後のページには、父と馬の写真が貼ってある。数十頭の馬の前に立っていたり、馬に乗っている仲間、馬の頭をなでている父、馬にまたがり遠くを見つめる

父。その姿は、もう相撲を見て笑っている顔とは程遠く、険しい顔。軍服姿に軍刀、直立不動の姿は、戦争へとかき立てられ、戦場へ行く者、送る者を写している。言葉はなくとも、この写真が言葉を発していると思えました。

このアルバムの下にそっと隠れていたのが、辞書と愛國百人一首、ノートであった。一つ目の小冊子を手にとってみる。表に愛國百人一首早わかり、建軍精神普及會発行の題が書かれてあった。

この時代に百人一首か、と思いい一枚目をめくる。

はしがき

この度、日本文学報、國會短歌部会では、愛國百人一首を選定することになり、先ず選定委員に佐々木信綱、斎藤茂吉、北原白秋、窪田空穂、折口信夫、尾上紫舟、太田水穂、川田順、吉植庄亮、齋藤瀏、土屋文明、杉村英一の十二人を委嘱

一、 臣下の作品からのみ選ぶこと

一、 小倉百人一首に載せられたものは字句の異同に

拘わらず、すべて省くこと

一、 読み人しらずは省くこと

一、明治元年以前の物故者の作に限定すること。

一、作者名の呼稱は慣習に従うこと。

の選定方針を定め、愛國の義を廣義に解して神を敬ひ、祖先を崇め、國土、自然を讚へた歌、親子、夫婦の情を歌ったもの、鉾山、農村、漁村に関する作をも収め、なるべく難解なものは避け、人に膾炙（多くの人に好かれ知れ渡る）こと）しているものを選ぶこととし、この愛國百人一首が広く國民に愛誦せられ皇國に傳統する精神文化の眞髓と、その純粹さとを味い、情緒を通じて鞏固なる思想的維新の確立せらるる日の、一日も遠かならんことを期待して、敢えてこの小冊子を公にするものである。

昭和十七年十二月八日 著者 識（原文のまま）

選定された百名の歌人の名が連なつて、それぞれ短歌が掲載されている。読んでみると、ほとんどの歌は、戦争参加、参戦、戦死を讚えたものに思える。國民を戦争へと誘導する小冊子ではないかと思へた。こんな教育をしたのかと思うと、いやおうなしに戦場へ行った父や同期の人達が哀れでならない。

小冊子の裏に父が書いたと思われる文字が残つ

ていた。

*注 敷島大和心 人 朝日匂ふ山桜花

19年5月人間爆弾「桜花」

昭和 年（走り書きのため読みとれず。十七か十九か）

満州 第八〇七部隊

渡満

この残されたわずかな文面から窺えるのは、意を決し戦場に向かったような気がする。その後一度故郷に帰ってきたが、再び戦場へと渡つていった父。故郷への帰還は母との結婚だったが、新生活は一年にも満たず戦場へとかり出されたのであった。

残された家族もまた戦争の犠牲者であった。食べるものもなく、せつかく授かった男の子を亡くした母は、申し訳なきで父にずっと詫びていたと思う。のちに今一番ほしいのは、とのインタビューに“男の子”と答えた父の胸の内は、戦争に駆り集められ、我が子を見ることもなく、葬ることも出来なかつた悔

しきから咄嗟に出た言葉ではなかったのでは、と私は思った。

戦後女の子二人に恵まれた父は、亡くした男の子を育てられなかった分、私と妹を大事に大事に育ててくれた。戦争の話は一切聞いた事がなかったし、話してもした事がなかった父であったが、今こうしてアルバムや小冊子を見ると、父は戦争の事は語れなかったし、語ろうとしなかった事、解るような気がするのです。

私は父が大好きでした。父のすることは何でも真似っこしたものです。早く大きくなって、父のようなカッコいい消防士になりたいと本気で思っていました。残念な事に、当時女性の職業として消防士にはなれなかったけれど、父には「私、男だったら良かったね。なぜなら父さんのような消防士になりたいから、」と言うと、いつもニコツとして「ありがとう」と頭をなでてくれたのです。それがうれしくて、何度も何度も言っていた気がします。

今考えると父は、私が本当の男の子であればなあ、と思っていたのではなかっただろうか？

父との別れは突然の事だったが、こうして残された形見を見ながら、父の思い出に話しかけています。

注・兵学校70期の関行男大尉を隊長に神風特別攻撃隊が編成された。4隊に分けられ、それぞれ本居宣長の古歌「敷島の大和心を人問わば朝日に匂う山桜花」に因んで「敷島隊」「大和隊」「朝日隊」「山桜隊」と名付けられた。

追記

父が過ごした昭和16年から昭和20年の青春の日々、何が起こっていたのか調べてみました。NHK特集の中で南方での戦いが放映されたものもあり、私なりに解釈し抜粋したものを箇条書きにしてみました。

昭和16年(1941)

1月8日 東条陸相「戦陣訓」を示達

3月3日 国家総動員法正公布

6月6日 大本営「対南方施策要綱」決定

7月2日〜9日 大本営 関東軍特別演習発動

*満州に七十万人の兵力集中

11月11日 兵役法施行(丙種合格も召集)

*甲・乙・丙種の最下等級

12月1日 米・英・蘭 開戦決定

12月8日 ハワイ真珠湾空襲

12月10日 マレー沖海戦 グラム占領

昭和17年(1942) 東京空襲(軍人死傷)

マニラ占領 ジャワ島上陸

3月18日 米陸軍機↓東京・名古屋・神戸を初

空襲

5月1日 ビルマのマンダレー占領

6月5日 ミッドウェー海戦(四空母喪失)

7月11日 大本営南太平洋進攻作戦中止決定

8月7日 米軍上陸によりガダルカナル島に

が陥る(ただレイ排て 五千人の

うち、生き残った一木支隊壊滅

8月21日 米軍に攻められ続

昭和19年12月 * 日本軍なす

10月26日 ガダルカナル島の攻防を巡り南大

西洋海戦

11月14日 米ソロモン海戦

12月31日 大本営 ガダルカナル島撤退決定

昭和18年(1943)

4月20日 東条内閣改造へ(戦争継続)

5月29日 アッツ島の日本守備隊全滅

6月25日 学徒戦時動員体制確立決定

9月23日 台湾に徴兵制実施決定

10月2日 在学徴集公布 文科系の学生徴兵

12月1日 第一回 学徒出陣

(11月マキン・タワラ両島守備全滅)

12月21日 天皇 徴兵適齢を一年引き下げ

* 島を撤退時、戦死・餓死者は二万五

千

千 撤退者七十一万人

昭和18年に入った年1月から2月にかけて

で、あったが、その後も戦う事を諦める訳でも

なく、若き青年・学生を有無も言わず徴兵し

続ける

昭和19年(1944) 大日本軍受ける

1月7日 インパール作戦開始

* 別項一記 戦死者百余人

2月6日 米軍上陸↓マーシャル群島

クエゼリン・ルオット両島の守備

全滅

2月15日 学徒動員態勢の徹底

*国民勤労体制の刷新

6月5日〜7月 マリアナ群島、サイパン島

日本守備隊全滅

北九州へ、B 29空襲

7月16日 米機動隊部隊 沖縄を空襲

10月10日 大本営 台湾沖航空戦での大戦果

を発表(*事実は戦果なし)

10月12日 陸軍省 満十七歳以上を兵役に

編入(11月11日 施行)

10月25日 海軍 神風特攻隊

レイテ沖で初めて米艦攻撃

11月24日 米機B 29 東京初空襲

(航空距離五千キロメートル

爆弾搭載最大九トン)

昭和20年(1945)

3月9日〜10日 B 29約三百機 東京を大空襲

無差別夜間爆撃二十二万戸焼失

死者十二万・罹災者百余万人

その後、3月13日、名古屋

3月14日 大阪 大打撃を受ける

3月17日 神戸

4月1日 米軍 沖縄本島上陸

(6月23日 守備軍全滅)

6月8日 最高戦争指導会議にて本土決戦準備

8月6日 広島に原爆投下

(年末までの死者推定十四万人)

8月9日 長崎に原爆投下

(年末までの死者推定七万人)

8月15日 天皇「終戦」

(この三日後、満州国皇帝退位により)

満州国解消)

昭和19年1月7日、インパール作戦開始

戦懐の記録(NHK放映)より

陸軍上層部による責任なき作戦認可で軍団が動か

された戦争であった。

大本営↓南方軍↓ビルマ方面軍

最後受けたのが、第15軍師団であった。第15軍師団

(詩)

穴薬師

(あなやくし)

佐藤 岳俊

鎌倉権五郎景政の矢で射ぬがれた片目

ここの水で洗ったがら それ

ここの鰻 みんな それ

メッコになつたのす 神戸

そのの陸中大石駅前りくちゅうおおいしえきまえの

細い町並み 越で

杉林で風の泣ぐ声聞いで

カモシカに見つけられで しまったのす

よそ者来たな だ

反まやすしながら 見抜いで 国いだのす

穴薬師のある杉の大木

大木にかぐれで

こんもりど 屋根見えで

祭りの日など

男と女の影 蟻になつて

沈んだ村の湖の橋わだつて

横黒線の線路またいで

そのの岩滑沢 覗ぐと

谷の底の水の中に 何匹もの

メッコ鰻 泳いでいだつたのす

青い空の下で

兒玉智江

『蛍の光窓の雪』の有難さを忘れ、すばらしい電気
の力の世の中になり、有難いと思ひ込んでいました。
が今、福島第一原発事故の放射能汚染が毎日のよう
に、新聞やテレビなどで報道されている。6年が経つ
と言うのに自分の家に戻れない人達がいる放射能汚

染の地区。電力は平等に使っていないながら、こんな不平
等な生き方があっていいのだろうか。

『百聞は一見に如かず』というフクシマ原発視察支
援ツアーでの誘いを受け昨年5月参加する事が出来
た。フクシマ原発視察は行くことが困難だった福島訪
問である。

南相馬ICを下り、途中から案内をする人がバスへ
乗り込み、その案内人の通り、最初向かったのは浪江
町にある福島第一原子力発電所の事故放射能汚染地
域である『希望の牧場』の牛牧場であった。牧場入口
付近には10頭近い牛の骸骨が並べられてあり、トラック
には夜、蛍光灯が牛の形に光る彫刻が積んである。そ
の車で、東京の東電本社、首相官邸にまで出かけて放
射能汚染を訴えたのだと言う。牛約3千5百頭、豚3
万頭、鳥44万羽が飼育されていたが、2012年に
は豚、鳥はほぼ殺処分されたとの事であったが、牛は
放射能汚染当時、約20軒の農家が700頭の被爆し
た牛がいたと言う。

『希望の牧場』では324頭の放射能汚染の牛を飼ひ、
逃げないように柵を作り管理していた。証拠隠滅にな
ってしまふ恐れから処分の命令に従わず放射能汚染
の恐ろしさを訴え続けている。

祭りの日など

男と女の影 蝶になつて



『希望の牧場』の入り口付近

花巻のある会場で講演をお聞きしました。その時の先生が「風の向きが海の方へ行きラッキーだった」と話された。風の向きで東北全体が汚染されることからまぬかれた事を言っているのであつたが、海の方でラッキー、それでは天に吹き飛んだからいいわけでも

ないのだ。そのあたりが必ずどこかに舞い下り不明な汚染で悩むことになるわけなのだから。そして、風の向きが当たってしまった地域がどんな思いでラッキーの言葉が飲み込めるかを想うと胸が詰まった。

そして、今年の2017年4月13日フクシマ原発被災地復興支援ツアー北上の参加者を募り実現した。主催者の中にフクシマ原発視察に1度参加した私が入っている。福島第一原発事故になって6年目の放射能汚染を黙って見過ごせない人達の声がけである。25人締め切りのバスツアーであり、満杯になった。皆、原発の恐ろしさを気にかけている人達である。日帰りの予定で、ガイドが二人バスの中で詳しく説明しながら、福島第一原子力発電所が見える近くまで行くことが出来た。

南相馬市小高区と浪江町の境界にある希望の牧場は330頭の牛を飼育していた。前より増えている。放牧されていたか、どこかの農家から頼まれた牛を引き受け飼っていたのかもしれない。

浪江町、双葉町、大熊町、富岡町、飯岡村内には家へ帰れない困難区域が広がっている。

汚染作業で出た汚染土などを入れる袋のフレコンバックが昨年より増えて山積みになっている箇所が、

一か所ばかりではなく方々に見える。

・フレコンバックが積み重ねられている。ここばかりではない。見えないように白い塀が廻しているが隠しきれない。



双葉町を通った時、この道路の上には『原子力明るい未来のエネルギー』と書いた横断の看板が掲げられていたと言う。「負の遺産」として撤去を反対したそうだが、撤去されてしまっただけで今はない。

2回目の訪問4月13日は富岡町の桜並木道は見事な大木の桜が満開、しかし、線路を隔ててなぜ向こう側のつつじは切られてしまったのかを訪ねると、JRと管轄かんかつが違うのが原因と言う。桜は市民が守ったと言う。そして、桜並木の側に家が建ち並ぶところでバスから降りて歩いた。その一步横側の道へは入れないようにバリケードが張りめぐらしている。立派な家が建ち並んでいるが、人は入れない家で、一步こちら側の家に入れる。この境界線はマイクロシーベルトによるものなのでしょうか？不平等を感じる。第一こういう原発事故がある事も不平等なのだ。

『原子力明るい未来のエネルギー』の横断看板が掲げられ、たいていの皆が明るい未来と叫んでいる中、福島第一原子力発電所が出来るのを反対した人達がいた。原子力の核の恐ろしさ、プルトニウムの怖さを知っている人達が言う大切な事に私たちは耳を傾けず聞こうとはせずに、わからないまま右習いをしてしまった。多数決で決めてしまい福島第一原子力発電

所ができてしまった懸念がある。

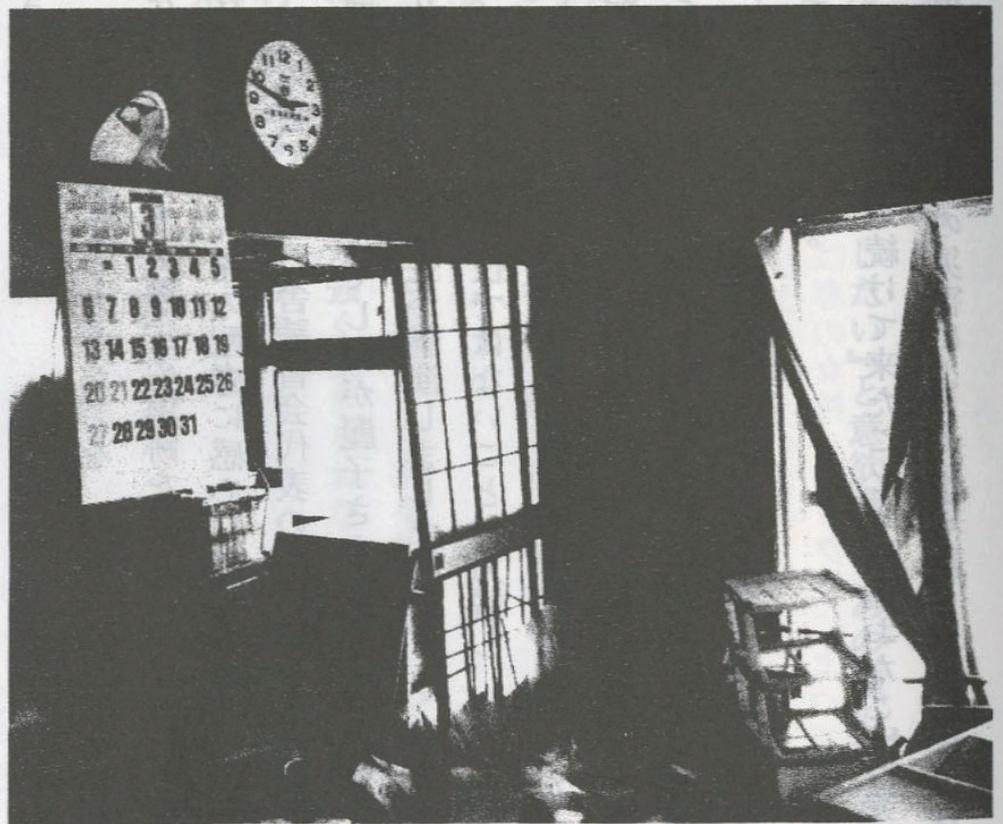
私たちは電力のおかげでいい暮らしをしてきたかもしれない。そのつけがこういう形の仕返しがあるなどひとつも考えていなかった。

今、現在は放射能汚染プルトニウム、プルトニウムの怖さが分かっているにも拘わらず、原発からプルトニウムが生ずる事がわかっているにも拘わらず、どうして再稼働されなければならないか、また続けていかなければならないのか。認めている政府の気持ちもわからない。

地震が来ないからと言って原発を稼働しているところも、沢山の放射能汚染があると聞きます。皆の力で世界から原発を無くしたいですね。

水力発電、太陽光発電、風車発電などのような放射能汚染が発しない電力で、生き物が心配せず日常の生活が送れるような日々を願うのである。

文世史
岩手文世史を
読む日
の
私
は
煙
と
共
に
生
き
行
く
つ
り
で
す
。



撤去の命令があったが「負の遺産」として残している。
時計は地震が来た時、止まったまま。
イノシシが住んで荒れ放題。

「岩手文世史を
読む日
の
私
は
煙
と
共
に
生
き
行
く
つ
り
で
す
。」

次世代に受け渡す 女性史を

小原道子

私は2015年10月9日〜11日迄の三日間「第12回全国女性史研究交流のつどいin岩手」に三会場（遠野・大槌・宮古）とも、家族の協力によって参加しました。

二度とない岩手での催しに、機会を与えてくれたのが、言うまでもなく『麗ら舎読書会』『岩手女性史を紡ぐ会』からのお誘いがあったからです。ありがとうございました。

全国から集まった方たちを、バスで移動して横断しながら、東日本大震災の傷跡を見て頂くようにしてくれた事務局の人達の配慮に感謝しました。

この会で、麗ら舎読書会代表の小原麗子さんが記念講演をする予定でしたが麗子さんのご都合が悪くなり、大門正克先生が講演しました。

大門先生は代役ではないことを力説し、2011年に発行した『自分の生を編む』の編集に携わったことや、1900年代に和賀町の生活記録調査に入ったことなど、深い関わりをもってきた経過の説明もありました。麗ら舎では悩みの相談までしましたと、話されました。

『千三忌』を続けて来たこと、『別冊おなご』の発行、更に3・11の災害による教訓も話され、幅広い活動

の紹介に感動をいただき、満場の拍手が送られました。自由を求め書き続けた通信、18号発行に至るまでの力量、特に『ほのおの娘』『つらら娘』を高く評価、本出版の指導者として大役をはたされたことに、尊敬の念を抱きました。

私も元JAの職員として、農村女性の地位向上とは何ぞやと、問い続けてきた一人。農村女性の暮らしと記録を、語り継ぐ使命があるとずっと思ってきました。その時代に夢中で精一杯生きてきた先輩たちがいたお陰で、私たちは生かされてきました。

田を作るのを止めて、詩を作り始めるのではなく『田畑も作り詩も作る』ことによっておなごの歴史を書き換えていくことにある。このことを念頭において出会った仲間たちから勇気をもらい、山を登る目標のように、私は畑と共に生きて行くつもりです。

2001年3月30日、私は次のようなことを、生意気にも発言していました。

『地道に生きてきた農村女性や、夫と町議を務めた

女性など、町内の女性の歩みを残したいし、講座で学んだことを活かしたい』と意欲満々。あの頃の思想は、今も変わらない。

『二人の先生』を執筆中、原稿用紙12枚完結。私は一日に一度はペンを持つよう心がけてきました。書くことが好きで、幼いころは“根っこ掘りワラシ”と呼ばれ、亡母と一緒に年中行事は、恒例となりました。

農業と言う生産の場で、自然を相手にしっかりと大地に根をおろし、力強く生きるおなごたちを応援し、農村を代表するキャリア・ウーマンの姿を追い続け、未来を想う。

並み大抵な楽しみ合の、大抵き日の楽い、大抵思へ出

カタクリの花

小原道子

大子供のころ、カタクリの花を「カタゴ」と、呼んでいた。雪解けを待ち、真つ先に上の山、羽黒神社へカタゴを採りに行った。途中には、雨降り花っこ、キクザキ一輪草の群生もあって、小さな胸を躍らせた。萌え出たばかりのカタゴの葉を、見つける度に歓声をあげ、大喜びでたくさん摘み取り、家に戻ると、お湯にさっとくぐし、手でくちやくちやに揉み、茎は千切り、こきながらふうーと吹いてみる。すると葉は緑と白に分かれて膨らみ、たちまちめんこい風船に変身するのだ。まるで蛙のお腹みたいで面白い。得意になって、何度も繰り返し返しては吹き、誰が一番上手に膨らませられるのか、競争をして風船を作り、

並んだ数を数え合った幼き日の楽しかった思い出が蘇える。

また、杉林に囲まれた傾斜地に通称「さがすら」と呼ばれる堤、金比羅山があり、竹スキーや下駄スケートをして遊んだ。辺り一面にはあの美しい紅紫色のカタゴが咲き乱れていた。

ある日、お茶売りのおじさんが、せっせと土を掘っているのに出くわしたことがある。何をしているのだろうか、不思議でならなかったが、薄気味悪く怖かったので、逃げ足で通り過ぎた日のことを忘れない。

あの深い地下茎からでんぶん粉がとれることを大きくなつてから知り、その訳が分かった。風邪ひきには馬鈴薯のクズ湯だった。春の訪れとともに静かに咲くカタゴを見ようと、沢内や展勝地の奥山へも出かけてみた。近場では成島の昆沙門さまや、賢治記念館の胡四王山にも登り、カメラにおさめた。

一昨年は白いカタクリの花がクローズアップされ、新堀の戸塚森公園も賑わった。人の訪れを待つかのよう、白い花のカタクリたちが「ようこそ」と、出迎えてくれた。

北国の遅い春は春の女神、カタクリによって幕を開けるのである。

汽車

多田テール

今日
鬼柳の叔父様（おんちやま）が
日の丸の旗で見送られ
江釣子駅から黒沢尻駅へと
旗と汽笛の音を残して
汽車でいってしまつた

同じ様にして出征しただろう
父の記憶はない

「今日も父ちや来ながつたナ」

二人の兄は復員する父を

今日も駅に迎えに行つたが帰らなかつた

その夜

寒い土間に兵隊の服を着た

写真で見た父が立っていた

一夜開けると

部落の人達が沢山集まつて来た

「父ちゃんが南方から帰つて来た

ガタルカナルから帰つて来た」と

兄達が跳ね回つた

私も良くわからないが兄達の

後について走り廻つた

高野へ汽車が来た

それから間もなく

一番上の姉ちゃんが

木炭トラックでお嫁入り

荷台の上でパチパチと

火の粉が上がり

荷物と一諸に

平和街道を行ってしまった

今日

私は春の夕暮れ

萱つぼけの中で 一人で泣いた

姉ちゃんの里帰りは横黒線で

汽車に乗って帰って来た

必ず二つ泊ると汽車で帰って行く

私は線路端まで行き手を振り送った

姉ちゃんも汽車の窓から手を振り

小さく消えて行った

しばらくして

二番目の姉と二人の兄は

原道子

高校へ汽車で通った

行くときも帰る時も皆んな

汽車

腕時計を持たない百姓は

汽車の汽笛と列車を見て

生活した

二番目の兄が東京へ集団就職する時

始めて別れることの切なさ

寂しさ悲しさを知った

蛍の光の音楽が流れると

大勢の見送りの中で泣いた

汽車が見えなくなるまで

人が誰も居ないプラットホームで

母と私は泣いて居た

汽車は出会いと別れを乗せて走った

汽車は出会いと別れを乗せて走った

汽車は出会いと別れを乗せて走った

汽車は出会いと別れを乗せて走った

父と

旧満州国のこと

及川 恵美



一、はじめに

二〇一七年七月、佐藤恵美さんと出会いました。それは私が趣味で学んでいる高橋瑛子朗読教室（てのひらの会）で、麗ら舎発行の詩集「詩もよう」を読むという発表会をアスピアと北上市詩歌文学館で行いました。そこに、詩の作者の方々が聞きに来てくださり、そこで紹介されました。その時は中国からの引揚者です、私は六歳でした。という事、私も中国からの引揚者で、終戦は四歳十か月でしたとそんなお話をしただけででした。その後お会いし、誰とも話すことがなかった幼い日々のことなど、頬を伝う涙を指で拭いながら、話し合いました。

父のこと、書いてみないかという事になり、父が生前書き残していた「履歴」「敗戦逃亡日記」を読み返しました。父の出生から学歴、渡満から終戦、引揚までを（その1）とし、佐藤恵美さんご夫妻のアドバイスを戴きながら私なりに綴ってみました。

父の文章は、私には判断のつきかねることが多々あり、原文のままといたします。

一、父、高橋長三郎の履歴

(一) 出生

大正二年十二月二十三日 胆沢郡八幡

未明出生、実は三男であるが後妻である祖母の男子が私の兄として届けてあるので戸籍上は四男となる。

母は家付き娘。父は同村上中、船塚よりの入婿である。

私が四歳のとき妹「けさの」が生まれ、その後ずつと祖母に育てられ、殊の外祖母に可愛がられた記憶がある。

家は貧乏で父は「相続とり」（作男）、母も「相続とり」をした事があると聞く。

(二) 入学

大正九年四月一日 佐倉河村尋常高等小学校八幡分教場入学。

昭和三年四月 岩手県立水澤農学校入学

昭和九年 県立六原青年道場入所 同年、徴兵検査を

受けたが第一乙種になる。更に、この年の八月に第一回長期修練生として入場。長期修練は十七、八名で各人に何等かの技術を授けて農村にバラ蒔き、以って振興の基

礎にしようとしていた。私がやるようになった仕事は開墾用のトラクターの助手。翌年一月長期修練を終わるころには一人前にトラクターを操って助手を使いながら開墾をやるようになった。

(三) 就職

昭和十年四月 県立六原青年道場模範農村部人夫

仕事はトラクターを一台持って開墾することであり、移住者と合宿で働く。月給八十銭。

昭和十一年二月 農林省農用機械講習所を出る。

埼玉県川口市にある前期講習所に県から派遣されたのは、私と助手岩淵五郎君、六原道場の自動車運転手小田島君の三人で三週間受講し、最後の日、特殊自動車運転免許試験に合格。その後月給一円となる。

(四) 渡満

昭和十二年二月 模範農村部を辞する。 渡満す。

農村部で開墾や水田の床締をしていたが、和賀郡藤根村より満州に行つて開拓事業をやっている小原久五郎氏と小松先生がトラクター技術者を必要しているとの話が

あり、私も乗気になって、二度小原氏に面会。話を決めて渡満することにした。

二月二十五日、長兄の賛成を得て渡満を決す。

三月一日、部落青年団の見送りを得て、金ヶ崎駅出發。

仙台にて急行に乗り換え、小原久五郎氏と一緒に、

東京拓務省にて移住者の証明を受け海拉爾^{はいらる}迄四十円位の

汽車賃にて乗車券を買う。神戸より大阪商船「うらる丸」

にて出航。大連上陸。超特急「あじあ」にてその日のう

ちに哈爾濱に着く。一泊し翌日、浜州線に乘車し、その

翌日、三月八日午後二時ごろ海拉爾に着く。小原久五郎

氏の甥兼吉氏の出迎えを受け、呼論貝爾開拓組合の宿舍

に一先ず落ち付く。

一週間ぐらい同居し、兼吉君が省公署に話をつけ、三

月十五日付で農政部内興安北省公署に雇員として席を置

くことになる。

昭和十二年（康徳四年）三月十五日

新巴爾虎左翼旗雇員薪水 七十五円。

仕事は新しく開設される旗営農場勤務だがまだ開設さ

れぬので、省公署勤務。同僚として同時に採用になった

ものは、小島喜一、南里寿一、小川鉄雄、中田英夫（後

に三原）、小中朔男、堀田勝人 等である。当時の省公署の勸業科は三塩属官、辻技師、八幡雇の日系三名、蒙系五、六名の陣容であった。

四月新巴爾虎旗農場への（小麦、燕麥の蒔付）応援を

終わり、私が首領となり、トラクターに乗り新巴爾虎左

翼旗ハンダガヤに乗り込む。海拉爾の南方一八〇軒、同

行は私と中田、小中、堀田の四名。どちらの農場も主体

は蒙古人青年の就農、啓蒙。ハンダガヤに移転するころ

はすでに蒙古語の単語を少し覚えていた。

ハンダガヤの警察分駐所長はアラクレヤ・バクレー、

アッサンから同行した蒙古人はノンジ、これは農場勤務

中私の良き助手であり友人であった。この年は蒙古色生

活。開墾のみ。旗参事官は酒井二郎、技師二宮、同県人

黒沢尻産織笠雇員。

昭和十二年（康徳四年）九月 旗公署勤務を命ぜられ

る。但し、冬期間のみ。場所はアムコロ。

昭和十三年（康徳五年）四月 再びハンダガヤに戻る。

昭和十三年（康徳五年）十二月 新巴爾虎旗農場勤務

昭和十四年（康徳六年）一月 委任官試補となる。

昭和十四年（康徳六年）十二月 帰省 結婚のため

昭和十五年（康徳七年）一月十四日 江刺郡愛宕村小

澤兵助長女と結婚。一月十八日出発帰任す。

二月農場着、ナイジンブラクにイワンノウイツチ・カズローフの世話にて一露人の家に間借りす。世帯道具一式を。海拉爾にて購入。六十円ぐらいだったと記憶す。当時の給料百七十円位。農場事務所まで八軒、更に現地まで八軒なり。

当時のナイジンブラクの警察署長は千葉県恒川英二
昭和十五年（康徳七年）一月 委任官技師となる。

昭和十五年（康徳七年）十月十三日 長女恵美誕生。

出生のため帰省せしむる予定にて海拉爾迄着て、旅館
北海ホテルにて出生す。暫く海拉爾の裏通りに小さな家
を借りて産後を養う。

当時の新巴爾虎旗参事官茂木弘毅、子供を連れて現地
勤務でもあるまいと旗公署勤務となす。

昭和十六年（康徳八年）九月興安北省公署産業科勤務

昭和十七年（康徳九年）八月 教育招集 牡丹江駐在
の輻重自動車隊に於いて、九十日間教育を受けた。この
教育を受ける為妻を帰省せしむ。教育終了後、十二日間
帰省を許されて、妻を迎えに帰ったが妊娠中の為単独で
帰る。

昭和十八年（康徳十年）三月三日 長男 秀樹出生。

六月釜山まで迎えて、妻を呼び寄せる。

昭和十九年（康徳十一年）高等官試験に合格。

八月 官吏養成所たる大同学院に入院。十一月卒業す。
卒業と同時に高等官技師となる。公安北省産業科勤務

昭和十九年（康徳十一年）十一月三日次女貞子出生

昭和二十年（康徳十二年）五月公安総省勸農模範農場

技佐。六月農産部長兼庶務部長。

昭和二十年（康徳十二年）八月十五日 終戦

三、父の「敗戦逃亡記」

一九四五年（昭和二〇年）八月九日、いつもの通り勸
農模範場に出て、事務をとっているとき、人夫（中国人）
の話で、ソ連軍が越境して攻撃を開始していることを知
った。ハロンアルシャン七道溝付近まで来たような噂だ
ったが、当時うかつにも、日本がそれほど弱っていると
も知らなかったし（またいつもの様に関東軍が直ぐ追い
返して、かえってソ領へ押し入って行くだろう）と考え
ていた。前途に少しの不安も感じなかったのである。

その日の午後、省務署から電話があつて「ソ連と開戦
したが情勢がどう変化するか判らぬから取りあえず、俸

給、給料を二か月分前払いしておくように」と連絡があったので、豊川技師にその準備をさせた。

夕方になって、興安街に毎日用事に行っている農夫が帰って来ての話によると、街は大変な騒ぎで、負傷者はほとんど前線から帰って来るし、日本人はみな荷物をまとめている。という話だったが、まだ、私達は引き揚げなければならなくなるという事までは考えなかつた。

暗くなる頃、連絡に行った赤地技佐の話で、始めて事の重大さを知った。

それはこうである。ソ連の落下傘部隊は既に興安を距てる七十軒の地点に降下した。戦車は国境を越えて進撃している。という情勢なので省公署も移動を決意し、トラック、馬車で西科後旗に行く予定であるので、家族連中は食料の用意をしているというのである。

その晩、牛疫の予防注射に付近の部落に出している実習生を呼び寄せるために乗馬で連絡員を出した。後、嚴重な燈火管制をしてどうやら寝についた。

翌十日、赤地技佐が街に行つて来たというので、話を聞くと既に街の日本人は移動を開始したという。

勸農模範場は、省が勸農模範場を通して農事試験場に

出る予定なので、その際合流できるように、公の書類、または、個々の家を整理するようにとの連絡であつた。

この日も農場の仕事はやる。

折角丹精を込めた家庭菜園も、トマトや茄子は小さな実を結び、胡瓜も収穫が出来るようになっていた。

午後、実習生（中国人）が帰つて来たので、大事にとつてあつた白麵を出してやり、「弁当を作るなり、そのまま持つなりして、今晚の中に家に向かつて出発するように」と言つて暇をやつた。

興安街の方を見ると、赤い夕陽の影に敵機が一機飛んでいたのが見える。

夕方暗くなりかけた頃から、徒歩、又は馬車で、山奥をさして避難する日本人の姿がチラホラ見えるようになった。

家では最後の晩餐として、ありつたけの材料を出して料理を作つたが、満足に落ち着いて箸をとる気にはならなかつた。

夕食後、恵美の靴がないことに気がつき、手持ちのなめし皮で、手を痛くしながら靴らしい恰好のものを作つた。妻はそばで、明日にも発つ「落人」の準備で、針を使っている。子供たちは何も知らずに枕を並べ、無心に

眠っている。薄暗い五分芯ランプの火影に照らされた私達の姿は、第三者が見たら百年位前の原始的な姿に見える事と思う。

明日持ち出す荷物の話、鶏の話、畑の話、色々の話をしたが、また、この地に絶対帰れないとは考えたくなかつた。また考えられなかつた。ただ、妻との話ではまた帰つたとしても、家の中の物が、そのまま残っていることは考えられないという結論になつた。

夜中頃から、街を歩いて来る人達が急に増えた。リュックサックを背負つてその上に子供を乗せ、両手にトラックか風呂敷包みを持っているという格好である。

遅く来ても一寸休んでそのまま、また歩き続けて行く人もあるし、農場の小屋に眠るひともある。

この人たちの世話をして、着の身着のまま床に入つて、一寸まどろんだが、暁方の鶏が啼いた後で二時間位も寝たろうか。

翌十一日、朝連絡を街にやったら、十一時頃、省の機構が移動して来るという話があつた。愈々出発が間近に迫つたわけだ。私は赤地、それから山林部の技佐と三人集まって相談し、兎に角、場費の預金を全部引き出し、一昨日連絡のあつた二か月分の給料を支払うことにした。

私が馬車で町に預金引き出しに出掛けた。十軒位の距離であるが街から引つ切り無しに人がやつて来る。中央銀行の出張所に行つたら日本人の支店長が只一人、腰に日本刀を差し、満蒙人（現地人）を使って無制限に金の払い出しをしていた。三万円位引き出したように覚えてゐる。

前線から負傷者が帰つて来る。血を流して駅前寝ている人もあり、馬車に乗せられて病院に收容されてゆく人も見える。

誰かに頼まれた郵便貯金も引き出し、十時ごろ模範場に帰り、俸給を支払つた。残りは山林部の技佐が一万円、私が一万円、赤地技佐が八千円位、分けて携帯する事にし、西科後旗等の山奥に行つてからの事務費にする積りである。

午前十一時過ぎ、省公署から電話があつて「午後二時ごろ汽車が出るからそれで避難するように」との事だ。道論、行先も何も話が無い。然し、山にもぐり込むという感じよりは汽車でという気持ちで、場内は皆その気持ちになつた。日本人は、皆相談して荷物は行李一つ位とし、馬車で出かけることにした。

荷物を準備して、後、家を荒らしに入り込む人達に「日

本人の出かけた跡」を笑われないように幾らか片付けた積りだったが、片付け切れなかつた。最後まで未練を持ったのは三冊のアルバムだったが、遂にそれもそのまま残す事にした。

妻はその中から、私達が満州について初めて撮った写真と子供のを二、三枚剥がして風呂敷包の中に入れた。

私の胸のポケットには先刻満人に金庫を明け渡す時、金庫の中から見つけた狼殺しの猛毒薬「ストリキネーネ」の小瓶が入っている。

嫌な風を露骨に表す満人をむりになだめて、一人の御者に二台の馬車を出させ、それに日本人が全部、大人十人、子供七人と荷物が載せられて、街の方に出発した。今考えると恐らく私達の後ろ姿が見えなくなるや否や、日本人の官舎は戸を蹴破られて、略奪された事と思う。

約八軒の興安街までの道は、街の方から避難して来る人達で一杯だった。リュックを背負っている若い娘、子供の手を引いた母親、背負った荷物の上に子供を肩車に乗せている年配の男、道路の側に荷物を降ろして休んでいる夫婦等、みんなうつろな目となにかしら焦りをみせた顔色――。

照るでもなく、曇るでもない八月の日中に見た、あの

沢山の顔は今までの「日本人らしい」誇りは捨てた顔だった。それらの顔の何れもが、自分等の反対の方向に馬車で行く私達を振り仰いでみていた。あの人達は最後の避難列車が出るという事を知らされていないのかも知れない。汽車は午後二時の出発だというのに、一時頃、漸く街の端れに着いた。街に人影はまばらだった。

街の中央に着いた時、北方から飛行機が三台飛んでくるのが見えた。

「あつ、飛行機！」

「敵だろうか、味方だろうか」

「味方でせうや」

「いや、あれは敵だ」と、軍隊の経験のある、農産部の技師がさも自信ありげに言った。

「然し敵機なら、爆弾を落とすだろうが、一向に落とす気配がないじゃないか」私がそう言い終わるか終わらない中に、その飛行機から黒いものが二、三個づつ、離れて落ちてきた。

「あつ、爆弾だ！かくれる！かくれる！」皆が一斉に叫んで馬車から飛び降りた。

道と軒並みにある側溝はからからに乾いていたので、殆どがその中に伏せた途端、直ぐ耳元で凄惨な爆発の音が

した。顔を上げてみると私達より二百米位離れた街端れから黒煙が立っていた。それを見て、さて馬車はと振り返って見ると、満人の御者は居なく、荷物の上に恵美子が一人、今眠りから覚めたという格好をしてポツネンと座っていた。爆弾を見た瞬間、私は秀樹を抱いて飛び降り、腹の下にして伏せたが恵美子には私も妻も気が付かなかったらしい。幸いに眠っていたので泣きもしなかつたし、また爆風をうけるほど爆丸投下がちかくなかつたので、別状はなかつたのである。

○前後するが

八月九日 ソ軍より攻撃されつつあると聞き始め、十日汽車にて四平街經由、間島省朝陽鎮まで落ちる。

十四日朝陽鎮着。十五日ラジオにて終戦を知る。

九月十三日、朝陽鎮の民心悪化したため吉林經由。新京に逃れる。十四日新京着。物品、金銭ともに無一文。有るものは子ども三名を加えた五個の生命とそれを包む肉体のみ。

田原村の産、及川清一君の世話にて空き家を見つけ、団体七十五名の共同生活始まる。共同出資にて食料、雑貨の商売を始める。当時の団体員。夫妻 高橋、鬼木、

藤井、長瀬、川添、赤地。単独又は妻子のみ 小島、石川、豊川、小林、久米。

昭和二十一年四月 商売の利益よりも生活費大なる為団体経費を解散す。依つて店番頭におさまっていた私も外勤となり、手先の器用なところから大工と称して中共軍（八路軍）に使役に出たり、煎餅屋の臼引きをしたりする。

○いよいよ引揚

昭和二十一年七月十四日 国府軍より引揚命令を受けた。新京地区第三団として引揚出発。

雨の中 | 無蓋貨車 | 歓喜 | 胡芦島の生活一週間 | 波止場 | 船尾の日の丸 | 涙 | 日本人のみ | 甲板掃除 | 濟州島 | 九州の島 | 博多港 | 検疫 | 内地の土 | 朝鮮人の荷物 | こちらの子どもとリュックサック一つという対象 | 麦とうどんと、七分撞き米の握り飯 | 雨の中の団体解散。

七月二十九日 博多港上陸。

八月一日 正午、水沢駅に下車。自動車にて大橋迄来たり。生家に帰着す。

あとがき

私が生まれた昭和十五年（康徳七年）康徳とは何だろう、聞いたことは無い言葉だった。日本が満州国を建国したのは昭和七年三月一日、建国宣言がなされ、その日が建国の日となったそうです。皇帝は溥儀。

康徳十二年八月十五日終戦で、十二年間の満州国だったのでしょうか。その中で大きな夢を描き、満州へ渡った三十万を超える人々。日本に帰国できたのは十一万人余りだったとか。その中に、辛うじて私達家族五人も含まれていたのです。

無事日本に帰れたことが奇跡と言えるのかもしれない。

母の実家に私達を連れて行き、父は「只今帰りました。お土産はこの子たちです」と祖母に挨拶したそうです。

祖母は百五歳まで生きましたが、晩年、父が亡くなった時（一九八五年七月十三日没）、祖母はその当時の様子を話してくれました。「子どもたちの髪はバサバサで、皮膚は象のようだった」と。

直ぐお風呂を沸かし、洗ってやったと。話す祖母も聞く私達兄弟も涙、涙でした。

帰国してからの生活も、とても大変だったのですが、また、

機会がありましたら、「その二」を書いてみたいと思います。



日本軍「慰安婦」制度

事実に向き合う

千葉 ちた江

私はセキさんのことも千三忌のことも、知らないで過ごしていたのです。戦後生まれといってもアメリカ軍に占領されている時代です。近所の元軍人の南方方面での手柄話を聞き、部落の女性が進駐軍を連れてきていると聞いては、大人たちに交じって、こっそり見たこともありました。朝鮮人蔑視の差別的な会話を聞き、「朝鮮人は怖

い。」と思つて育ちました。祭りの時は傷痍軍人が募金している哀れな姿がとても怖かったです。

麗子さんが千三忌を始められたころは、年子の子育て最中でした。がんの手術後うつ病になった母に会いたくて、仙台の奥地の施設に、幼子二人を連れて新幹線、バスを乗り継いで行きました。バス停から施設までの道が長く、「歩けない、疲れたあ。」と泣き叫ぶ娘をおんぶしてはまた歩かせてでした。義父は、心臓で苦しむ日々で看病に明け暮れていました。母の臨終に遭えず、悲しみに浸っているころ、義父も亡くなり泣き暮れていました。出産・育児・中絶に、母や義父の死がかさなり、女性の性や生命を考えては自分を責め、自尊（自己尊重）の感情をなくしてしまいました。

漸く社会に目を向けられるようになって、子育てしながら、環境問題や戦争被害者の証言集会に取り組み始めました。

岩波ブックレットNo.784「日本軍「慰安婦」制度とは何か」吉見義明（中央大学教授）より引用します。

元日本軍「慰安婦」だった金学順^{キンハクスン}さんが日本政府に謝罪と賠償を求めて名乗りだしたのが一九九一年でしたから、二十年近くになります。元慰安婦の女性たちは次々亡くなりました。女性たちの名誉と尊厳は回復されず、問題は解決していません。

この間、二〇〇七年にアメリカ連邦議会下院が、日本軍が女性たちを「性奴隷制」に強制した事実を明白に承認し、謝罪することを日本政府に勧告する決議を採択しました。これに次いで、オランダ国会下院・カナダ国会下院・ヨーロッパ議会・韓国国会・台湾立法院でも決議が行われました。オランダ下院とカナダ下院を除き、どれも明確な事実の承認と謝罪を勧告ないし要求していません。中でもヨーロッパ議会は、法的な責任を受け入れることと、被害者への賠償を行うための効果的な行政機構の設置などを勧告しています（オランダ国会下院・韓国国会・台湾立法院も被害者への賠償をもとめています）。

これより前の一九九三年に河野洋平内閣官房長官（当時）は談話を発表し、「本件は、当時の軍の関与の下に、多数の女性の名誉と尊厳を深く傷つけた問題である。政府は、この機会に、改め

て、その出身地のいかんと問わず、いわゆる従軍慰安婦として数多の苦痛を経験され、心身にわたる許しがたい傷を負われたすべての方々に対し心からお詫びと反省の気持ちを申し上げる。」と認めました。また、「われわれはこのような歴史の真実を回避することなく、むしろこれを歴史の教訓として直視し、歴史研究、歴史教育を通じて、このような問題を長く記憶にとどめ、同じ過ちを決して繰り返さないという固い決意を改めて表明する。」と宣言しました。ところが、一九九四年頃から、軍「慰安婦」は自由意志で売春をした「公娼」だとする意見が閣僚（永野茂門法務大臣当時）の中からも出るようになっていきました。その後、中学校の歴史教科書からは、軍「慰安婦」の記述がほとんどなくなっていき、二〇〇四年一月には、中山成彬文部科学大臣（当時）が「慰安婦」の記述などが「減ってきたのは本当に良かった」と述べるようになりました。また、二〇〇七年三月五日には、安倍晋三首相（当時）が、「官憲が家に押し入って」「連行するような狭義の「強制性」はなかったというのではないか」と述べました。（参議院予算委員会）

日本の言説と海外の意見には、なぜこんなにも大きな相違があるのでしょうか。また、軍「慰安婦」とされた女性たちの名誉と尊厳が回復されない理由はどこにあるのでしょうか。その理由の最大のものは、軍「慰安婦」制度はどのようなにつくられ、どのように維持され、拡大していったかが、日本国内でまだよく理解されていないからだと思います。私は、軍「慰安婦」問題とは、女性に対する性暴力と、多民族差別と、貧しいものに対する差別が重なって起きた問題だと思っています。そして、この問題の根本的な解決を放置したままでは、世界やアジアでの日本の信用を失い、将来に大きな禍根を残すのではないかと思っています。しかし、この問題を解決すれば、被害を受けた女性たちの名誉と尊厳を回復することができるだけでなく、性暴力の根絶や多民族差別の克服という課題のために日本は大きな貢献をすることになると思います。

二〇〇七年六月一四日に「ワシントンポスト」紙に連邦議会下院決議案に反対の英語の広告を載せたのが、日本人で組織された「歴史事実委員会」でした。日本の国会議員、知識人、ジャーナリストたちの名入りで載せたものです。メンバーは、屋山

「歴史事実委員会」の貝類は、日本が対外に支那を

太郎・櫻井よしこ・すぎやまこういち・西村幸祐・花岡信昭の五氏です。アメリカ社会の中には、女性に対する性暴力を許さないとする、強い公論があり、ブッシュ前政権で国家安全保障会議上級アジア部長を務めたことがあるマイケル・グリーン氏は、(軍「慰安婦」とされた女性たちが)強制的にされたかどうかは関係ない。日本以外では誰もその点に関心ない。問題は慰安婦たちが悲惨な目に遭ったということであり、永田町の政治家たちは、この事実を忘れている。と言っているのです。もうひとつ、国連安全保障理事会の第一三二五決議、二〇〇〇年一〇月三一日に採択されたのですが、その中の一節です。

全ての国家には、ジェノサイド(大量虐殺)、人道に対する罪、性的その他の女性・少女に対する暴力を含む戦争犯罪の責任者への不処罰を断ち切り、訴追する責任があることを強調する。アメリカ下院決議は、わざわざこの決議を引用して、日本政府がこの決議に賛成した事実と、したがって日本政府は戦時の性暴力に対してきちんと取り組む姿勢を示しているはずだということを、強調しています。しかし、海外では相手にされない「歴

「歴史事実委員会」の貝類は、日本が対外に支那を

史事実委員会」の見解が、日本ではかなり支持され、広がっています。

私が軍「慰安婦」にされた李容洙さんイヨンスを迎えて、証言集会をしたのは、一九九七年ころでした。盛岡での証言を終え、北上での証言までの待ち時間が長かったので、拙宅で休んでもらいました。日本人の個人宅に案内されたのが初めてのようでした。各地での証言集会では、ホテルに泊まり、証言時間までホテルで休息していたようでした。

「ああ、襖、障子……。」と、慰安所の建物を思い出したようでした。日本語がとても上手でした。庭に咲いている桔梗の花を見て、「あの星の花がいっぱい咲いているころ：（絶句）、連れて行かれた。」と、吐き出すように悲しい声で語りました。当時、一六歳、一九四四年秋です。慰安所では、先輩お姉さんたちに慰められ、いろいろ教えてもらったと証言しています。

私たち夫婦や娘と話を交わしているうちに、英語と日本語を話す連れの方が、国に戻ったら環境問題に取り組みたいというので、家に在ったDVDを半額で譲ることになりました。常備菜として持

ち歩いている大事なキムチを分けてくれ、アカスリもお土産に頂きました。

李容洙さんイヨンスは、とてもパワフルな方で、七〇歳には見えません。「今、英語を勉強している。ハーグの国際裁判所に訴えるために頑張っている。」という。後の二〇〇七年に、アメリカ連邦議会下院の公聴会で証言しています。そして、アメリカ連邦議会下院の決議を引き出します。「国民服に戦闘帽をかぶっている中年の男に、赤いワンプイスと革靴を見せられて、ついていくことにした、あとで怖くなって帰してくれといったが許されなかった。」と語っています。（韓国挺身隊問題対策協議会ほか編「証言」明石書店一九九三年）この証言によれば、この男は軍人でも、警官でもなく、業者と解釈するほかなさそうです。朝鮮人女性の証言では、誘拐されたことを示す証言がかなりの割合であるそうです。また、公娼制度の下で働いていたということ、将官がもらうより多額の収入を得ており待遇がよかったという多くの証言があるとも言っている。「歴史事実委員会」ですが、いくつかの例をあげる

日本の言論と新米の意見が、お世にいかに

大衆・共産主義の正体。アメリカ社会の中。文壇

一九三九年に中国湖北省の葛店というところに駐屯していた独立山砲兵第三連隊は、「慰安婦」外出二関シテハ、聯隊長ノ許可ヲ受クベシ、一九四〇年に作成した規定では、軍「慰安婦」などの散歩区域も制限してあります。フィリピンのパナイ島イロイロ市にいた比島軍政監部ビザヤ支部イロイロ出張所は、業者に「慰安婦外出ヲ厳シク取締」まらせる規定を作っています。散歩区域は「ブロック区画の小さな公園内のみとし、散歩時間は午前八時から一〇時までの二時間に制限。相手を拒否すれば、多くの場合軍人から制裁を受けるか、業者から殴られるのが落ちでした。

「稼業に堪えられなかった」女性たちはどうなったのか。各国の被害女性は、病気になることも治療を受けられず、死んでも埋葬されなかった友のこと、耐え切れず自殺した女性がいたことを語っている。また、逃げようとして捕まり、見せしめとして拷問されたこと、妊娠したら墮胎させられ、その直後から強かんされたこと、日本軍の敗走の際には足手まどいだと首を切りつけられたとの証言もあるが、これらは公文書には記載されていない。

待遇はよかったか

軍「慰安婦」は將軍よりもたくさん稼いでいたかという点、普通の月で一五〇〇円程度の稼ぎがあり、そこから業者に五〇%ないし六〇%を渡すと記されています。これが事実だとすると、実収入は最高で月六〇〇円から七五〇円（年額七二〇〇円から九〇〇〇円）となります。なお、ビルマの通貨はルピーですが、一ルピーは一円、軍「慰安婦」が受け取ったのは在来通貨ではなく、南方開発金庫が発行した軍票です。一九四三年当時の陸軍大佐の年俸は加俸や手当などを除くと、四四四〇円、陸軍大將は六六〇〇円、一見、大將の収入に勝るとも劣らない額に見えます。しかし、「日本人捕虜尋問報告」第四九号には、すぐ後で、業者が食料その他の物品の代金を要求したので、生活困難に陥ったとも書かれています。実は日本が占領した海外の各地は一九四三年頃からひどいインフレになっていたので、東京を中心とした同心円を描く形で、その周辺部に行けば行くほど「インフレは激烈化した」と述べています。

一九四一年一二月を一〇〇とすると、東京では一九四五年八月ころまでに物価は一・六倍程度にしかならず、ビルマでは一〇〇

○倍を超え、二〇〇〇倍になろうとしていたからです。

ベトナムの軍慰安所を見た若い下級将校の戦後の記録です。かねがね噂には聞いていたピー屋（慰安所）だが、そのあまりにも無造作な現実、刺激というより、異様な世界を見せつけられる思いがした。白昼堂々立ち並んで順番を待つ者の鼻先へ、ことを済ませ、半袴（半ズボン）の紐も締め終わらぬまま次々出てくる姿の生々しさ。はしやぐわけでもなく、ある種の緊張の中に、コンベヤーシステム然と進行する儀式は、禁断の実を知らぬ私をたじろがせた（南原幸夫『遙かなる仏印』私家版・一九八三年）。

軍「慰安婦」問題は「二〇世紀における最大の人身取引事件のひとつ」ではないか

アメリカ連邦議会下院の決議は、このように言っています。「歴史事実委員会」は、はなはだし、故意の歪曲をしていると言えるでしょう。軍「慰安婦」総数は二万人で、その五分の一は日本人だったという秦郁彦元日本大学教授の新設を持ち出しています。仮にそうであったとしても、人

一九三五年中国国民党の報告でこの数字は

身売買などにより二万人も軍慰安所に拘束したのであれば、「二〇世紀における最大の人身取引事件のひとつ」というほかはないでしょう。八〇〇〇人も日本人女性を人身売買により国外に移送したとしたら、それも大きな問題です。なぜなら、日本人「慰安婦」のほとんどは、それ以前に人身売買されて遊郭などに拘束され、今度は軍「慰安婦」として軍慰安所に拘束されたからです。筆者は、総数はずっと多く、日本人以外の女性の比率ももっと高かったと言っています。秦氏の説や吉見氏の説を省略しますが、例えば大本営陸軍部研究班が一九四〇年に作成した調査報告から、中国で性病にかかった兵士は一九四〇年に一四七五七名いました。感染時の「相手女」としてあげられている数字を計算すると、次のようになります（国籍不明・不詳を除く。計算方法は、吉見・林博史編『共同研究日本軍慰安婦』大月書店・一九九五年参照）。

朝鮮人五一・八% 中国人三六・〇% 日本人一二・二% 「相手女」はすべて「慰安婦」だったわけではないが、大部分は「慰安婦」。一九四二年以降は東南アジア・太平洋地域の女性も軍「慰

軍「慰安婦」の相手女は

安婦」にされますが、その比率はかなりのものになると思われるそうです。

どんなに少なく見積もっても五万人になると思うそうです。残った資料をすべて公開していないため、八万人から二十万人になるとも言われています。

第2次調査公表時の発表文いわゆる従軍慰安婦問題について（1993年平成5年内閣官房内閣外政審議室）

(1) 慰安所の設置の経緯―各地における慰安所の開設は当時の軍当局の要請によるものである。

(2) 慰安所が設置された時期―昭和7年（1932年）にいわゆる上海事変が勃発したころ同地の駐屯部隊のために慰安所が設置された旨の資料があり、そのころから終戦まで慰安所が存在）は戦争の拡大とともに広がりを見せた。

(3) 慰安所が存在していた地域―日本、中国、フィリピン、インドネシア、マラヤ（当時）、タイ、ビルマ（当時）、ニューギニア

（当時）、香港、マカオ及び仏領インドシナ（当時）

(4) 慰安婦の総数―発見された資料には慰安婦の総数を示すものはなく、推認されるに足りる資料もないので、慰安婦総数を確定するのは困難。しかし、長期に、かつ広範な地域にわたって慰安所が設置され、数多くの慰安婦が存在したものと認められる。

(5) 慰安婦の出身地―国または地域は、朝鮮半島、中国、台湾、フィリピン、インドネシア及びオランダである。なお、戦地に移送された慰安婦の出身地としては、日本人を除けば朝鮮半島出身者が多い。

(6) 慰安婦の募集―軍当局の要請を受けた経営者の依頼によりあつせん業者らが当たることが多かったが、戦争の拡大とともに人員の確保の必要性が高まり、業者らが甘言を弄し、畏怖させるなどの形で本人たちの意向に反して集めるケースが数多く、更に、官憲などが直接加担するケースも見られた。

(7) 慰安婦の輸送など―業者が婦女子を船舶などで輸送するに際し、旧日本軍は彼女らを特別に軍属に準じた扱いにするなどして渡航申

請に許可を与え、日本政府は身分証明書などの発給を行うなどした。軍の船舶や車両によって戦地に運ばれたケースが少なからずあったほか、敗走という混乱した状況下で現地に置き去りにされた事例もあった。

勤労挺身隊から「慰安婦」に

姜徳景さん（韓国）

「慰安婦」問題 性と民族の視点から 明石書店

一九二九年生まれ、家が裕福だったので国民学校を卒業し、高等科に入学しましたが、一九四四年一年生の時、家庭訪問に来た担任の日本人の先生から「女子勤労挺身隊」の一期生として日本に行くように言われます。勉強もできるし、お金にもなるという話でした。クラスからは級長と姜さんの二人が行くことになりました。釜山に行くとい五〇人もの「隊員」が集められていて、船に乗って故郷を後にします。姜さんは富山県の不二越飛行場に行き、機械の部品を削る仕事をやるようになりまし。勤務時間は一日一二時間、早番と遅番を一週間ずつ交代です。「工場では仕事はき

つかったけれど、とにかくおなががすいて我慢できなかつた。ご飯と味噌汁それにたくあんがせいぜいで、ご飯もほんの少ししかないんだ。大事に食べようと一粒ずつ数えながら食べた。箸についたご飯もきれいに食べた。その時姜さんは一六歳。辛い生活に耐えきれずに友達と寄宿舎から「逃亡」を図りました。憲兵につかまり、「運輸兵の横に座らされたが、そのコバヤシという憲兵は途中で車を止めさせ、私に下りろと言って山陰に連れていったんだ。天と地の区別もつかないような真つ暗な夜だった。そこで彼は私に覆いかぶさってきたのさ。男の相手をするのがどういふことかも知らず、恐くて抵抗もできずじまい。ただ恐くて悲しくて茫然とするだけだった」

それから部隊に連れて行かれ、「テントのような家」で恐ろしい生活が始まりました。一日に一〇人位の軍人の相手をさせられ、土曜の午後からはたくさんの相手をさせられました。軍人の数に比べて、女の数が少なかつたからです。「私はそこでハルエと呼ばれていたが、軍人に呼び出され、夜どこかに連れ出されることもあつた。軍人たちに名前を呼ばれると、その女性は敷き布団を持って、軍人の後についていかなければならない

んだ。真つ暗な山陰で人数もわからない軍人たちに輪姦された。足の付け根があまりに痛くて歩けないので、軍人たちに引きずられるようにしてテントに戻ったのさ。その時の悲惨な気持ちは言葉にならないよ」

部隊が移動するときは、女たちも一緒にトラックに乗って移動しました。当時、姜さんは学校で習った軍歌に、別の歌詞をつけて歌っていました。「ああ山越えて海越えて

遠く千里を挺身隊に
上等兵に捕まって

私の体は引き裂かれてしまったよ」

ある日あまりに静かなのでおかしいと思い、部隊まで行ってみると軍人たちが、みなかがみこんで泣いていました。通りに出ると路上で

「万歳」と叫び、旗を振る朝鮮人のおじさんに会い、日本の敗戦を知ります。富山で知り合った同胞パンさんの家までたどり着き、その家族と一緒に帰国することになりました。

「お婆さんは私が妊娠していることに私より先に気づいた。私が軍人に連行されたのは初潮前だった。慰安所にいたとき血がうっすらにじんできたのを見たんだが、そ

の直後に妊娠したらしい。私は玄界灘を渡る船の中で海に飛び込んで死のうと思った。けれど、私の様子がおかしいのに気づいたお婆さんがびったり横にくっついていてできなかつた」

故郷の家に帰ると、母親に「子どもまで作って、そんな娘は家に入れられん」と言われ、けっきよく子どもを孤児院に預けながら、食堂で働くようになりました。そして毎週日曜日に孤児院まで子どもに会いに行きます。

「ある日私の子どもの服を他の子が来ているので聞いてみると、肺炎で死んだというのさ。四歳の時だよ。子どもの死をこの目で見られなかったのととても信じることができなかつた。それで私は一生結婚しなかつたんだ」

姜さんはその後ひとり働きながら、生きてきました。子宮や卵管を患い、膀胱が悪くて何度も入退院を繰り返されたそうです。姜さんは、帰国後も生活や周囲の偏見のため本当に苦労しました。

「いまだに（「慰安婦」のことを）韓国の恥だという人がいるんだよ。いくら事実を知らないと言ってもあまりに無知すぎる」。 「慰安婦」だったと名乗り出た後、日本政府に謝罪と補償を求めて

ソウルで毎週水曜日に行われているデモに参加しています。

これまで韓国・中国の戦争犠牲者の証言を聞いて、また、資料や本を読んで、日本が起こした日中戦争や太平洋戦争の一部を知ることができました。日本軍は殺人集団、略奪集団と化し、中国の重慶では無差別爆撃をしました。

隣の大韓民国や、北朝鮮人民民主主義共和国、中華人民共和国、フィリピンなど東南アジアの国々、太平洋諸島の国々で日本軍は何をしたかを河野洋平官房長官（当時）の談話のとおり、「われわれは、歴史研究、歴史教育を通じて、このような問題を長く記憶にとどめ、同じ過ちを決して繰り返さないという固い決意を改めて表明する。」の宣言を国策として推し進めなければならぬのです。

逆風が吹き荒れる今こそ、なかったとする風潮に押し倒されることなく、気が付いたひとりひとりの私たちが、声を上げるのです。

韓国大統領府はトランプ米大統領を招く夕食会に元慰安婦の李容洙さん（88）を招待しまし

た。文在寅大統領は慰安婦問題の解決を確認した。2015年の日韓政府間合意は「国民の大多数が受け入れられない」としており、米側にこうした立場を訴えるためとみられています。

これに対して、日本政府は韓国政府に懸念を伝達。首相周辺は、抗議と受け取ってもらっていないと指摘。

歴史・政治は変遷するのはごく当然で、他国の政治変遷に抗議し内政干渉しては友好関係を築けない。ネット上に「ここまでやらせるのか」などの嘲笑いの書き込みが頻繁に載り、まるで韓国が間違っているとも受け止められかねない風潮である。歴史を知らず、知らされず大人になる教育を受け、ネット上の風潮や、メディアが吹かせる風潮に知らぬ間に同調して投票する傾向に、恐れおののいています。若い人ほど、現在の「自民党」が、好きの傾向と分析されています。

国連人権理事会は一月一日、約五年ぶりに日本の人権状況を審査する作業部会を開いた。特定秘密保護法などで委縮していると指摘される「報道の自由」の現状に懸念を示す意見が相次ぎ、米国やオーストリアの代表は政府が放送局に電波停止を命じる根拠となる放送法4条の改正を

求めた。ブラジルやベラルーシも懸念を示した。東京電力福島第1原発事故後の住民の健康に関しても、子どもなどに支援を続けるべきだとの指摘があった。

米サンフランシスコ市のリー市長は、旧日本軍の慰安婦問題を象徴する少女像の設置を受け入れる文書に署名。市議会は、民間からの像の寄贈を受け入れる決議を全会一致で採択。

これに姉妹都市の大阪市の吉村市長は、「大変遺憾。信頼関係は消滅した」とコメント。12月中に姉妹都市解消の手続きを完了させる方針。理由は、前市長の橋下氏の意志を受け継いでとある。日本政府も「極めて遺憾だ」（安倍晋三首相）とリー氏に決議拒否を求めている。

今年（2017）北朝鮮のミサイル発射を知らせる「Jアラート」が各地で鳴らされるなど、緊張が高まっているかのような情勢です。

映画監督、明治大学特任教授の森達也さんはこう指摘しています。

「この夏は、空襲警報のようなサイレンが2回も鳴り響きました。テレビは全局同じ画面で「北朝鮮からミサイルが飛来、襟裳岬上空を通過し岬

の東1180キロに落下」と報道。上空といっても500キロメートル以上の宇宙空間です。国際宇宙ステーションの軌道からさらに100キロ以上も高い。もしも日本上空で爆発したとしても破片はすべて慣性で太平洋に落下します。地図を見れば、襟裳岬を持ち出す意味がないほど遠い。日本列島から東1180キロと伝えるべきです。何よりもほとんどの人は、ミサイルに爆薬が入っていると思っているでしょうが、実験だから爆薬は入っていないはず。つまり、着弾しても爆発はしません。仮に通常火薬を積んでいても、威力は小さな建物が半壊する程度です。備えが必要ないとは言いませんが、威力の程度もわからなくては備えの意味がありません。日本中すつかりおびえて、防衛意識が過剰に強くなっています」と述べています。

東京新聞社会部記者の望月衣塑子さんは、「ミサイル発射の前日、安倍晋三首相は2回とも官邸に宿泊しているので「知っていたらなぜ国民に知らせないのか」と菅義偉官房長官の定例会見で質問したのですが、「回答を控える」との返答でした。「飛来するが爆発しない」となぜ伝ええないの

でしよう。むしろ不安と恐怖をあおっているように思えます」と述べています。

地図を見て、なるほど1180キロは日本からほど遠い太平洋です。なるだけ、頑丈な建物の中に隠れるようにとは、空襲警報さながらの訓練です。

ポスターに「国難」「責任を果たす」と大字してあります。戦争前夜の風を巻き起こし、武器輸出を認め、防衛型から攻撃的兵器に予算をつけました。

私たちの日常にある影をひとりひとりが見抜くことで、戦争をさせない壁になるのだと強く思います。

岩手日報2017・11・8より
右は李容洙さん、



韓国大統領府での夕食会で、抱き合っであいさつするトランプ米大統領（中央）と元慰安婦の李容洙さん。左は文在寅大統領。7日、ソウル（聯合、共同）

元慰安婦とトランプ氏 抱擁、握手

■「俺死ねば、千三拜んでくれる人もなく、忘れられでしま
うべど思つて、人通りの多い道ばたさ(墓)建でだのス」と、
生前のセキさんは語りました。がその心配は無用でした。

今年(二〇一七年)もたくさんの方々が千三の墓にぬかず
きました。ありがとうございます。当日の句、お送りします。

2017年11月10日

紅葉の山脈よぎり白鳥来たりの麗ら舎住人・麗

爆撃の炎に似たりひがん花

母子草

戦争と共に生きたりぼけた母

母子草

お線香に心ひきしめ千三忌

秋海棠

雨の中供え花ゆれている

秋海棠

あの山の向こうに希望があるとやら

山彦

なんとまあまた自民党が勝と言う

山彦

米ジュース飲んで駄句の会忘れた

甚古神

集まって平和の花がさきました

甚古神

さんご橋はるかに柿のたわわなり

又女

千三忌仲間の顔も福々し

又女

指を折り駄句ひねりだす千三忌

ひで爺

千三の声を殺して選車行く

ひで爺

膳を喰う千三思ふや戦いはくうやね

おてて

線香のゆくえ届けやあすの政治

おてて

千三忌に稲刈り置いて馳せる我

栗

介護うけベツトで見る養父(そふ)

西山紅葉

久々に墓前額づく千三忌

テル女

遅咲きの秋桜ゆれる千三忌

テル女

名も知らぬ人と交わりなごむ秋

キエ

結婚し里帰りして掃除する

キエ

千三忌脳の九割俗事占め

林檎

衆院選こんな日が来るとは彼の名書く

林檎

自然には勝てぬと悟る米作り

野々小道

倒伏の稲には不要コンバイン

野々小道

滋賀県のお酒ケーキ届いた千三忌

万古神

千三に上げる柿菓子頼むと電話の麗子さん

万古神

柿の葉が膳をいろどる千三忌

赤とんぼ

千三忌心ひとつに不戦の誓い

赤とんぼ

男鹿の人よ私と同姓渡部さん

吾亦紅

雲流れそよぐ柳や千三忌

吾亦紅

雨上がりきらり光った千三忌

流星星

核兵器あなたもノーでウイー

流星星

千三忌熱き思いにありがとう

どんぐりころころ

千三忌見事に咲いた菊の花

どんぐりころころ

でしよう。むしろ不安と恐怖をおおっているよう

「歴史問題」に無知な日本人

日本の「歴史問題」と

ドイツ大統領

ヴァイツゼツカー演説

「歴史問題」に無知な日本人

佐藤英夫

1997年11月10日

「歴史問題」に無知な日本人

「歴史問題」に無知な日本人

「歴史問題」に無知な日本人

「歴史問題」に無知な日本人

「歴史問題」に無知な日本人

一、「歴史問題」に無知な日本人

今から二十年ほど前、一九九七年から一九九九年までの二年間、機会があつて中国の「北京語言文化大学（語言は「言語」と同義）」で日本語教師として勤務したことがある。

この大学は外国人向け中国語教育を主な目的として、百四十カ国もの国々から常に一人人ほどの留学生を受け入れている。実に国際色豊かだった。同大学は中国人向けの「外国語学部」も併設してある。学生数は各クラス、全体で二千人ほど。だから大学の在學生は圧倒的に外国人留學生が多かった。

學生達と顔なじみになってくると、当然のことながら、日本あるいは日本人について様々なことを質問されるようになった。

「日本の學生は歴史を知らないようですが、学校では歴史を教えないのですか」と、中国人學生から何度も質問された。

「いや、世界歴史や日本歴史は学校で教えていますよ。」と答える。

「でも日本人の学生は、抗日戦争で日本の軍隊が中国を侵略して、中国人民に乱暴したり、殺したり略奪したりしたことなど中日関係の歴史をほとんど知らないようです」

「そうね、日本歴史で教わるのは明治維新ぐらいまでかな。大学受験との関係もあるかも知れないね。」など
とこちらもいくぶん曖昧になる。

というのも、私を知る限り、日本の歴史教育では近代史は明治維新ぐらいで、明治、大正、昭和時代になると種々の事情でおざなりになっているように思っていた。
ところが、中国人が日・中関係、或いは「日・中の歴史問題」といえば、明治維新前後の近代から二十世紀、一九四五年度の日本帝国主義が敗北して終わりを告げた辺り、要するに明治維新以後の王政復古による立憲（絶対）君主制で、「万世一系皇祖皇宗」の天皇を元首とする大日本帝国の急激な近代化と中国大陸侵攻の日中戦争、そして戦後の高度成長を経た現代の日本となる。
ところで、中国人学生が外国人留学生と交流するのは、この大学ではきわめてありふれた光景だった。

外国語専攻の中国人と中国語専攻の外国人留学生が

誘い合い、一対一で中国語や外国語を教え合う。これを中国語で「互相幫助（フー・シヤン・バン・ズー）」と
いって、学生双方の語学運用力の向上に重要な一役を買っていた。

しかし、中国では、日本あるいは日本人は、他の外国人と違って、特別な目差しで見られがちになる。

その目差しとは、一九三七年七月、帝国主義日本が中国大陸の侵略を企図して「盧溝橋事件」を発端とする日中戦争が約十五年続き、中国本土を戦場としたために、多くの非戦闘員の民間人が巻き込まれ多大な犠牲が伴った暗い記憶に基づく。

日本軍の苛烈で非人道的な行動を、中国側では「三光作戦」と呼んでいる。「三光」とは殺光（殺しつくす）、搶光（奪いつくす）、焼光（焼きつくす）をいう（広辞苑）。さらに日本は一九四一年十二月、「大東和共栄圏」を旗印に、米国ハワイの真珠湾を攻撃して、米英その他の連合国に宣戦布告、アジア太平洋全域に戦火が拡大したが、四年後の一九四五年敗れるべくして敗れた。

日本は敗者でありながら多大な損害と犠牲を強いた加害国となり、中国は勝者でありながら、多大な損害と

犠牲を強いられた被加害国となった。

この日・中の暗い歴史が中国人の胸深く刻まれている事を私たち日本人は忘れがちだ。

二、日本人が抱える「歴史問題」

日・中交流の歴史は、魏志倭人伝の邪馬台国にも見られるように二千年ほどに及ぶ。しかも両国は（韓国も含めて）「衣帯水」とか、言語や文化などでも「同文同種」などと、極めて親和的な関係にあった。

ところが、一八六七年、明治維新による大政奉還・王政復古が達成。封建的な武家政治が崩壊して、天皇の親政が復活、「万世一系の皇祖皇宗を踐（ふ）める国体」に基づく立憲君主制が確立する。「鎖国」から「開国」、「文明開化」へと急速な近代化を図った。

大日本帝国憲法を公布し、欧米列強の植民地政策に倣って富国強兵策を推進。一八九四～九五年日清戦争（朝鮮半島から清の影響力を排除、遼東半島、台湾を清国から割譲）、一九〇四～五年日露戦争（ロシアは満州および朝鮮からは撤兵、樺太の南部を割譲）を経

て朝鮮半島併合、満州国建国と、国力の拡充を目指した。

一九三七年、盧溝橋事件を発端として中国大陸へ侵攻を図って日・中十五年戦争の泥沼に踏み込んだ（前頁に記述）。

さらには一九四一年、日独伊三国同盟の下、ハワイの真珠湾攻撃で英米などの連合国との「大東亜戦争（戦後『大太平洋戦争』と呼称）の戦端を開き、東アジア太平洋まで戦火が拡大する。一端は連戦連勝で東南アジアの欧米列強を制覇に成功するが、絶対的な戦力の差は歴然で、連戦連敗で制海権・制空権を失う。広島・長崎への新型（原子）爆弾投下、「日ソ不可侵条約」破棄によるソ連軍の参戦などで、一九四五年、天皇による玉音放送（「終戦の詔勅」）によって、「ポツダム宣言」受諾し無条件降伏する。

その後、米・ソ対立による冷戦体制で世界が二分され、GHQを主導する米国に支えられ、朝鮮戦争、ベトナム戦争などの特需景気に恵まれて「二十世紀の奇跡」といわれる経済成長を遂げる。

一方中国は、抗日戦争勝利後の一九四九年、毛沢東率

いる共産党は蒋介石総統率いる国民政府軍から政権を奪って中華人民共和国を建国した。学校では一貫して愛国主義教育を積極的に推進した。その基本は、日本軍国主義の侵略と暴虐の限りを尽くす日本軍人に立ち向かい、抗日戦争を勝利に導いた毛沢東と共産党、そして蒋介石総統率いる国民党時代の地主階級の搾取から人民を解放した指導者毛沢東崇拜を強化して社会主義体制を確立することにあつた。さらに遡ってアヘン戦争当時の英国帝国主義、および国民党を支援した米帝国主義なども学習の対象となる。

一般の中国人が抱く日本人のイメージは、戦争当時中国の国土を荒らし回った冷酷無比で野蛮な日本軍人を「日本鬼子（リーベン・グイズ）」と呼称した過去の日本人像、一方日本人が敗戦後の廃墟から立ち上がり、目を見張る高度な経済成長と工業技術に与っている「一億総中流」の日本人像と、暗い過去と現在の明るいの二つの相反するイメージが複雑に混じり合っている。

三、悪名高い東条英機と山本五十六

ある時授業の合間の休憩時間に、数人の学生が私に近寄ってきて、チョークを使って「東条英機」、「山本五十六」と黒板に書いた。

「先生、これ、日本語では何と読むのですか」と聞いてきた。漢字は彼等のお家芸なのだが、日本語としての読み方は難しい。

「こちらは、『トウ・ジョウ・ヒデ・キ』、こっちは『ヤマ・モト・イソ・ロク』です」

チョークで書かれた二人の日本人の氏名を、出来るだけゆっくり、明瞭に発音する。

「この人達はどんな日本人のですか」

「二人とも軍人です。東条英機は戦争中、総理大臣をしていました。敗戦後、戦争犯罪人として極東軍事裁判で死刑判決を受けて処刑されました。山本五十六は海軍軍人で、連合艦隊司令長官でした。米国の真珠湾攻撃を指揮しました。その後南太平洋上で飛行機に乗っていて、待ち構えていた米軍機に襲われて戦死しました」

「やっぱり先生は、いろいろなことを知っているんですね」と変に感心された。質問はさらに続いた。

「先生は、最近日本で東条英機の映画がつけられたの

を知っていますか。」

「全然知りません。東条英機の映画が作られるなんて、ちよつと信じられないね」

「東条英機は戦争犯罪人です。戦争犯罪人として死刑の判決を受けた軍人の映画が日本で作られたというので、中国では大問題になっています。どうして抗日戦争を仕掛けた戦争犯罪人の映画が日本では作ることができるのですか」

「日本政府は抗日戦争について『深く反省し、お詫びをする』と言っていますが、抗日戦争で中国を侵略した戦争犯罪人の映画をつくるのは大問題ですよ」

正直いって私は、その映画については全く知らなかった。

「戦争犯罪人の映画を作ったなんて、確かにびっくりです。それでも日本ではそのような映画を作ること強制して止めさせることは出来ません。日本では誰でもどんな表現も自由にできるのです。もちろん反対したり、批判したりすることも出来ます。しかしそんな映画はつくるな、といって、禁止することまではできません。中国とは違って、日本では個人の表現の自由は憲法

で保障されています。」

ところが、「個人的人権」とか「表現の自由」など、多くの中国人にはなかなか理解し難い。

要するに、日本と中国では政治体制の基本が異なる。共産党独裁の中国ではしばしば党独裁体制の維持が優先されて、個人的人権はしばしば制限される。そして、生まれながらにその体制の下で生まれ育っていると、一般的には基本的人権が制限されることに疑問を感じない。あるいは「人権問題」を疑問視するなどは、むしろ公共の秩序を乱すもので、決して許されないと、思う。特定の宗教などもその範疇で判断される。

だから、そのような映画を作ったり見たりできる日本という国は、極東国際軍事裁判で「戦争犯罪人」と断定された東条英機を、むしろ英雄視しており、「日本は相変わらず軍国主義を認めている国で、まったく信用できない」と受け止められることにもなる。

中国人と話をしたり、議論したりして感じることは、政治体制の違いから価値観の基準が予想以上に乖離しているために議論が成立しない事が間々ある。その解消には五十年、百年といった時間がかかる、と思ったも

のだった。

同僚の中国人の日本語教師に「学生とは(日中)戦争の話はしない方がいいですよ」と助言されたことがあったが、なるほど、と納得させられた。同時に、この助言は、私のような外国人が学生に「自由主義思潮」のようなものを勝手に吹き込まれては迷惑、という思惑もあつたように思う。

中国では、未だに盗聴や密告が公然とまかり通っている。検閲もかなり厳しい。それでも、私は教室の中で、学生達と様々な議論を試みていた。

日本に戻ってから、中国人の教え子達が日本の大学に留学するものが少なくなかったが、彼らに会つての感想が「日本に来てみて、先生が話していたこと(が本当に理解できました)」ということだった。

一党独裁体制の中で「基本的人権」が、顧みられない。その息苦しさを日本に来て初めて理解できたということなのだ。

教室内は、自由に聴いたり話したり出来る(密告される恐れは比較的少ない)「解放区」だったようだ。

ところで、日本で東条英機の映画が作られた」という

事実は、その後で、中国の新聞を見て知った。テレビでもニュースなどでもかなり騒がれていた。映画の題名は「プライド・運命の瞬間」であることも後で知った。日本でも賛否両論で話題にもなっていたらしいが、国内での非難の度合いは群を抜いていた。

中国人学生と映画を話題にしている、中国では、東条英機とか山本五十六は、日本の軍国主義を代表する軍人としてかなり悪名が高いことを改めて知った。

中国人学生と付き合っている日本人留学生が、質問に窮して面食らってしまうのは、このような「日本の過去の歴史問題」だった。

明治維新後の日本帝国主義が富国強兵策を押し進める過程で、大きく道を誤った中国大陸侵略や、朝鮮半島の植民地化と終戦後の南北に分割統治されたまま独立している実態、さらに東アジアの欧州列強の植民地をいったん解放しながら、様々な残虐行為で現地の人々にさらに大きな苦しみと犠牲を強いた事実を、日本の学校では余り触れられないことが実態だ。

戦後七十年余を経て、なお日本の過去の暗くて深刻な「歴史問題」を私達日本人は引きずっている。

四、日・中交流正常化と歴史問題への対処

一九七一年二月のキッシンジャーの中国訪問から始まった米中国回復の動きは、一九七二年のニクソン大統領の電撃的な訪中に始まった。

その米国に遅れじと、同年九月二十九日、戦後三十五年経って、田中角栄首相が初めて中国を訪問して、日・中国交正常化が実現。

以来、歴代の日本の首相が日・中両国で交わす公式の戦争責任に言及、或いは謝罪した局面を概観する。

一九七二年九月二十九日、戦後三十五年経って、田中角栄首相が初めて中国を訪問して、日・中国交正常化が実現した。

日・中両政府での共同声明の抜粋

「日本側は、過去において日本国が戦争を通じて中国国民に重大な損害を与えたことについての責任を痛感し、深く反省する。」

一九八五年、中曽根元首相は靖国神社公式参拝を中国に非難され、翌年から参拝を止めた。

氏はその理由を、胡耀邦党総書記の失脚を避けるためと説明した。

一九九六年、橋本龍太郎首相は現職の内閣総理大臣としては十一年ぶりに靖国神社を参拝したが、何の前触れもなく、自らの誕生日である七月二十九日に参拝。中国から批判を浴び、その後参拝を止めた。

一九九三年八月二十三日 - 細川首相衆・参議院所信
表明演説

「(前略)それから四十八年を経て我が国は今や世界で有数の繁栄と平和を享受する国となることができました。それはさきの大戦でのたつとい犠牲の上に築かれたものであり、先輩世代の皆様方の御功績のたまものであったことを決して忘れてはならないと思います。

我々はこの機会に世界に向かって過去の歴史への反省と新たな決意を明確にすることが肝要であると考えます。まずはこの場をかりて、過去の我が国の侵略行為や植民地支配などが多くの人々に耐えがたい苦しみと悲しみをもたらしたことに改めて深い反省とおわびの気持ちを持ちを申し述べる(後略)」

一九九五年八月一五日、村山富市首相の談話

「戦後五十周年の終戦記念日にあたって」（全文）

わが国は、遠くない過去の一時期、国策を誤り、戦争への道を歩んで国民を存亡の危機に陥れ、植民地支配と侵略によって、多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛を与えました。私は、未来に誤り無からしめんとするが故に、疑うべくもないこの歴史の事実を謙虚に受け止め、ここにあらためて痛切な反省の意を表し、心からのお詫びの気持ちを表明いたします。また、この歴史がもたらした内外すべての犠牲者に深い哀悼の念を捧げます。

一九九八年十一月、江沢民主席が日本政府（小渕首相）の招待に応じて日本を公式訪問した。その折に発表された「平和と発展のための友好協力パートナーシップの構築に関する日・中共同宣言」から（抜粋）

「（前略）過去を直視し歴史を正しく認識することが、日・中関係を発展させる重要な基礎であると考えている。日本側は、一九七二年の日・中共同声明（田中角栄首相訪中による日・中国交樹立）及び一九九五年八月十五日の（村山富市）内閣総理大臣談話を遵守し、過去の一時期の中国への侵略によって中国国民に多大な災難と損害

を与えた責任を痛感し、これに対し深い反省を表明した。中国側は、日本側が歴史の教訓に学び、平和発展の道を堅持することを希望する。双方は、この基礎の上に長きにわたる友好関係を発展させる。（後略）」

二〇〇一年八月十三日、小泉氏は首相に就任して最初の靖国参拝を行った。なお、自民党総裁選の候補者による公開討論会において、「首相に就任したら、八月十五日にいかなる批判があろうとも必ず（靖国に）参拝する」と明言していた。

二〇〇一年十月、小泉総理訪中 江沢民主席との会談
八日、訪中した小泉内閣総理大臣は、日本時間一六時〇〇分から一七時〇〇分までの約一時間、江沢民主席との間で会談を行った。

本件会談の概要は以下のとおり。

一・日・中関係全般（歴史認識を含む）

（一）小泉総理より、自分（小泉総理）は今回が三日目の訪中であると前置きした上で、本日は、テロや上海APEC前で多忙にもかかわらず、江沢民主席とお会いできて嬉しい、自分（小泉総理）は歴史に興味があり、盧溝橋に行きたいと思っていた、戦争の悲惨

さ、中国の人の悲痛さが見てとれた、お詫びと哀悼の気持ちをもって（抗日戦争記念館の）展示を見た、過去の反省に立って、教訓を生かさなければいけない、二度と戦争をしてはならないと思った、日本が戦争を起こしたのは、日本が国際社会から孤立したからだと思ふ旨述べた。

さらに、小泉総理より、抗日戦争記念館で「忠恕」と揮毫したが、この語は、論語の一節からとつたもので、「忠」はまごころ、「恕」は思いやりの意味である、このような考えで、日・中関係を発展させていきたいと思う、日・中関係の発展は世界の平和にプラスとなる旨述べた。

(2) これに対し、江沢民主席より、靖国神社参拝、教科書問題は中国人民にとり極めて敏感な問題である旨指摘しつつ、二国間関係の発展のために、小泉総理が訪中されたことを歓迎する旨述べ、その後、唐代に始まる日・中交流の歴史についての発言があった。

さらに、江沢民主席より、本日の会談で日・中間の緊張局面が緩和された旨の発言があるとともに、来年は日・中国交正常化三〇周年であるが、日・中関係はいい

局面と悪い局面があった、悪い時には、靖国神社参拝や教科書問題が起こつた旨の発言があった。（以下省略）
（外務省HPから引用）

二〇〇五年八月十五日、小泉首相の終戦六〇年記念談話
「（前略）我が国は、かつて植民地支配と侵略によって、多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛を与えました。こうした歴史の事実を謙虚に受け止め、改めて痛切な反省と心からのお詫びの気持ちを表明するとともに、先の大戦における内外のすべての犠牲者に謹んで哀悼の意を表します。（後略）

この間に、小泉首相は二〇〇一年首相就任以来中国側が大いに懸念する靖国神社を七年連続参拝した。

「靖国神社は戦前戦中の軍国主義思想のシンボルとしてあり、歴史的に日本の侵略戦争美化の役割を演じたと見なす」と機会ある度に日本政府に伝えていた被侵略国の中国にとって、日・中間の友誼がふみにじられて、「面子（メンツ・中国語）」丸つぶれ、国際的にも御国内的にも到底許容できない行為と映ることとなり、日・中関係は悪化の一途を辿った。

小泉首相の行動は、日・中関係が円滑になるどころか、長年築き上げてきた日・中友好関係を一気に難しくし、両国の国益を大きく損なう結果になった。

歴史認識を巡って、両国間の溝は深まり、首脳間の相互訪問が小泉首相の二〇〇一年十月の訪中以来、五年間途絶えるなど、冷え込んできた。

これらを背景に、二〇〇五年四月に中国の主要都市において大規模な反日デモが起こり、日・中関係は、一九七二年の国交回復以来最悪の時期を迎えた。

小泉首相靖国参拝の理由

「私は、特定の人(合祀されているA級戦犯)に対して参拝しているんじゃないんです。この戦争でね、苦しい思いをされ、できれば避けたかった、戦場に行きたくなかった多くの兵士がいるんです。そういう方々の気持ちを思ってね、何という苦しいつらい体験をせざるを得ない時代に生まれたのだらうかと、そういう犠牲者に対してね、心からやっぱり哀悼の念を表すべきだなと、これ日本の文化じゃないでしょうか。」(首相官邸「小泉総理インタビュー」(2006/08/15)より引用)

田中元首相の日中国交回復いらい築かれてきた国家間の信義を破棄してまでも、日本国を代表する小泉首相が戦争で逝った自国の兵士達に哀悼を捧げる「日本の文化」を墨守すべきだったのか、大いに疑問に思う。

その後、民主党政権を経て小泉首相の後継を自認する安倍首相も参拝を強行したが。

二〇一三年十二月二十六日午前、安倍晋三首相が靖国神社に参拝した。

現職首相による靖国参拝は、二〇〇六年八月十五日(終戦の日)の小泉純一郎元首相の参拝以来、七年四月ぶり。首相として初めてのこととなった。

それに対して在日米大使館は次のコメントを発表した。

「日本は大切な同盟国であり、友好国である。しかしながら、日本の指導者が近隣諸国との緊張を悪化させるような行動を取ったことに、米政府は失望している。」(後略)

日本の首相の靖国参拝に対するこのような米国のコメントは異例だという。

米政府に続いて、ロシアやEUも、そして今まで、靖

国参拝に沈黙を守ってきた国々も批判的コメントを発表した。外国の諸新聞もおおむね批判的に報道していたといわれる。

そこで思い当たるのは、国際的に安倍首相は本来「歴史修正主義者」であり、基本的な政治思想はナショナリスト（国粹主義者）と見なされていることにあるのではないか。

以来、二〇一七年の今年まで、安倍首相は自身の靖国参拝は自粛。代わりに終戦記念日の八月十五日には、「首相代理」を通じて靖国神社に自民党総裁として私費で玉串料を奉納し続けている。

超党派の議員連盟「みんなで靖国神社に参拝する国会議員の会」（一九八一年に結成、会長・尾辻秀久自民党参院議員）靖国神社を集団参拝する。稲田朋美元防衛相が会長を務める自民党若手保守派グループ「伝統と創造の会」（二〇〇六年設立）も参拝している。

五、ヴァイツェッカー大統領と歴史問題

戦後七〇年余、今も、中国・韓国や近隣のアジアの人

達は、私達日本人に問い続ける。

「どうして日本は通り一遍の判で押ししたようなお詫びを繰り返すだけで、ドイツのようにできないのか」

「ドイツのように」というのは、今から三十二年前、一九八五年五月八日、ドイツ終戦四〇周年記念日に、ヴァイツェッカー大統領が連邦議会ですた演説を指す。

それは後世に名を留める名演説との声価が高い。その演説の要旨を示す。（※太字や下線は筆者、佐藤による）

◎五月八日は心に刻むための日である。心に刻むというのは、ある出来事が自らの内面の一部となるよう、これを真実かつ純粹に思い浮かべることだ。そのためには、真実を求めることが大いに必要とされる。

◎われわれは今日、戦いと暴力支配とのなかで斃れたすべての人びとを哀しみのうちに思い浮かべている。

ことにドイツの強制収容所で命を奪われた六百万のユダヤ人を思い浮かべる。

◎戦いに苦しんだすべての民族、なかんずくソ連・ポーランドの無数の死者を思い浮かべる。

◎ドイツ人としては、兵士として斃れた同胞、そして故郷の空襲で捕われの最中に、あるいは故郷を追われる途中で命を失った同胞を哀しみのうちに思い浮かべる。

◎虐殺されたジンティ・ロマ（ジプシー）、殺された同性愛の人びと、殺害された精神病患者、宗教もしくは政治上の信念のゆえに死んだ人びとを思い浮かべる。

◎銃殺された人質を思い浮かべる。

ドイツに占領されたすべての国のレジスタンスの犠牲者に思いをはせる。

◎ドイツ人としては、市民としての、軍人としての、そして信仰にもとづいてのドイツのレジスタンス、労働者や労働組合のレジスタンス、共産主義者のレジスタンスの犠牲者を思い浮かべ、敬意を表する。

◎はかり知れないほどの死者のかたわらに、人間の悲嘆の山並みがつづいている。

◎暴力支配が始まるにあたってユダヤ人道法に対するヒトラーの底知れぬ憎悪があった。全ドイツ民族をその憎悪の道具とした。

◎歴史の中で戦いと暴力とにまき込まれるという罪、これと無縁だった国が、ほとんどないことは事実だ。しかし、ユダヤ人を人種としてことごとく抹殺する、というのは歴史に前例がない。

◎この犯罪に手を下したのは少数だ。しかし、ユダヤ系の同胞達は冷淡に知らぬ顔をされたり、底意のある非寛容な態度をみせつけられたり、さらには公然と憎悪を投げつけられる、といった辛酸を嘗めねばならなかったが、これはどのドイツ人でも見聞きすることができた。

◎しかし現実には、犯罪そのものに加えて、余りにも多くの人たちが実際に起こっていたことを知らないでおこうと努めていた。当時まだ幼く、ことの計画・実施に加わっていなかった私の世代も例外ではない。

◎良心を麻痺させ、それは自分の権限外だとし、目を背け、沈黙するには多くの形があった。戦いが終り、筆舌に尽しがたいホロコースト（大虐殺）の全貌が明らかになったとき、一切何も知らなかった、気配も感じなかった、と言い張った人は余りにも多かった。

◎一民族全体に罪がある、もしくは無実である、とい

うようなことはない。罪といい無実といい、集团的ではなく個人的なものだ。

◎罪が露見したのもあれば、隠しおおせたものもある。◎あの時代を生きてきた方がたは、一人ひとり自分はどう関り合っていたかを静かに自問してほしい。

◎ドイツ人であるというだけの理由で、悔い改めることではない。しかしながら先人は容易ならざる遺産を残した。

◎罪の有無、老幼いづれを問わず、われわれ全員が過去を引き受けねばならない。

◎問題は過去を克服することではない。後になって過去を変えたり、起こらなかつたことにすることはできない。

過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となる。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすい。

◎ユダヤ民族は今も心に刻み、これからも常に心に刻みつづけるだろう。われわれは人間として心からの和解を求めている。まさしくこのためにこそ、心に刻む

ことなしに和解はありえない、という一事を理解せねばならない。

◎心に刻むというのは、歴史における神のみ業をのあたりに体験することである。これこそが救いの信仰の源である。この経験こそ希望を生み、絶ち裂かれたものが再び一体となることへの信仰、和解への信仰を生み出す。

◎五月八日はヨーロッパの歴史に深く刻み込まれている。

ヨーロッパでは百年以上にわたってナショナリズムが高まり、その衝突に苦しんできた。第一次大戦が終わると、民族主義的な激情の炎が再び燃え上がり、社会の窮状と結びついた。

◎災いへの道を推進したのはヒトラーで、大衆の狂気を生み出し、これを利用した。ヒトラーは戦争によってヨーロッパ支配を望んだ。ヒトラーのポーランド侵入で第二次大戦が勃発。多くの民族がナチズムの統治に苦しみ汚辱にまみれていった。

◎物質面での復興という課題と並んで、精神面での最初の課題は、さまざまな運命の恣意に耐えるのを学ぶ

ことであつた。ここにおいて、他の人びとの重荷に目を開き、常に共にこの重荷を担い、忘れ去ることをしないという、人間としての力が試されている。平和への能力、そして内外との心からの和解への心構えが育つていかねばならない。

◎かつて敵側だった人びとが和睦しようという気になるには、どれほど自分に打ち克たねばならなかつたか、このことを忘れて五月八日を思い浮かべることがわれわれには許されない。

◎人間の一生、民族の運命にあつて、四十年という歳月は大きな役割を果たしている。

◎あらゆる人間に洞察を与えてくれるのが旧約聖書で、「四十年」が本質的な役割を演じている。

◎古代イスラエルの民は、約束の地に入つて新しい歴史の段階を迎えるまでの四十年間、荒れ野に留まっていなくてはなりませんでした（出エジプト記）

◎四十年の歳月は人間の意識に重大な影響を及ぼしている。

当時責任ある立場にいた父たちの世代が完全に交替するまでに四十年が必要だつた。

◎われわれのもとでは新しい世代が政治の責任をとれるだけに成長してきた。若い人たちにかつて起つたことの責任はない。しかし、（その後の）歴史のなかでそうした出来事から生じてきたことに対しては責任がある。

◎歴史の眞実を冷静かつ公平に見つめることができるよう、若い人びとの助力をしたいと考える。

◎ヒトラーはいつも、偏見と敵意と憎悪とをかきたてつづけることに腐心していた。

◎若い人たちをお願いしたい。

◎他の人びとに対する敵意や憎悪に駆り立てられることのないように。

◎たがいに敵対するのではなく、たがいに手をとり合つて生きていくことを学んでほしい。自由を尊重しよう。平和のために尽力しよう。公正をよりどころにしよう。

◎正義については内面の規範に従おう。

◎今日五月八日に際して、及ぶかぎり眞実を直視しようではないか。（以上）

六、敗戦後のドイツとヴァイツェッカー

大統領の言葉

一九四五年五月、第二次世界大戦敗戦後、ドイツは米英仏ソの四カ国に分割され、ソ連占領地区にあるベルリンも四カ国に分割された。

国土が分割されただけでなく、国土の二五%がポーランドとソ連へ割譲された。その土地から追放されたドイツ人一〇〇〇万人以上が、分割された西側のドイツまで移動する途上、飢餓、病気、略奪、リンチや強姦、報復行為などで二〇〇万人以上が死亡したり行方不明になったという。

四年後、一九四九年、米英仏占領下のドイツはドイツ連邦共和国（西独）、ソ連占領下のドイツはドイツ民主主義共和国（東独）と分断国家として独立した。

米ソの異なるイデオロギーの対立により、世界が二分された「冷戦体制」の下で、東西両ドイツは最前線の役割を演じることになる。

間もなく西ドイツは奇跡といわれる経済復興を遂げ、東西ドイツの経済格差がはつきりと表れるようになる。そこで、東から西に脱出する人が増える。それを阻止しようとして東ドイツは「ベルリンの壁」を設置する。壁は

東西イデオロギー（社会主義体制と自由主義体制）対立を象徴することとなった。

西ドイツのヴァイゼッカー大統領が終戦四十周年記念演説をして四年後の一九八九年、ベルリンの壁が崩壊。翌一九九〇年十月三日、東西ドイツが統一された。

分断されてから再統一まで四十五年の歳月を経ている。ヴァイゼッカー大統領の言葉が続く。

「前の世代が犯した非の歴史を大いなる遺産として受け止め、心に刻みつける。過去の歴史の重い真実を真面目から見つめ、真摯に対応する。」

「かつて敵側だった人びとが和睦しようという気になるには、どれほど自分に打ち克たねばならなかったか。」

「他の人びとの重荷に目を開き、常に共にこの重荷を担い、忘れ去ることをしないという、人間としての力が試されている。平和への能力、そして内外との心からの和解への心構えが育っていかねばならない。これこそ他人から求められるだけでなく、われわれ自身が衷心から望んでいることでもあった。」

その姿勢が欧米諸国との「心からの信頼と和解」を回

復、ドイツの戦後処理が達成した。其まじり合ひの
ヴァイツゼッカー大統領の演説には、決まり切った
形式的な「お詫び」や「謝罪」の言葉はどこにも見い出
すことが出来ない。

彼の言葉は、哲学的な深遠な思索とキリスト教に裏
打ちされた普遍的な深味を持っている。

本来言葉に宿っている「言霊（ことだま）」の森厳、
な靈威を聴き手に感じさせ、心に深い共感呼び起こ
し、敵味方を超えて万人の心を打つ。

現在、ドイツは欧州連合（EU）の事実上のリーダー
として活躍している。

七、日本もヴァイツゼッカーに学ぼう

日本の場合、敗戦後のGHQ統治の下で、ドイツや朝
鮮半島のような占領軍による分割統治はなかった。米
ソの冷戦体制の下、米軍に軍事基地を提供し、米国から
全面的に支えられて、朝鮮戦争やベトナム戦争などの
特需景気に恵まれて、復興に立ち向かった。

高度経済成長の波に乗って、アジアでは唯一の工業

先進国となって、米国に次ぐ経済的な地位を得た。本来
ならば、名実ともに新興アジアのリーダーとして活躍
出来る地位にありながら、中国や韓国さらには近隣の
アジア諸国とも、「歴史問題」という宿痾（しゆくあ）
を抱え込んだまま、七十年間も低迷を続けている。

その根本の原因は何だろうか。
大日本帝国が朝鮮半島を併合して植民地化し、中国
を侵略し、さらに戦火を拡大し、東アジアの人々にも多
大な苦痛と犠牲を強いたという過去の歴史がある。

ヴァイツゼッカー大統領の言葉を重ねてみる。
「その歴史の真実に向き合い、事実をみずからの内面
の一部となるよう、それを誠実かつ純粹に思い浮かべ
る。そのためには真実を求めることが大いに必要とさ
れる」

戦いと暴力支配とのなかで斃れたすべての人びとを
哀しみのうちに思い浮かべている。

例えば、日本人ならば、次のような歴史上の真実を具
体的に思い浮かべることになる。

「南京で虐殺された多数の中国人を思い浮かべて見
る」

「朝鮮半島や中国から強制的に拉致して日本本土に連行し、過重な労働を課し、その挙げ句に亡くなった多くの人々を思い浮かべる。」

「日本軍の慰安所に従軍慰安婦として多くの女性を強制的に連行して、人間の尊厳を大きく傷つけ死ぬほどの苦しみを与えてしまったことを思い浮かべる。」
私たち日本人はこの七十余年の終戦記念日に、このような過去の歴史の真実を思い浮かべ心に深く刻みつけることをしてきただろうか。

中国に留学している日本人学生が、中国人学生から「日本人は歴史を知らない」としばしば指摘される。主要は、どうして日本人は十五年もの長い間中国大陸で侵略を続け、中国人民に多大な犠牲と苦しみを与えた歴史を知らないのか、ということを変疑問に思っているということだ。

何故ドイツのような戦後処理が進まなかったか。
日本側が靖国参拝をする。謝罪と反故が繰り返えされるという悪循環。「靖国参拝の是非は純粋に国内問題」と主張するものの、被害者との対話を自分から求めようとしない。日本側には「歴史の真実に向き合い心に

刻むことが心からの和解を呼び起こす」真摯な姿勢が問われている。

さらに次世代に過去の歴史の過ちを伝えることを私達日本人ひとり一人が怠っている。これが日本人留学生の歴史認識の欠如という批判を呼び起こす。

ヴァイツゼッカー大統領演説はドイツ人に訴えた、過去のナチスドイツのヒトラーが武力を使ってヨーロッパ諸国を侵略して征服を試みて多大の損害と苦痛を与えた挙げ句に失敗した。同時にユダヤ人をこの地球上から抹殺しようとした（ホロコースト）。その大罪にどう向き合い、敵対した国々に「心からの和解」を求めべきか。

私たちの日本も大日本帝国時代にナチスドイツと同じくアジア周辺諸国を侵略し、「神国日本」を中心とした「大東亜共栄圏」建設を図ったが、失敗に終わった。

他の国々に与えた多大な損害や人道的な犯罪行為にどう向き合って、敵対した国々に「心からの和解」を求めてきただろうか。

実は、ヴァイツゼッカー大統領の終戦四十周年記念演説に倣って、村山首相は終戦五十周年記念日に懸案の

歴史問題を取り上げて談話を発表した。(七、八ページ)
それを受けて六十周年にも小泉首相は談話を発表。(村
山首相の談話の主要部分は踏襲していた。)

しかし、小泉首相は〇一年から靖国神社参拝を強行
し、終戦六十周年記念談話の中で「我が国の戦後の歴史
は、まさに戦争への反省を行動で示した平和の六十年
であります。」と述べているが、同時に五年にわたる靖
国参拝という行為が「戦争への反省を行動で示した」と
いうのであるとすれば、その言動不一致に小泉氏自身、
気付いていたのかどうか。

「ヴァイツェッカー大統領の説く「過去に目を閉ざす者
は結局のところ現在にも盲目となる。非人間的な行為を
心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りや
すい。」との言葉はそっくりわれわれ日本人の胸に鋭く
突き刺さってくる。

ヴァイツェッカー大統領は続ける、「ことを言いつく
ろったり、一面的になったりすることなく、能うかぎり
真実を直視する力がわれわれには必要であり(中略)何
よりもまず人びとが嘗めた辛酸を心に刻む日であり、
同時にわれわれの歴史の歩みに思いをこらす日でもあ

ります。」

もちろん、戦後七十年を経た現在、日本人として生ま
れながら、その暗い時代に生まれていない人達は、何ら
罪を問われることはない。しかし、ヴァイツェッカー大
統領は言う、

「罪の有無、老幼いづれを問わず、われわれ全員が過
去を引き受けねばなりません。全員が過去からの帰結
に関り合っており、過去に対する責任を負わされてい
るのであります。」そしてさらに続けています。

「後になって過去を変えたり、起こらなかったことに
するわけにはまいりません。しかし過去に目を閉ざす
者は結局のところ現在にも盲目となります。非人間的
な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険
に陥りやすいのです。」

ところが、我が日本の指導的立場にある政治家や学
者、或いはジャーナリストが、「過去の歴史の事実を変
えようとしたり、なかったことにしようとして繰り返し発
言する。」

「大東亜戦争はアジアの植民地解放戦争だった。日本
はむしろ感謝されるべきだ」とか、「従軍慰安婦には強

制性がない」という安倍内閣の政府見解、あるいは「南京虐殺は中国がでっち上げたデマだ」「東京裁判は勝者の一方的な裁判で客観性に欠ける」など枚挙に暇がない。

また、二〇〇一年、文部科学省は「新しい教科書をつくる会」がつくった『新しい歴史教科書』の検定を合格させた。この教科書は歴史的事実を歪めたり、日本による侵略の歴史を美化する記述などがある。しかも、最近その教科書を採択する学校が出てきている。

八、日本人としての主体性を確立しよう

二〇一五年八月十四日、安倍晋三首相は終戦七十年記念談話を発表した。

内容は全体的に歴史問題についての表現を抽象化したり、多様な読み方が出来るような曖昧な表現で誤魔化したりが目立った。

例えば、談話の冒頭部分、「アジアで最初に立憲政治を打ち立て」、とあるが、「明治維新で王政復古を成し遂

げ、立憲（絶対）君主制の帝国主義国家を樹立。アジアで最初の憲法を発布。第一条大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス、と明記」とでもすべきだろう。要は、中国大陸侵略からさらにアジア全域に戦火を拡大した歴史上の事実を、「立憲政治」と意図的に曖昧にした表現で誤魔化している。

さらに続けて、

「日露戦争は、植民地支配にあった、多くのアジアやアフリカの人々に勇気づけました」と述べている。

「日露戦争」が、何時、何処で、何故勃発したのか。その勝敗の結果は日露両国にどのような影響をもたらしたのか。どんな理由で植民地の人々に勇気づけたのか。全く説明せず仕舞い。首相自身の言葉をそのまま受け取れば、「日露戦争はアジア、アフリカの植民地解放戦争」だったと「誤解」してしまうだろう。ヴァイツェッカー大統領を真似て、日本の首相たちによる終戦記念談話は、内向きの曖昧表現だけ。残念だが、彼の大統領の考え抜かれて、魂に訴えかける言葉は皆無だ。

これでは、米日不平等同盟に唯々諸々と追従するとは出来ても、中国を抑えてアジアのリーダーとなるなどは到底役不足だ。

戦後七〇年たっても、近隣のアジアの国々との様々な歴史問題が中々決着もできず、悪化する状況にある。

靖国参拝問題一つとっても、中国などの度重なる要望は無視するが、アメリカの國務省がコメントを発表すれば、首相の靖国参拝はぴたり止んでしまう。

その違いの意味をじっくり考えたい。

アジアの一国である日本人としての主体性を取り戻すためにも、形式ばかりの「お詫び」をお題目のように唱える事を止める。アジア一国としての立ち位置で、一八六七年の明治維新、大政奉還と王政復古以来、一九四五年のポツダム宣言受諾までの大日本帝国時代、「先人達が我々に残した容易ならざる遺産」を私たち日本人全員が引き受け、過去に対する責任を負う義務がある。

先ず第一に、私達日本人の欧米とアジアへの差別的な対応の違いを根底から改めなければならぬ。

「国策を誤り、戦争への道を歩んで国民を存亡の危機に陥れ、植民地支配と侵略によって、多くの国々、とり

わけアジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛を与えた疑うべくもない歴史の事実を」（村山談話から）心に深く刻み、中国、韓国を始め、アジア諸国との「心からの和解」を目指して、誠実に努力あるのみ。

おわりに

中国滞在中に、ある中国の友人から教わったこと。

「日本人は「NO」と言われると、そのまま引込んでしまいが、話し合いは「NO」から始まるんです」

もう一つ、中国人の中国人たる所以は

「一個人是条龍、三個人是条虫」（一人なら龍となり、三人寄ればただの「ウジ虫」でしかない。）龍は中国皇帝のシンボル。

日本人は、「三人寄れば、文殊の知恵」、孤を避け、相互依存。

中国人と日本人は、同じアジア人だが、気質はまったく正反対。大陸と島国、虚心坦懐に「相互幫助（フウシヤン・バンズ）」で大いに学ぶところあり。

※リヒャルト・フォン・ヴァイツェッカー（一九二〇（二〇一五）略歴 ベルリン、オックスフォード大学などに学ぶ。第二次世界大戦でドイツ国防軍に従軍、実業界に入り、ドイツ福音派信徒退会で議長を務め六九年に連邦議会議員、八一年西ベルリン市長、八四年から一〇年間、ドイツ連邦共和国大統領在任。その間にベルリンの壁崩壊、東西ドイツの統一を達成。

■二〇一七年十一月十日千三忌・駄句を詠む

千三忌祈り新たにたたかい届け

流浪の民

南方の海へ北方の空へ

新しい顔に出会える千三忌

もと

一郎と記入する日がくるとはネ

もと

軍恩給今にも続く六十兆円

見知らず柿

元「慰安婦」謝罪きかねば死ねないと

見知らず柿

ホトトギス咲に咲きたる千三忌

ふくれ女

秋田より渡部ご夫妻千三忌

ふくれ女

ごんど たまる墓が濡れている千三忌

甚古神

会いたいよう会いたいよう会った千三忌

甚古神

なんと出る投票すまし千三忌

又女

智江さんはいやいや描き稔りけり

又女

トランプのジョーカー安倍が笑う秋

ひで爺

日本海（渡部さん）太平洋（植田さん）と和を繋ぐ ひで爺

会えてうれし シャべってみな笑うてんか おてて

麗子先生お元気でうれし千三忌

テル女

男鹿からの会友うれし千三忌

テル女

畑のいもと青野菜かかえきれずいただく キエ

秋田の渡部さんお揃いでようこそ千三忌

吾亦紅

心打つ一人一言千三忌

吾亦紅

俗事の波頭からっほ思考も停止

林檎

天下国家を論じおり私の苦悩の卑小さよ

林檎

戦争は無益と教える千三忌

野々小道

飛来する白鳥も参加千三忌

野々小道

千三忌線香ローソク持参すると満子さん

万古神

千三忌庭に咲く菊をと容子さん

万古神

歳かさね身丈計測5センチ減

赤とんぼ

戦争のない世界へ

— 9条と24条を中心に —

北原陽子

立秋

目を覚ますと
窓から青い風が入ってきた

嫌なニュース 醜い政治
寝苦しい夏の夜を越えて
夜明けに消えていった星々

青々と呼吸する空
一緒に行こう 風がささやく

階段を降り玄関を開ける

そっと 新聞をひらく

まだ 戦争は始まっていない

露にぬれた紫の朝顔

光に向かつて咲いている

中国・撫順からやってきた

赦しの花 この種を下さった人たち

ひとつ ふたつ みつつ・・・

今朝は 21個

静かに咲いている

向いの阿部さん夫婦は

もう 畑に出かけたらしい

玄関から入ってゆく風

鍋を火にかける

豆腐 絹さや ミヨウガ

夫がスムージーを作り始める

冷蔵庫からヨーグルトを出している息子

戦争はいらない どの国にも
戦争はいらない 風がうなづく

一日が始まる
秋が始まる

★赦しの花 終戦後、中国で戦犯として
抑留された人たちが釈放されて日本に
帰るとき、中国人から手渡された朝顔
の種。「今度中国に来るときは、銃で
はなく花を持って来て下さい」と言い
添えられたという。

この夏に書いた「立秋」という詩は、詩の仲間
たちとの合評会では、「訴えたいことはわかるが
『戦争はいらない どの国にも』が唐突で、詩
としては・・・」という評だった。書いた本人も
やっぱり詩になっていないと納得。ただ・・・畑
に出かけた阿部さん夫婦や、スムージーを作り始
める夫、ヨーグルトを出している息子に込めた平
和のメッセージは何とか伝えたいし、わかって欲
しい。戦争は、平凡に日々生きている私たちの暮

らしや日常を、ある日突然壊してゆくものである
ことを――

未熟な私の詩から書き出してしまったが、今、
生きていれば私と同世代の詩人菊池千里氏の詩集
「赤頭巾ちゃんへの私的デイティール」の中の「晴
れた日／・・・光の、その鋭角の三拍子で戦争が
始まる日のことを。」や、「一枚の青空を海の底
に沈めて、戦争が始まる。／そんなうわさは嘘に
きまつているけど／最近、物たちは／光に錆びつ
きがちだし／新聞紙の文字の虫は、日曜日の陽だ
まりで、少しづつ生きはじめている。」の衝撃的
なフレーズを思い出している。

この詩を読む時、まざまざと私たち庶民がいか
に無防備であるかを知る。そして一方、戦争をし
たがる側が如何に計画的に事を進めているかを
も。

教育基本法の改悪、秘密保護法の成立、安民法
制Ⅱ戦争法の成立、そして共謀罪の成立・・・戦
争ができる国への準備は着々と進んでいる。おと
なしい羊の群れのような日本国民は、「国難突破」
という訳の分からない国会解散の選挙に600億
もの税金が使われたことさえにも無関心なのであ
る。

戦争の足音が聞こえ、憲法改悪が迫り、9条の旗が引きずり降ろされようとしても、TVで安倍首相の好戦的な顔を見ているだけである。

トランプ氏が大統領になるといち早くアメリカに電話をし、駆けつけて、忠犬のように尻尾を振った安倍首相。「加計」からも「森友」問題からも逃げ続け、外遊しては税金をばらまき、原発をも売り込んでいる。そして「シンゾー、もっともつと武器を買え」とのアメリカの言いなりになつて、一機100億を超える戦闘機を買う約束をし、また、沖縄辺野古の海には、オスプレイ100機を飛ばす新基地を作ろうとしている。平和憲法を持つ国の総理としておかしくはないか。

それでもまだおとなしい日本国民は怒らない。Jアラートにおびえ、北朝鮮から守ってくれるかもしれないと、選挙では、18歳以上の若い人たちの多くが、保守に投票しているのだ。これはどうゆうことだろうか。ある日曜日の朝、戦争が始まるかもしれない。スムージーを作っている夫も、ヨーグルトを出している息子も戦争に駆り出されるかもしれない。

なるほど、北朝鮮の核武装、国民の窮乏をよそ

に開発されるミサイル、日本上空を飛ぶ弾道ミサイル発射は決して許されない。しかし、国民にこの危機を煽り立て、「対話はムダ、今必要なことは圧力をかけること」と甲高い声で世界に発信し、緊張を激化させていることは正気とは思われない。世界が対話や外交に重きを置いている時、私たちの首相は、平和外交や米国との調整力も発揮せず、北朝鮮との関係を更に悪化させている。北朝鮮の現実を見れば、彼らが欲しいのは国際社会の一員としての承認、そしてアメリカから国として認められることであろう。

安倍首相は、核攻撃さえ匂わせるトランプ大統領にエールを送って、それがどれほど東アジアの平和を脅かしているか理解していない。実際に戦争が起こり、核が使われれば、最大の被害を受けるのは原発を何十基も持っている日本国民なのだ。安倍首相の無神経な、思慮に欠けた思考や発言は、やはり憲法前文をつまびらかにしていない為なのか、岸元首相の孫である為なのか。

二年前の秋、私は雨の国会議事堂前にいた。「誰の子どもも殺さない！誰の子どもも殺させない！」と、若いママたちの声に大きな力をもらい、

私も決して、息子や孫を戦場に送らない・・・と
「9条を守れ！」の声を上げてきた。

安倍総理になつてから次々、改憲の為に繰り出されるくせ玉、以前には確か背番号96番の野球のユニフォーム姿まで披露したことがあつたが（96条は国民の2/3以上によつて憲法を変えられる条項）、今回は、国民の改憲アレルギーを消そうと、自衛隊を憲法に明記することを言い出してきた。それは結局、9条の一項、二項を無力化する為の作戦である（法律では後に加えられた条項が力を持つ）。それが明記されたら、海外で戦争する自衛隊が合憲化されることになり、9条は破壊され、世界に誇る憲法前文の戦争放棄は空文化するのだ。72年間戦争をしなかつた日本、誰も殺さなかつた日本が、その輝きを自ら消し去り、戦争に参加する日本となることを意味する。安倍総理は国益を守る、国民の生命を守ると言いながら・・・国を守らず、自衛隊員を戦場に送り出そうとしている。

「誰の子どもも殺さない！」

誰の子どもも殺させない！」

この言葉を声に出してみよう。自衛隊員も誰か

の子どもであり、偶発的にも銃口を向ける先にいる兵士も誰かの子どもなのである。どちらにも子を産んだ母がいるのだ。母を泣かせる政治など政治ではない。

この夏、全国母親大会が岩手、盛岡で開かれた。この大会は第五福竜丸の被爆を契機に世界のお母さん達が立ち上がり、「生命を生みだす母親は生命を育て、生命を守ることをのぞみます」をスローガンとしてかかっている。日本では今年で63回目を数える大会だった。北海道から沖縄まで、一万人のお母さんたちが、核戦争から子どもを守ろう、原発の無い国を作ろう、憲法を守ろう、民主主義を育てよう、女性の解放を勝ち取ろう」と日本各地から、この盛岡の地に結集したのだった。その熱き心と行動！ 憲法9条や24条を持つている誇り、平和への強い思いで、手をつなぐ女性たちの顔は美しく輝いていた！

子どもを悲しませる政治は要らない。母親を悲しませる政治も要らない。平和を真剣に希求しない政治家、平和憲法を壊そうとし、敵、味方に分けるのが好きな安倍政権、憲法をつまみびらかに

読んでいないらしい首相に「そんなあなたは大メ！」と言うべき時が来ているのだ。72年間、9条の旗に守られてきた私たちは、今こそこの旗を守り、この旗の作られてきた歴史を学び、戦争から唯一取り出すことのできた「戦争放棄」という世界に輝く旗を日本の空に高くたなびかせる時ではないだろうか。

私が日本国憲法を素晴らしいと思うのは特に前文である。平和のうちに生存する権利を有する私たちは、自国の平和だけを願っているのではなく、その権利の主体は「全世界の国民」にも通じている素晴らしいものだ。一国平和主義ではなく、全世界から戦争と貧困を無くそうというこの理想はなんと気高い憲法なのだろう。

この秋、私は「憲法の源流にふれ、戦前をたたかい抜いた女性を知る旅」に参加し、そこで、五日市憲法草案の起草者である千葉卓三郎の生家跡と顕彰碑を見学した。実は私は数年前まで、この五日市憲法草案を知らなかった。この存在を知ることになったのは、意外なことに美智子皇后によってである。

平成25年に、皇后は自身の誕生日に公開したメッセージで、五日市郷土館で目にした民間による「五日市憲法草案」について言及していたのである。「明治憲法の公布に先立ち、地域の教員や農民らが討議を重ねて書き上げたという草案には、基本的人権の尊重や教育の自由、信教の自由、地方自治権などについても記されていた」と紹介し、「近代日本の黎明期に生きた人々の、政治参加への強い意欲や自国の未来に向けた熱い願いに触れ、深い感銘を覚えたことでした」と綴っていた。折しも憲法について改憲の動きが表面化した頃であり、これは皇后という立場からすると、非常に勇気のある発言であり、現在の日本国憲法の源流にもなった五日市憲法草案をこのように称えたその見識には驚かされた。「長い鎖国を経た19世紀末の日本で、市井の人々の間に既に育っていた民権意識を記録するものとして、世界でも珍しい文化遺産ではないかと思えます」とも綴られ、その文章には深いメッセージがあったと思う。

また美智子皇后は、日本の女性にとって、大切な女性の条項である憲法24条「婚姻は両性の合意のみに基づいて成立し、夫婦が同等の権利を有

することを基本として、相互の協力により維持されなければならぬ」を書き込んだベアテ・シロタ・ゴードンさんと親しかった。GHQの憲法案作成委員の一員でもあったベアテさんは五年前に亡くなったが、その時皇后は、深い悲しみの意と、日本で男女平等が確保される上で、ベアテさんが果たした重大な役割を大きく評価し、その功績を称え、そしてこれからも忘れることはないとの追悼のメッセージを宮内中庁から送られている。現在、保守勢力に壊されようとしている女性条項について、そのお立場から発せられたお言葉は、日本女性として誇らしく深く心に残るものであった。

72年前ベアテ・シロタ・ゴードンさんの目に映ったものは、日本女性の地位の低さだった。女性が家族制度の下で平等に扱われていないことへの同情と、そこからくる洞察により、彼女は日本の政治家に攻撃されながらも、必死の思いで24条を書いたのだった。

この24条で勝ちとられた女性の地位、そして男女平等は平和主義と共に、日本国憲法の土台にもなっている。すなわち、国家や家よりも、個人の権利の尊重が上であるという思想なのだ。世界

の中でも憲法にこうした女性の権利を高らかにうたったものは無いとのこと。日本は世界のトップに立っているのである。

しかし現在、日本会議という名の下に集まっている勢力が9条と共にこの24条の破壊を狙っていることに注意し警戒すべきである。すなわち、右派や日本会議にとって大切な天皇中心とする国家では、「家族」は国家を支えるものであり、戦前に家族制度があったから男性は戦場に送られ、女性や子どもは愛国心のもと国家に従うよう教育されたのである。

もう一度、日本を戦争のできる国にするためには、24条の女性条項は邪魔であり、家制度を復活させ愛国主義を根付かせ、道徳教育をおしすすめたい勢力（日本会議、保守系国会議員290人や美しい日本の憲法を作る国民の会や、みんなで靖国神社に参拝する国民の会等々）は、神社を巻き込み、自主憲法を作るべきだと主張する櫻井よしこ氏などを中心にして一千万署名を目標に既に900万人分を集めているとのことである。

「日本を取り戻せ」とか「美しい日本」を標榜するこのような時代錯誤の勢力の目指す未来がど

んなものであるか……その台頭を決して許してはならない!

天皇を頂きに置く、国家信奉の勢力への批判を書く一方で、美智子皇后の事も書くことは矛盾しているともとれる私の文であるが、「押しつけ憲法」といわれる現憲法に燦然と輝く24条を記したベアテさんを称えた美智子皇后の言葉を知るとき、そしてなにより日本の古い皇室という旧家に入られた皇后の苦難、象徴というその厳しい立場の中で、この24条の精神を強い意志で見事に体現しているのではないかと思える。

発表された自民党の憲法草案では、天皇が象徴であるという記述の前に「元首である」と、驚く草案となっている。このような動きに、聡明な美智子皇后は危機感を持っているのではないだろうか。

10年ほど前、私はベアテさんとお会いできる機会がありながらそれを逃してしまったことがある。ベアテさんが憲法に関わった奇跡の7日間を描いた、ジェームス三木氏脚本の青年劇場公演「真珠の首飾り」で、後にベアテさん役を演じること

になった私の大学時代の親友昆野美和子さんから、「ベアテさんが東京に来て、私と数日間行動を共にするから、東京に来れない？」という電話をもらったのだった。しかし、私は何が忙しかったのか、行かないでしまったのだった。

青年劇場の「真珠の首飾り」の演劇公演パンフレットで『若き「改革者としての情熱」こそ』という文章の中で、古関彰一氏はベアテさんの言葉を紹介している。「ベアテさん、どうしてあそこまで女性や弱者にこだわったのですか？」の問いに、「だって、あの頃の日本のお母さんほとても優しく、それでいて赤ちゃんを背負って洗濯をし、食事を作り、その合間に家族の風呂を沸かし……偉いなあと思ったの。旦那さんはお酒なんか飲んでいのに（笑い）。わたしね、あのお母さんたちを幸せにしたいと思ったのよ」と。ベアテさんが最後に残した言葉は「これから日本の女性は、未だ多い世界の不幸な女性を助けるために働いてください。」というものであった。ベアテさん、ありがとうございます。ベアテさんが明記した家族における男女平等は日本で女性たちの連帯によって生き続けています。

私は男性が iba っている光景が嫌である。その最たるものが軍国主義の頃の男性の姿である。我が家の夫、3人の息子は憲法を守り、女性を大切に、家庭を大事にする男性に育っていると信じている。だから大事な息子達を戦場になんか出すものか。息子たちよ、いばるような男になつてはだめだよ。

「押しつけ憲法」？ 明治期からの自由民権運動やら五日市憲法草案などの潮流が現憲法の根底にしつかり流れている。また、昭和では鈴木安蔵に代表される民間人による憲法への熱い思いと運動があつたのである。この流れを知らず、否、無視している勢力が、何とかの一つ覚えのように、「押しつけられた」と繰り返している。

今回その源流を知ることになった五日市憲法草案や、治安維持法の下で拷問を受けながら権利や自由を訴えた人々、現憲法に至るまでの民衆の運動や苦難を知る時、その尊い闘いの中から生まれて9条を決して手放してはならないと思う。

72年間、9条は日本や日本人を守ってきたの

である。

かつて読んだ新聞記事で今も忘れられない記事がある。戦闘地にいた記者に子供達が寄つてきて「どうして日本に戦争がないの？」と聞いた時、記者が「日本には9条という戦争をしないという法律があるんだよ」と答えると、「いいなあ・・・国が戦争をしないって決めてるなんて・・・」と目を輝かせたという記事だった。「いいなあ・・・」と言つた子供達の瞳を輝きを知る時、戦火から逃れ欧州へ移動した難民の人々の報道や、北朝鮮の子どもがやせ細っている姿の映像を見る時、世界は平和で、子ども達は幸せでなければならぬと強く願う。

今は亡き母がイラクに次々と爆弾が落とされるテレビ映像の前で「ああ・・・嫌だ嫌だ。なんで戦争するんだ」と涙を流していたことがあつた。また、生前唯一の海外旅行で訪れた韓国から帰つてきた時の言葉は、今も忘れられない。

「会う人会う人がみんな親切だった。韓国はいい国だなあ・・・なんで、あんないい人だちと戦争なんかしたんだべ・・・なんで、あの人たちを憎んだり、悪くばかり言つたんだべ・・・」

いっぱい、いっぱいあやまりたがった……」
と。母達の涙や後悔を二度と繰り返してはならない。

だから、絶対に戦争はだめ！対話し続ける強い意志を表明し、世界の価値観や文化の違いを認識し、ねばり強く忍耐する心を持った政治家を選ばなければならぬ。大きな和の心を持って、この緊張を解く努力をして欲しい。戦争は外交の敗けであり、政治家の敗けなのだ。寛容と知性を持ち、9条をより世界に発信してゆくリーダーを今こそ私たちは選ばなければならぬ。

私たちの憲法には、個人として尊重され、幸福追求の13条があり、女性を守る24条があり、生存権の25条がある。そして世界がうらやむ9条がある。また、全世界への愛にみちた前文がある。

72年間守り通して平和を世界へと広げてゆく日本にしてゆかなければならないと思う。

高圧的、好戦的な憲法を学ばない安倍総理を退陣させる時が来ているのだ。

■二〇一七年十一月十日千三忌・駄句を詠む
仲秋の名月や心洗われる

赤とんぼ

育て上げた一人ムスコに戦死され

流水星

麗舎に集うあなたにノーベル賞

流水星

千三忌ダクダクと歌を詠む

流水星

期日選挙安倍さんグラツとするかしら

ふくれ女

安倍さんいつまで首相やるつもり

ふくれ女

千三の母の叫びこだまする

母子草

ザックザク低音ひびく父の靴

母子草

千三忌シテイプラザのおもてなし

秋海棠

滋賀の酒のんでうれしき千三忌

山彦

彼岸花ここから南へ咲いてゆく

山彦

曾孫の手しっかり渡す平和憲法

甚古神

モリ・カケを隠して太るアベ一強

甚古神

秋深むお膳の上も色づけり

又女

北上川で琵琶湖の水の香り立つ

又女

千三も秋味嬉しセキの飯

ひで爺

紅葉初む男山見つ千三忌

テル女

母セキの抱きし小石や千三忌

テル女

天下国家を論じる悲しみとは言いながら
我の悩みに手を焼いて

林檎

和賀の月

菊池留蔵

雲走る夜空にはえる三日月に山中武将が思ひ浮かばる
ゼットより見下す海に灰白くほのしろ夢見のごとし環礁のみゆ
放送の赤道通ると声のあり眼下に白く環礁の見ゆ
夏油路を急げば呼よる瀬耳近く秋の終りの林にひびく
冬枯れの山を仰げば震災の旧友は如何と心にかかる
殉難のみ霊鎮めと初の日に祈り忘れぬわが心かな
しとしとと降る雨音の寂しさに背丈の雪に春立ちにけり
立春の軒のつららも降る雨に滴となりて命細れる
裸木の山を仰げば寂寥せきりょうとわが身に冷く木枯らしの吹く

谷の間の岩に砕ける石清水林に籠る神秘の音が
行く雲の影映るかも大川の蛇行の水明稻原の中

天津風雲吹き飛ばせ瑞穂田みずほだの出穂の盛りを如何にし収む

山里に久住居れば街の夜の生活くらしも欲しと思ひもありぬ

九十歳むかし変らぬ産土の清き流れの鈴鴨の川を

鈍色を保って羽山冬に入る峰の木枯いと耳近し

水温るみ柳青めば和賀川を鮠さかのぼる群れの虹色

鈴鴨の川のながれもさやければ瑞穂に空も青そまり見ゆ

八條の田植機械の音軽く植田に変わる時の早さよ

わが植えし杉の林に立ち入れば一人静かの花のわびしさ

涼風のそよぐいなだの道行けば鷺が気付いて羽折りとびさる

秋も早和賀の羽黒の山襷ひだのもみじ眺めさやけし

舟は早稲の黒の山葵の効や江州の習や

意風の子もついな式の飯やせお驚な反たつて陣地りともむちる

○第26回 農民文化賞受賞

受賞によせて

立天し山所
春春と里里
の風のしゴ
軒雲とバ
の火と主
つち降る
らお雨お
もか音の
際端寂の
雨田し
にの社主
と樹背舌
な文裕
での雪
命に思
細春立
桐ひま
むち
にり
なり

麗ら舎読書会 農民文化賞受賞

開かれた農民活動文化の先頭に立つ

主宰・小原麗子

北上市和賀町長沼5-343-3

『農民文化賞規定』

・岩手農民大学・岩手県農村文化懇談会

趣旨

岩手農民大学創立10周年を記念して「農民文化賞」を設定し、農民の学習運動における、教育・文化活動・協同組合活動の推進をとおして、農村文化・教育・農協運動の発展に寄与することを目的とする。

このため、農村教育・生活文化の諸活動と地域の農業生産、地域の文化に顕著な成果をあげた、個人及び団体を選定し、これを表彰する。

高橋つか
小平玲子
宮崎順子
多田テル
千葉ちた江
渡邊真吾
相川元美
山下正彦
渡部豊彦
高橋哲子
渡部恵子
阿部容子
佐藤秀昭



佐々木キエ
佐藤恵美
小原麗子
渡邊満子
植田朱美
佐藤弘子
兒玉智江

(千三忌・2017年10月21日・写)

1999年・千三忌の日写



向かって右
前列から

折居ミツ
渡邊満子

小原照

小原麗子

高橋つか子

後列

分らない

石川純子

渡邊真吾

佐藤秀昭

折居次郎

千葉満夫

和賀町に麗ら舎が出来た

岩手日報《婦人・家庭欄》より抜粋

(昭和六〇年四月二五日付)

おなごたちが気軽に集まれる場がほしいーという夢がかなえられ、和賀郡和賀町長沼に「麗(うら)ら舎」という小さな家ができて半年になる。この家を建てたのは、北上市で詩を書き続けてきた小原麗子さん(四九)。毎月一回は近郊に住む女性たち七、八人が「おりづるらん会」定例会を開くなど麗ら舎を拠点にした活動が続けられている。

おなごたちが自然と集まった

田んぼに囲まれたこの家の目の前には奥羽連山が迫っている。長年北上市内に住んでいた小原さんだが、農村の暮らしが見える所がいいと、この地を選んだ。

小原さんは昨年、二十七年間勤めた北上市農協を、定年まで八年残して退職した。

「高校、大学と進学した仲間たちより七年早く働き始めたから、働くことを早く切り上げて勉強するつもり」だった。そして自分の住むところにおなごたちが自由に集まれる一間、だれでも息抜きに立ち寄れる場を作りたいたいと思ってこの建物を建てた。小ぢんまりとした家の真ん中に十二畳の板張りの部屋がある。ここがおなごたちの部屋で、ほかには小原さんの書斎と寝室があるだけ。

この日は麗ら舎を支えている「おりづるらん会」定例会。和賀町、江釣子村、北上市、水沢市などに住む三十代から五十代までの女性たちが、それぞれ何か一品お茶受けのお菜を携えて集まる。この日はメンバーの佐藤春子さんの家族詩集「お星さまが暑いから」が課題本。好きな詩、考えさせられた詩など朗読しながら進められる。

詩評や人生論、率直に

本読みの終わった後は、持ち寄ったお菜と季節のフキノトウの卵とじを味わいながらよもやま話に花が咲く。メンバーは仕事や家族のことをやり繰りして集う。民話を採集している人、詩を書き続ける人、仕事に悩む人などそれぞれテーマがあり、人生がある。ほかにもこの麗ら舎は北上市内に住むお母さんたちの詩の会「ひやりっこの会」合評会などにも使われている。

「はつきりとした目的を持って麗ら舎としたものではありません。あとは集まってくる人たちが何かをつくり出していけばいいのです」と小原さんは語る。おりづるらん会のメンバーの一人、水沢市に住む高校教諭千葉純子さんは「小原さんの家なんです、麗ら舎と名前がつくと、自分のところみたいに入りやすい。麗ら舎が独り立ちし始めているんです」という。

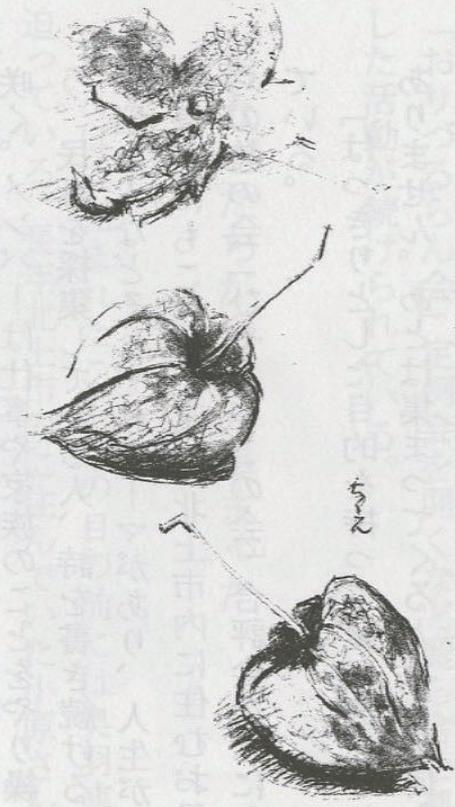
子亡くした母の気持ち継いで

目的を持たないという麗ら舎だが、メインテーマが一つある。麗ら舎のすぐ近くの道端にニューギニアで

戦死した高橋千三さんの墓がある。この墓は高橋さんの母セキさんが、自分が死ぬと息子を思い出してくれる人もなくなる、人通りのある道端に建てれば、手を合わせてくれる人もいるだろうと、遺族年金をためて建てたもの。

セキさんは反戦の気持からではなく、信仰心の深さからこの墓を建てたのだが、だんだんに忘れられていく戦争のことを既に見抜いていたとも言える。「偶然麗ら舎の近くにある墓でもあるし、私たち会員が墓守をしながら多くの母たちの気持ち、遺志を継いでいきたいと思っています」と小原さんは語っていた。

室町通りを歩くと、石川町にあり、高橋千三さんの墓がある。この墓は高橋千三さんの母セキさんが、自分が死ぬと息子を思い出してくれる人もなくなる、人通りのある道端に建てれば、手を合わせてくれる人もいるだろうと、遺族年金をためて建てたもの。



もえ

和賀町に麗ら舎が出来た。この舎は、戦後の復興のために建てられた。高橋千三さんの墓も、この舎の近くに建てられた。高橋千三さんは、戦死した。高橋千三さんの母セキさんは、自分が死ぬと息子を思い出してくれる人もなくなる、人通りのある道端に建てれば、手を合わせてくれる人もいるだろうと、遺族年金をためて建てたもの。

古い手帳とアルバムから

佐藤 秀 昭

一九八四年八月五日、和賀町長沼に真白い柱が建てられた。私は千三の墓を左折して校庭に古墳史跡のある学校を通り、麗子さんの家の上棟式に向かった。

二カ月後の一〇月七日、北上市の上野町からいよいよ引越となり、一寸だけ手伝う。手帳の余白に『麗レイ、ウララカ、ウルワシーとか『麗』の二本並んだ『角』の美しさをあらわし、ツラナル、『麗珠』は美女、『麗文』美しい模様、『麗采』イロドリ、文采などのメモがあった。

新築の進み具合などを観ながら、純子先生も同道して八月十一日に沢内村へ向かった。帰途、湯田温泉郷の骨董屋で、上品な『高足膳』を見つけて麗子さんが二つ購入し、その後の『七夕』や『おなご正月』の献饌膳として使われ、一つは私にと頂戴して、我が家でも盆暮れ行事に現役中である。

一九八八年の『七夕』には、怪しげな笹竹を持ち、八九年一月の『おなご正月』では『宇宙に包まれているんだね わたしたち』と、麗子さんの言葉が染められた風呂敷を前後二枚にかぶった神主？モドキのスナツプ写真が残っている。

『麗ら舎読書会』の行事の中でも、小豆粥の給仕をする正月と、七夕、そして千三忌ぐらいしか参加していなかったものの、生来『オダズモッコ』の私のアルバムには胡散臭い姿が沢山張り付けられている。

そして、そのスナツプ写真の中には、『麗ら舎』で同席し、もう会えなくなった懐かしい多くの方々の笑顔がある。(2017・11・15)

白いシクラメンの 花のような人

渡邊満子

麗ら舎をはじめて訪れたときのことを、今でも鮮明に思い出します。

一九八五年、三月二十三日（土）。今から三二年前でした。

おりずるらん読書会の案内を事務局だった今は亡
い石川純子さんから頂きました。純子さんの夫満夫先
生の美しいイラストが描かれている手書きの案内状
でした。

案内状には、一部、「古代エジプトの女たち」門屋
光昭氏によるスライド・ビデオ・講話。二部として「三
月の桃の節句にちなみひな祭りをします。各人お一人
づつ、お人形をお連れ下さい。その人形にまつわる思
い出、あるいは、女にとって人形とは何なのか……
を語りあいたいものです」という内容でした。私は娘
が小学一年生の時誕生祝いにあげた麦わら帽子をか
ぶったブラウスにスカートを穿いたあどけない顔を
した人形を持って行きました。その人形は現在、自宅
の床の間の椅子に座って微笑んでいます。

この頃、純子さんも恵美さん（前事務局）も水沢一
校に勤務していましたが、読書会は夕方五時半か
らでした。メンバーは、小原麗子さん、石川純子さん、
佐藤恵美さん、兒玉智江さん、松平則子さん、武田礼

子さん、木村若子さん、渡邊満子の八人です。熱が入り何時も夜中の二時頃まで、時間を忘れて話していたことを思い出します。

自宅前の鳥海柳停留場から横川目行きバスに乗り藤根駅前のバス停で降りる。道端のエノコログサやシロツメクサの生えている野道を、暮れなずむ夕暮れの風景、遠く奥羽山脈を眺めながら麗ら舎に向かつて歩いて行きました。周囲は一面に田圃が拡がり、麗ら舎が一軒ポツンと建っていました。

なかから話声が聞こえ、玄関に入ると繁茂したおりずるらの鉢が沢山並んでいました。「おりずるらん読書会」と言ったのはこのためだと思います。後に麗子さんの名前から『麗ら舎読書会』になったんですね。室内に入ると、麗子さんの書斎と思われる南に面した床の間のある六畳のお部屋には本棚に本がぎっしりと並んでいました。壁に『七度の飢饉に会うたてよ、一度の戦争にあうたてよ』と和賀町のハギばあさんの言葉を書いた書がかけてあるのが目に入りました。

始めて参加した読書会に私は緊張していましたが、麗子さんはじめ優しい人たちで、むずかしいことでも解りやすく説明してくれ、会の雰囲気は良く、私はすぐにとけこむことができました。会の終わりには一人一言があり、自分の考えていることや悩みなどを、気を使うことなく自由に話せると言うことがほんとうに良い事だと今も思います。

この時の出会い、麗子さんの印象が一瞬、“白いシクラメンの花のような人”と思いました。

学ぶ事の喜びを教えてくれた麗ら舎読書会。雨の日も、風の日も、吹雪の日も、麗ら舎に行くことが楽しく、私の生きがいになりました。

麗子さんはいつも言っていました。『記録することが大事だよ』と。麗子さんは実践してしています。私もその言葉に励まされて、書くことを続けて行こうと思っています。

『別冊おなご』も34号になりました。1号は1985年十一月に発行されています。目次をみると麗子

さんは、『男たちヨ乳房だけを愛でるな』、純子さんは、『セキさん、あなたに真向かうために』、兒玉さんは『軍人の父』。私は『小さい死』と題して戦後間もなく消化不良で亡くなった妹の事を。

この号のあとがきに麗子さんは次のように書いています。

女たちのモニュメント

・小原麗子

今日(二三日)、明日、明後日と、墓地はまことに華やかだ。墓前に供えられた赤飯、草花、それぞれの家の野菜畑で採れたササゲやナスやジャガイモやニンジン。昆布に油揚げやコンニャクなど、おいしく煮て供えられ、先祖の霊もさぞや満腹だろう。語らぬ石に手を合わせてわたしたちは、一族の行く末を見守って下さいとたのむ。やがて自分もここに眠るなどとは誰しも思っていない。いや誰しもが思っていない。やはり他人事なのだ。どうして死ぬことが一回限りなのかと、「先祖代々の墓」に問うても、答えは帰

らぬだろう。

「死」には、いつも残念、「無念」の想いをたどっていくと、一つの墓石に突き当たる。墓石には『南無阿弥陀仏』と刻まれてあった。

高橋セキさん(昭和四一年、七四歳で死亡)が、昭和三〇年に建立した、その墓石の意味は深い。セキさんは二八歳の年、夫に死なれて婚家先からもどり、一人息子千三を育て上げた。が千三は昭和一九年、ニューギニアで戦死。セキさんはもどった遺骨に、「こつたになって来たってが」と、その骨をなめてみたと言う。農作業の手間取り、むしろをつるすようなとほしい暮らしのなかから、一〇年もかかって千三の墓を建立した。「オレ死ねば、戦死した千三を思い出してくれる人もなく、忘れ去られてしまふべと思って、人通りの多い道のそばに建てだす」と、セキさんは生前に語っている。

「しらねえ人でも、戦死者の墓だと思えば、戦争を思い出すべなす」とも。

思い出すべなス」とも。

わたしたち『おりずるらん読書会』は、来る十一月四日、千三の命日に第一回『千三忌』を持つことにした。「千三忌」を持つことは、いま一度、セキさんの『意思の墓』の源へ気持ち運ばせることであり、そこから自分の戦後を問い返してみることもである。

メンバーのひとり、智江さんは、軍人の父を持ち、その父が戦死した後親子五人がどれだけの辛酸をなめたかを語るまいと、口を閉ざしてきた。が、いまやつとセキさんの墓に出会って、それを語ろうと思ひ、記録にまとめる契機をつかんだと話す。

また、石川純子さんは「わたしの母も戦争未亡人だが、いち早く立派な墓を建てたけれども、それは『先祖代々の墓』であり、個々の家を超えるものではなかった。セキさんの墓はそれを超え、多くの女』たちの碑になった」と語る。このように、戦後四〇年、セキさんの『意思の墓』は、一つの蘇りをみせつつあるなと思う。「お念仏の願力で念仏をとなえだ人達も、す

くわれるから、世の中のためにもなると思うの」と語ったセキさん。一人の老農婦の建立した墓石は、四十年戦争で夫を亡くし、子を亡くし、父を亡くし、そしてわたしの姉のように、戦地から帰らぬだろう夫に絶望して、自死した女たちの、モニュメントとして、またその後を生きるわたしたちに、様々の思いを語りかけ、きょうも夏の日盛りの下に建っている。

全国農業新聞より（一九八五年八月二三日）

今回、農民文化賞を麗舎読書会が受賞しましたが、麗子さんは、ご自分の受賞を強く固辞したということ

です。
会員、会友の方々、千三忌、おなご正月に集う皆さん、ほんとうに優れた方々です。皆さんとの出会いがあったことを幸せに思います。

清廉な人、白いシクラメンの花のような麗子さん、私はあなたをこれからもう思い続けるでしょう。

小原麗子さんから

戴いたもの

佐藤恵美



麗

一、麗子さんとの出会い

純子さんに誘われて、三十代後半、北上の麗子さんの住むアパートに行きました。美しい人で方言で語るおっとりとした、親しみを感じるひとでした。二階の部屋を見回すと少女時代のようなインテリア。本や花や飾り物などメルヘン風な世界に入り込んだようで、とてもうれしくなりました。

当時私は子ども三人を育てながら共働きの最中でしたから、身も心も解放されたものです。麗子さんの部屋は私にとって「秘密の花園」でした。

純ちゃんと誘い合って通い出したのです。

家事などを済ませてからなので夜中になりました。

仕事、子育て、家族など日ごろの悩みを吐き出すのにうってつけの場所でした。自分の抱える問題が単に個人のものというよりも、その根っこにあるものが何なのか、を突き止め、どのように対処したらいいかなど、話し合っている中で、個人の問題が個人の枠を越えて、女性一般の問題として見えてくるのです。苦しさから解きほぐされるばかりか、皆で考えることの楽しさも共有できるようでした。

特に印象強いのは、「家」に呪縛された女性ありようから、自分から積極的に取り組んでいこうと覚悟を新にしました。

例えば、外出する時に夫に「食事を作らないよ、あるもの食べて」というと、「いいよ」と返ってきます。とても気軽でした。

本を読んだり話合ったりしよう、ということでも、読書会が始まったのでした。

平成六年三月、朝日新聞に「おんなが集う」1 麗ら舎読書会―悩み話し道しるべ」というみだしで載りました。

取材した記者の大村美香さんは、「かつて、女性が集まるところと言えば、(略)男性が作り上げた組織の一部か、おけいこごとの域を出ないものが多かった。でも今、そこにとどまらない、共通の志をもった女性の自由な集まりが生まれている。彼女たちは何を求めて集うのだろう。県内のいくつかの集いの場を訪ねてみた。(略)―小原麗子(五八)、佐藤恵美(五四) 石川純子(五一)を訪ねた。会員の一人石川純子さんが初めて小原さんと会ったのは20年以上前のこと。共働きで教師を続け、仕事と家庭と

の両立に疲れ、女性として生きること悩んでいた。そんな時、農協につとめながら、詩作をする小原さんのうわさを聞いて「話をしたい」と訪ねたのだった。それから月に一度は顔をあわせるようになった。《憩いの場だった》と振り返る。(略)このような、引き合う二人の出会いから麗ら舎読書会は続いて来たのです。三百回の内容一欄には驚くし、どこにその成果があるのだろうか、と考えてしまいます。

二、「千三忌」、「別冊おなご」発刊

「千三忌」といえば、最初知らない人の墓参りには抵抗がありました。そのうちに毎年行われる千三忌。母親セキさんの、一人息子を戦争で失った悲しみが語られ、「俺の息子と違ってきたが、天皇陛下の子どもだったのか」、「墓があれば、自分が死んでも誰かが押んでくれるだろう」と、日雇いをしながら人目に付く道端に墓を立てた。

戦争とは国の方針で行われ、犠牲になるのは国民一人一人、七〇年前まで日本国が仕掛けた「十五年戦争」、その犠牲者が三百万人を数えるなど、様々な事柄がはっ

きり分つてきたのです。

「戦争を考える日」として、千三忌が設けられ、墓参が続いています。

私は「戦争を考える」ことの手がかりとして、戦前・戦中に日本が植民地化した旧満州国を経験した人々の「聞き書き」を始めました。

そうすることによって、私の幼少時に満州国の官吏だった父と家族が暮らしたこと、父が終戦直前に現地召集を受け、そのまま捕虜としてモンゴルのウランバートルの強制収容所に送られたこと、残された母と幼子四人の家族が戦後満州から引き揚げる時の「苦勞」など、ことあるごとに家族で泣いたり笑ったりしながら話題にしていたものです。

しかし、「私の満州国」を書き続けることで、旧満州から命からがら引き揚げてきた「被害者」と思っている日本人は、現地の中国人からすれば、「侵略者、加害者」ということを知るようになり、日本により植民地化された旧満州国の意味するところを深く理解するようになりました。

聞き書きの大切さ、これも千三忌のお陰だと思ってい

ます。

《千三忌》の極め付けは、私達夫婦が中国・北京滞在中。「中国で千三忌を」という私の願いで、麗子、純子、恭子さん三人が北京にやって来たことです。

麗ら舎読書会のメンバーには、当時満州で暮らし、引き揚げた経験者も多く、私は北京の盧溝橋にある「中国人民抗日戦争記念館」に場所を移した「千三忌」を願っていました。

その時のことを麗子さんは「おなご一八号」あとがき、「九条を世界に示せ千三忌」に書いています。

中国人民抗日戦争記念館を訪れ、「国」の代表が物を言うことの意味を思い知らされました。案内してくれたのは、二十代の中国人女性の日本語教師です。

記念館には《日本軍の暴行館》もあります。暴行とは戦争よりも生々しい言葉です。

日本の兵隊が赤子や女性を殺傷し、丸腰のひとたちを生き埋めにしていきます。日本の細菌部隊が生体解剖実験をし、実物大の蠟人形がヒック、ヒックと動き腹から内臓が露出しています。逃げるわけにはきません。

《地獄》とはあの世にあるのではなく、人がこの世で作り出す惨状なのです。

長時間かけて、やっと、「日本国憲法」がある場所までたどり着きました。そして、最後の陳列ケースに、村山富市元首相の揮毫がありました。《歴史を正視し、日中友好・永久平和を祈る》（一九九五年）と書かれてありました。この場合の「国」とは、外に向けて開かれていると思います。

中国大陸で、日本の軍隊が平和な故郷を踏みにじり、焼き尽くし、殺し尽くした、記憶が、十三億の中国人民の間で語り継がれていることを知りました。

「日本はひどいことをしましたね」というと、優先生は戦争ですからね。日本だって人民は犠牲者です。ただあとが悪いね。日本政府はどうしてドイツのように認めて謝罪しないのですか。」

優先生と別れて宿舎に戻ってから、さらに夫も加えて麗ら舎のみんなの話し合いは、いつ終わるともなく続きました。

十四年目になる千三忌もここまで来たのか強く感じさ

せられた一日でした。

三 水沢詩の会《蘭》結成

荻又通信発行・「岩手おなご詩集」発刊

続けざまに病を得たことを機に私は二十五年間の共働らきを辞めた。

こんなに気楽な暮らしもあるのかと、楽しい日々を過した。反面、社会から取りのこされそうな恐れも感じた。

三人の子ども等も就職、進学と家を出た。更に相談相手の夫も単身赴任で県北に行き、一人になった。

そこで麗子さんに相談、月に一度我が家で、麗子さんを講師として詩作する会を続けた。義姉、叔母、友人など六人ほどで、およそ八年間。麗子さんは、北上から水沢に通い続けてくれました。各々作品を持ち寄り、作品にまつわる話がまた面白く、麗子さんに添削と批評をお願いした。さらに参考作品を準備してもらい、詩作品の鑑賞にも取り組みました。

詩を書くこと、語り合う事以外にも温泉や、山野でのわらびやキノコ採りなどで楽しく過しました。

この時期、麗子さんは、会員ばかりでなく広く友人知

人の同好の士に呼びかけて作品を集めて、「岩手おなご詩集」を発刊したのです。

麗子さんのよく口にする言葉、「田も作る、詩も作る女性の出現」を目指して、麗子さんの息のかかったおなご達一人一人が力強くうごめき出しました。

そんな中で私は家を出た三人の子供達に便りをしようと、「茹又通信」の発行を始めました、子ども達の進学、卒業、就職、結婚、孫のこと、祖父母や従姉妹たちの様子など、月々の様子を送り続けて家族の絆を実感しながら暮らしてきました。

長女の披露宴に、麗子さんは、私の書いた三連の詩の一連を朗読してくれました。

「アマリリス」
立派な一鉢を／下さった産院の先生／怖がる苦しがるママを／つききりではげました。パパ／先生の手に抱かれた／へその緒のついたままの／あなたを／ニッコリむかえた／パパの笑顔を／アマリリスは知っているのよ

子連れ披露宴、親戚友人たちに、詩の朗読は安心と

感激を与えてくれました。

その時の孫も今は一児の母親です。私にとっては初曾孫です。孫達は長い夏や冬休みには水沢に来ていたので、麗ら舎にはよく連れて歩き可愛がってもらいました。

四、麗ら舎の山登りと旅

《焼石岳》初登山

一九九六年六月二七日二年、焼石岳登山決行。北上から麗子、満子、忠子、孝代、次郎、水沢から純子、秀昭、英夫、恵美、恭子、美津子三台の車に分乗して中沼コース登山口に向かう。十一名が一行になって歩き出す。次々と目に飛び込むぶなの大木、次々と現れる花々の名前を確認。中沼の水面に映える木々。銀明水小屋は丁度12時、秀昭、美津子さんが途中採り貯めてきたネマガリタケ、ポリメキ、ギョウジャニンニク、豆腐もはいり味噌汁の出来上がり。たまたま次郎さん、八十歳の誕生日。恭子さんが運んできたワインで祝杯。うれしい！頂上目指して出発。女性達は身だしなみをはじめめる。純ちゃんのコンプクトは粉おしろい顔中粉だらけ“粉箱よこらさとかついで歩かにやなるまい”と歌も飛び出し大爆笑。

午後九時、真つ暗闇の中をなんとか無事に下山。

麗子さんの礼状から「還暦を過ぎてからの初登山、ゆつくりと、のんびりと、だが足元は細心の注意で、達成することができました。英夫先生のリードのたまものです。ありがとうございました。(駄句三句)

英夫先生見せたき尾根を黙々と

山々のあまりの静寂さに、一瞬、「これは死後の世界」
と思つたものです。

梅雨晴に浄土もかくや白山一花

十二時間の山歩き。

そのファイナーレがまた傑作で、十一人の参加者で懐中電灯は二灯だけの手探り、足探りの下山となつてしまいました。

闇降りて声をたよりの下山かな

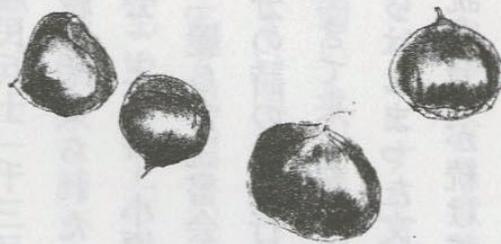
その後も《早池峰山》登山(日帰り)、「裏岩手縦走(一泊二日)」、「岩泉・久慈の旅(山根・車市・べっぴんの湯一泊二日)」など、岩手の自然を楽しみました。

麗子さん

およそ四〇年のお付き合いで得られたものは限りありません。

私の血となり肉となつて今に生きづいております。

その一端を思い出すままに綴ってみました。



麗

麗ら舎読書会を振り返って

兒 玉 智 江



夏油の紅葉をバックに。2017・10・27写

農民文化賞は「おなご正月」や『別冊おなご』の文集の発行、戦没農民兵士「千三忌」の墓を供養するなどを35年余り続けて来られた事への賞である。

「麗ら舎読書会」主宰者・小原麗子さんが贈呈される賞であったが「麗ら舎読書会」として受賞した。

麗子さんは自分の詩の本発行のほかに、『別冊おなご』のおなごが生きて来た記録を始め最初は、麗子さんのペン書きからはじまった文集である。皆によびかけ集い「麗ら舎読書会」が続けて来られた事への麗子さんへの賞であったにも拘らず、麗子さんは辞退した。「麗ら舎」は自分の家と言うよりおなごたちの集う家として在るといふ麗子さんの理念があった。

2017年2月19日の授賞式には会員全員が参加して、その喜びを受けた。

わたしは、詩人小原麗子さんの詩を書いている毅然とした麗子さんの魅力にあこがれていた。話をしたいと思っていた。

嫁になってから彫刻などしているおなごなどはどこを向いてもいない。悪嫁（くされよめご）のレッテルを張られる覚悟をした。

自分は自分なのだと思いながら、彫刻を勉強していた。

そういう中、1982年（昭和57年）わたしが41歳の時、麗子さんとお会いできた。

お会いできたきつ掛けは木村若子さんの紹介である。私が疑問に思っていたおなごの生き方に、同じような疑問を持っていて、それを世の中に詩や文章で問いかけているのであった。話し合うようになって、答えが返って来る麗子さんにお会いできたことにこの上ない喜びを感じた。

その時の会話が思い出される。「おなごは一步外に出たら話すなと言う。話すと、男達からあのビデ（おんな）は、生意気だと悪口されるからと言う。こんなバカな話などあるわけがない」たぶん目をひんむいて

私は大きい口で言っていたと思う。聞いてくれる人がいて、安心して言いたいことを言えたのだった。私の彫刻はたいてい女がテーマになっている。私は子供を3人も亡くし育てられなかったことが原因でもあるが子供がいる、いないに関わらずおなごたちを見ると皆尊敬してしまう。

その後、私は山の女（神）^{かみ}と言う題でひんむいている大きい目ん玉にして口がない彫刻を大きい丸太で3体彫っている。言わないが、あの大きい目玉は宇宙の果てまで見ているんだと言う意味がある。女から産まれて、なんで、女をバカにする言い方を男たちは言うのだろうか。女は弱いものと決めつけている。そういう村での生活を小さい頃見て来ているから、そういう発想になるのだろうかと思っている。

小原麗子さんの住まいが北上市内街に在った頃、木村若子さんと一緒に訪問した時が私の読書会の始まりだったのだと今思う。

若子さんと3回くらいおじゃまして、何だりかんだ

り話しあった。その後、麗子さんは今の和賀町長沼に家を新築したのである。新築の際には地鎮祭の地固めと称して踊った記憶がある。ドジョウすくいか、木曽節ではなかったかと思う。

現在の麗子さんの住まい麗ら舎ができ、引っ越しの本の整理などにも時間がかかり、皆が集まる読書会が始まったのは3、4か月後のような気がする。

麗子さんは故石川純子さんとは密接な読書の繋がりが以前からあったようで、発進はお二人の熱心な麗ら舎読書会への尽力である。楽しいアイデアの計画で私たちを読書会に導いてくれたのである。

月に1度の読書会は事務局長の故石川純子さんの夫千葉満夫さんの絵が添えられている案内のハガキである。毎月1回の読書会案内が楽しみであり、欠かさず参加していた。純子さんが亡くなった後、佐藤恵美さんが事務局長になり、恵美さんの夫佐藤英夫さんの写真に恵美さんの俳句が添えられている案内のハガキである。純子さんがくれるハガキと同じように毎

月届くのが楽しみであった。今、その多くのはがきを見る時があり、読書会の貴重な歴史が詰まっていると思っている。

読書会はレポーターを決め、その人が選んだ本を読み感想などを話しあったりする。今、自分はそのような立場に立たせられているのか、おなごの日常ありふれた話題などは駄句の会を通して話されたりしていた気がする。その駄句は必ず麗子さんから便りとして送られてきている。

『別冊おなご』第1号は1985年11月4日発行で、テーマは終戦の生活記録である。第2次世界大戦の戦争が原因で父、叔父、兄、子供を亡くした悲しい経験の持ち主の会員達である。千三忌も同時年に行われ、現在に続いている。

麗子さんは戦争が原因でお姉さんを亡くしている。中国で終戦を迎えた佐藤恵美さん、読書会の元会員の故小原照さん、故折居ミツさんは子供を亡くしている。

故石川純子さんは軍人の父が戦死、私も軍人の父が戦死している。青春時代に終戦を迎えた渡邊満子さん、渡邊真吾さん。そして、故菊池敬一先生の『あの人は帰って来なかった』にも出て来る千三の母セキさん。故小原徳志さん著の『石ころに語る母たち』の中に出て来る千三の墓が、麗ら舎の側にあった事も千三忌をするきっかけになっている。『千三忌』は終戦の生活記録をしていく中で、会員仲間で話し合いによって始まった。

わたしは、千三の母セキさんの女の立場を自分に置き替え、戦争とは何だったのかを考えるのだと自分に考え『千三忌』へ賛同していた。『千三忌』が理解出来ない人は去って行った人もいる。

第2号からはお産や嫁、姑問題などに関わったことなどを記録している。

『別冊おなご』での表紙を私は1号から34号まで欠かさず描かせて頂いているが、途中の13号から後10年間投稿しない時期がある。また、姑が弱って来

たのを理由に欠席していたこともある。

赤紙1枚で兵隊となり戦死した人、私の父は軍人で戦死した人だったので、赤紙1枚で戦死した人との考え方の違いがあり、納得いかず遠ざかり、千三忌にも参加しない時期が3年くらいあった。

軍国主義当時は右習いして、右習いしない人を罰し、終戦になれば、右習いしてきた人達を罰し、自分だけは正しかったと笑って話している人が多いと感じた。その時から私は冷めた目で見えるようになった気がする。

姑が亡くなってからのある日、渡邊満子さんが麗ら舎に出るように誘ってくれた。それに、一生懸命おなごに取り組んでいる麗子さんが愛おしく、またみんなが懐かしく、自分で気を取り直し出席したのである。何、すぐその中に溶け込んで行く私の性格である。出席するように進めてくれた渡邊満子さんに感謝している。もう18年前の事で忘れていたが、思い出した。

2015年8月北上市青柳町の飲み屋街の広瀬川通りで、行燈祭りがあった。係の山下正彦さんが行燈を書いてくれと頼みに来た。麗子さんも頼まれたのだ。所が、麗子さんから「行燈の絵、描けなくなったの、兒玉さん描いて下さい」と頼みの電話である。眠いばかり眠いという。村上佳子さんがちょうど私の家に来ていて、眠いと言うのは病気だよね。麗子さんは絵を描けないと言う人ではない。「おかしい」と二人で話し合った。すぐ山下さんに電話し、麗子さんを病院へつれて行くよう頼んだのだった。行燈祭りのおかげで麗子さんは無事退院する事ができた。

麗子さんが主宰した麗ら舎読書会の存続は、おなごみんなの事を考えて行っている会であるからだと思う。

一生懸命努力し主宰運営をしてきた麗子さんへ感謝して、これからも無理せずいつまでも元気でいて指導して頂きたいし終わります。

今まで佐藤恵美さんが担当していた事務局を、2016年4月から私がすることになった。恵美さんが大変そうだったので、私にできるだろうかと思いつながら引き受けたのである。会員の皆に助けられながら1年半カ月過ぎた。

現在の会員と会友は柳原恵さん30代の若い人から80代、10月21日2名の会友入会があり24名である。

*麗ら舎読書会を支えてくれた会員7名の物故者。

・折居ミツさん・小原照さん・石川純子さん(67歳)
・2010年10月1日)・折居次郎さん・村上末子(2011年3月11日)・小田島正美さん(94歳2016年7月2日)・三田照子さん(99歳2017年4月18日)(2017年10月21日・記)



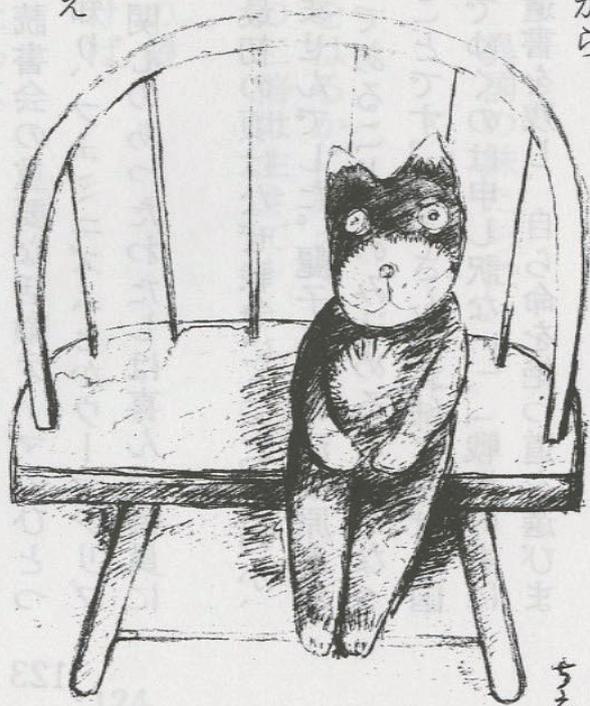
向かって右から

- ・ 佐藤弘子
- ・ 相川元美
- ・ 佐藤恵美
- ・ 阿部容子
- ・ 鈴木照子
- ・ 宮崎順子
- ・ 小原麗子
- ・ 千葉ちたえ
- ・ 小平玲子
- ・ 田村和子
- ・ 高橋哲子
- ・ 渡邊満子
- ・ 柳原 優
- ・ 柳原 恵
- ・ 兒玉智江

(15名)

・ 362回・麗ら舎読書会(北上生涯学習センター小会議室)

2017年7月29日・写



ちえ

戦争と女の問題を問い続ける

小原麗子さんに出会って

田村和子

最近、「凜とした〇〇〇」という形容句をしばしば見かけます。少し使いすぎでは、と思うこともあるのですが、麗ら舎読書会を主宰する小原麗子さんを形容する言葉としては実にぴったりです。「凜とした小原麗子さん」です。

一九九九年の春、わたしは茨城県水戸市から岩手県胆沢郡金ヶ崎町に移住しました。「岩手山の見える所に住みたい」という夫の願望と「ポーランドの景観に

似た所に住みたい」というわたしの願望がぎりぎりのところで合致したのが金ヶ崎町の西の端、鳥の海地区でした。もつとも、岩手山が見えるのは秋か冬の空気の澄んだ日、近くの坂の上まで行かなければなりません。ポーランドには丘陵地に広がる牧草畑はあっても、水田の風景はありません。ですから鳥の海は、まんずまんと、妥協の地でした。

三年後の二〇〇二年十月三〇日、わたしは第十八回千三忌で『ポーランドのユダヤ人』の話をする機会をいただきました。今は亡き石川純子さんの仲立ちです。その時に麗ら舎読書会の重要な活動テーマのひとつが女の問題だと知り、フェミニズムとかウーマンリブとか女性解放に関心のあったわたしは喜んで会員になりました。

正直言って、最初の頃はなぜ戦争にこだわるのか、それが理解できませんでした。麗子さんの活動原点が戦争と女のペアであることをのみ込めるようになってのはその後のことです。麗子さんのお姉さんは「国の非常時に死んでゆくのは申し訳ない」、「戦地の夫に申し訳ない」と遺書を残し、自ら命を絶つ道を選びま

した。その行為は家に対する、国に対する、戦争に対する女としての抵抗だった、とわたしには思えます。女として率直に真意を伝えることのできない世界への抵抗です。

二〇〇八年八月九日、麗子さんは旧日本軍の元従軍慰安婦だった陳桃（チェン・タオ）さんの話を聞く会に参加しています。司会者が参加者に最後の最後の質問をと言った時、麗子さんはすくっと立ち上がり、自作の詩『火焰の娘 氷柱の娘』を読み上げました。

火焰の娘 氷柱の娘

氷柱の海にかこまれた国に生まれ
父たちよ わたしはあなたの娘だ
兄たちよ わたしはあなたの妹だ

わが娘 わが妹を守ると言つて、
銃を持ち

海の方この国々に征った

父たちよ 兄たちよ

あなたたちは
異国の娘たち 異国の妹たちに
何をしたのだ

父たちの年齢をはるかに超えて
兄たちの年齢の二倍は生きて

かの地の火焰の娘
氷柱の娘を抱けば

父たちよ 兄たちよ
あなたたちは
実の娘 実の妹に
銃を向けている

この詩を読むたびにわたしは父や兄の銃口が自分の胸にも向けられているような痛みを覚えます。

二〇一六年発行の『別冊おなご』三十四号に麗子さ

んは『よみがえったセキさん』という一文を寄せ、劇団Zの会が上演した『千三の墓』について記しています。セキさんの台詞は実に胸に迫ります。

「おまえの誇り？おまえの誇りなどどうでもいい。この聖戦を汚す非国民めが」

(役場兵事係り吉村の台詞)

「聖戦？殺し合いが聖戦っていうのが、それにおめえが言う汚らしく聞こえるぞ」

(セキさんの台詞)

さらにセキさんのもとに千三戦死の公報が届いた時のセキさんの台詞です。

「でも、千三がいつどこでどつたに死んだのか何も書いてねのス。ニューギニアで名誉の戦死したってそつたな知らせで、ああそうですかって、おら納得できねえのです。白木の箱さは石ころ一つ。それが千三だつてのすか。おら騙されたくねえんです。」

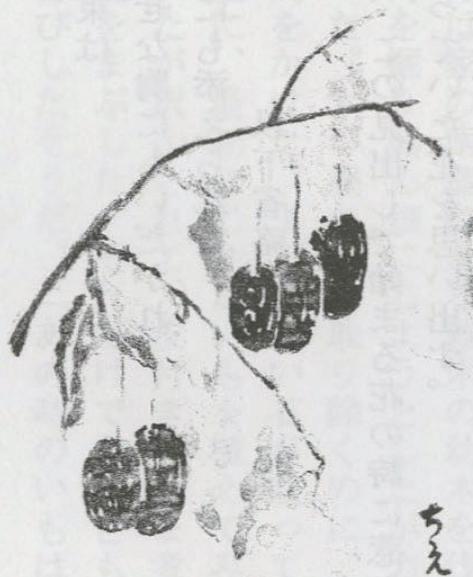
麗子さんは同じ一文の中で、千三直筆の葉書が戦死公報の日付よりも後の日付で高橋峯次郎さん(戦地の教え子たちに小さな新聞を送り続け、教え子たちからは七千通もの軍事郵便を受け取った人)の所に届いていたというショッキングな出来事を明かしています。これが事実ならば、千三戦死の公報が届いた時のセキさんの言葉「おら騙されたくねえ」は戦争の本質をさらに見事につく言葉になります。女のモニュメントとしてセキさんの墓が持つ意味もまた一層重要になります。

麗子さんと、そして麗ら舎読書会と出会っていなければ、わたしはポーランド文学の中でも戦争と女性をテーマとした作品をより積極的に翻訳しようと思う気持ちにはならなかったでしょう。もう一つ麗子さんに関して感心させられるのは、その指導力です。地域の女性たち一人一人の持つ力を掘り起し、高める能力です。この世に大学教授と呼ばれる人は数多くいますが、麗子さんこそ優れた地域の大学教授だとわたしは密かに思っています。

凛とした女性、小原麗子さん。わたしは麗子さんに一度注意されたことがあります。それは地域の女性たちが作った詩を読書会会員たちが一人ずつ朗読していた時でした。すでに金ヶ崎在住十八年になるわたしは、いまだに地域の言葉を正しいイントネーションで発音できません。わたしにとつて地域の方言はポランド語以上に難解なのです。わたしがたどどしく詩の朗読を始めると「その言い方は変ですよ」と言う麗子さんの凛とした厳しい声が飛んできました。その麗子さんの言葉は、「もっと地域に溶け込みなさい」と言うメッセージだったと理解しています。

麗子さん、そして麗子さんと共に麗ら舎読書会を引っ張ってこられた先輩会員の皆さん、農民文化賞の受賞、おめでとございます。

赤の代



ちえ

赤き田舎する
小原の夕やけ日記

花の力

高橋 つか子

心晴れやかな日に
花を用意する

花束は

幸せな胸にもいだから
柩にも添えられる

以下省略

私は、この見出しで始まる花の詩に惹かれ、義母が語っていた花を思い出す。

庭に薄紫色の小さい花、姫シヤガが咲くと「このはなつこがら元気もらったなあ……」と、言つて引き揚げてきた当時の話を聞かせてくれた。

義母は、二十代の半ばに夫と満州へ、開拓団として渡つた。団員には折居次郎さん、ミツさんご夫婦、小原昭さん（亡くなる前は読書会の会員）も一緒だった。

家畜を飼育し開墾に精を出していた時、夫がマラリア病に罹り、三十九歳で帰らぬ人になった。

丸い小さな実の形をしたむらさきしきぶの花が、こぼれるように咲いている表紙の詩集。小原麗子さんの『花のほうへ』、をいただいた。開いてみると、一ページ目に次のような詩があった。

花の方へ

心晴れぬ日に

花を用意し

残された幼い四人の子（七歳の長女を頭に一歳まで）を抱え、「生きる」の一字を心に働いた。

間もなく終戦を迎え、日本に帰る難民生活が始まった。団体の列から離れるとあしたの命がない。必死で歩きやつと船に乗れる。ところが、検査のために二週間以上も待った

。病氣を持っている人は船に乗ることができない。その時、上の娘がお腹なかをこわして元気がなかった。検査員からは厳しい言葉を浴び、死を覚悟して乗船したという。折居次郎さんご夫婦から、子どもたちは大変お世話になったと、手を合わせる。

昭和二十一年九月、夢に見た日本の土を踏むことができた。

その後、本家（夫の生家）に身を寄せた。三世帯が一緒に住んでいて、大家族だった。

翌年、親戚から納屋を改築してもらい、家族五人が暮らせる茅葺き屋根の家ができた。ゆっくり

足を伸ばせるわが屋、周りの人たちから支えてもらい、感謝でいっぱいだった。

こんもりとした杉林の中にあるわが屋、でこぼこした玄関前の道端の花が目にとまった。日の当たらない雑草の中にまじって薄紫色の小さい花が、明かりを点したように咲いている。姫シャガの花だった。いとおしくて、この花を増やしたいと思ひ大事に植えなおしたという。一輪の小さい花が、ごくろうさま、というように、義母の胸を温かく包んだにちがいない。

二年くらい経ち、心身ともに少し落ち着いたころ、義母は家の南側にある雑木の幼木を伐採した。一角を掘り興し畑にしようとしたが力のいる作業だった。木の根と石を取り除くのに、二・三年の時間をかけた。まだ小さい石が残ってザラザラした土に、最初にじゃがいもを植えてみた。小ぶりだったが沢山とれて、皮付きのまま煮て一つまみの塩をまぶした。それだけでも子どもたちは、大喜びしたそうだ。「あの時のいもはうめが

ったなあ」、義母の満面の笑みが心に残っている。

いま、私は義母が耕してくれた畑を小さな家庭菜園にして、夏野菜を植えている。育ってくれるトマト、ピーマン、ナスに義母の汗が光っている。そんな気がしてならない。

一緒に汗と涙を流して、ときには笑いも入れて暮らしてきた折居さんご夫婦、昭さん、義母は遠い国へ旅立たれてしまった。が、また一緒に思い出話をしているだろうか。そちらでは、どんな花が咲いていますか、とたずねてみたい。

「人は花を育てて、その花から心が育てられる」とよく聞く言葉です。みんなの心を平等に和ませてくれる。花って不思議な力がありますね。

十月二十一日、千三忌（三十五回）の帰り私は高橋哲子さんの車に、小原麗子さんと一緒に乗せてもらい、麗ら舎の前で降りた。

麗子さんの庭に、詩集の表紙を飾っていた、むらさきしきぶの花が咲いている。うれしくなって話しかけたい気持ちになった。深みのある紫色にあい、足取りもかるくなった。



麗ら舎へのお誘い

そして、麗子さんとの出会い

佐藤 弘子

平成二年頃だったと思う。石川純子さん著『まつを媪、百歳を生きる力』の本との出会いあり、講演会では、著者とお会い出来、この日をきっかけに、あらゆる場所でご一緒する日が多くなってきました。

ある時のことです、まつを媪の夫である清一さんの兄弟、姉妹の話しにふれた時、三男の所でなぜか、真剣に聞き入っていた私でした。

特に、その三男の方の奥さんの事でした。胆江出身で生活が苦しかったので、三男と北海道に渡り大部苦労したというくだりの部分が、何故か胸に引っかかる

思いで家に帰り、「今日、石川純子さんが、こんな話しをしてくれたんだよ」と家族に話したら、すかさず義父が「その奥さんというのは伯母で、清一さんの弟と一緒にになった人」と言うのには、ただただびっくりでした。

いろいろ話しを聞いてから、純子さんに、「実は、私の嫁ぎ先の祖父の実妹が、清一さんの弟清三さんと結婚し、北海道に渡った方です」と伝えると、すぐ純子さんからお返事が届きました。

「お便りとてもうれしく読ませていただきました。清三様の奥様の御実家でしたとは！媪が言っていたことがありましたよ。」

清三さんのお嫁さんが、エジコに子供をいつまでもいれておくことではないでしょ・・・と言って抱き上げてくれてね・・・と。

その言葉は、本当に感謝の気持ちいっぱいという感じでした。

今日いろいろお話たのまれて、北海道岩見沢市から帰ってきたばかりです」 *ハガキ文 原文のママ

このお便りがきっかけで、純子さんにちょっと近づ

いた気持でいると、再びお便りがあり、二〇〇四年、まつをおばの村の住人になった事と、麗ら舎女正月の宴へのおさそいでした。

麗ら舎が何だか良く解らず、純子さんを力に初参加、そこで初めて小原麗子さんを紹介していただきました。

麗子さんのお話しを聞いてるだけで、とても心が落ち着いてきました。次回も参加してみたい気持ちになつて帰路につきました。

その日は、ちよつと興奮してなかなか寝つかれなかった私でした。

その後は「千三忌」や各月の例会への参加と麗ら舎へ足を運ぶ日々が多くなってきました。

数ヶ月経つたある日、麗子さんから初めて封書が届きました。ドキドキしながら、封を切りました。

「千三忌、いかがでしたか。

にぎやかな、にぎやかな駄句集お届けします。通信もどうぞ読んでみてくださいね。

またどうぞ、いらしてくださいね。

04、11、15 麗（原文のママ）

弘子様

うれしかった、何度も何度も読み返した。

麗ら舎へ集う一人一人の顔が浮かび、次回待ちきれない気持にかきたてられている私でした。

私は再び生き返った気持になりました。

前年大病し、五年生存を告げられ、落ち込んでいた時だけに、純子さんとの縁と、麗子さんとの出会いあり、麗ら舎の方々との出会いがあり、生きる力をもらったと思えました。

その後、本当に元気になり、とても大病したとは思えないくらい、たくましくなりました。

嫁ぎ先の事、実家の事、両家の父母の事、祖父、祖母の事等、今では残しておきたい話しがどんどんあふれ出てきます。

あれも、これも、と思いが先にたち、記録が追いつかないでいますが、先輩に追いつけ！追いつけ！と言いつけ、時間が多少かかっても記録だけはしていきたいと思っています。

麗子さん、そして麗ら舎の皆さん、これからもお力をたくさんお借りしたいと思っていますので、お貸し下さいね。

麗ら舎読書会 と 私

小平 玲子

麗ら舎読書会の存在は、私にとっては自分を再認識する場なのだ、この原稿を書きながら思うようになりました。元美さんに誘われておずおずと参加し始めた頃は、何となく場違いなところにいるような、おさまりどころのない気分を抱えていたことを思い出しました。正式な千三忌に参加したのも、つい先日の十月二十一日が初めてでした。それ以前に一度だけ、テレビ取材のために都合がつく何人かが墓前に集いましたが、そのとき初めて千三さんのお墓にお参りをしたのでした。

私が麗ら舎読書会に参加するようになったのは夫が亡くなってからのことです。千三忌が行われる十月から年末にかけては、りんごの収穫と出荷で忙しくて余裕がないことから千三忌はずっと不参加でした。でも、それは表向きの理由だったかもしれません。セキさんの思いを自分の中で十分に消化できず、曖昧な気持ちのままに参加することに負い目のようなものを持っていたように思います。

とにかく私は、いつも歯切れが悪く、入り口あたりでぐずぐずと時間をかけながら、やっと中に入っていくという生き方をしてきたのだと、あらためて思います。

子どもの頃は男の子に生まれたかっと思っていました。思春期は女子のグループが苦手で、高校に入ったときは独りでいることを選択しました。社会人になってからは男社会の会社の中で、いつも女であることを意識していました。組合活動の中から派生した読書会のような勉強会が月一度のペースで開かれることになったあるとき、参加者の大半が男性という会の中で私は「女を考えると」というテーマで問題提起をし

たことがありました。どんな会になったか大方は忘れてしまいましたが（もう四十年近くも前のことです）、周りの女性たちからは激励され、男性陣は戸惑いながらも好意的に（物分り良く？）参加してくれたように記憶しています。

また、在職中に考えていたことは、独り身でいるなら会社は辞めよう、もし子どもを持ったなら定年まで会社に居続けようということでした。

そんなことを考えつつも、二十代の頃には宮澤賢治に影響を受けて「岩手で農業をしたい」という夢を持っていました。それが実現して三十三歳で北海道から水沢のりんご農家に越して来たときは「嫁に来た」とか「結婚した」という言葉を使いたくなくて、義父母を含めた四人の共同生活であると自分の中で合理化していました。だから一般的に言われる嫁姑問題の記憶はありません。世間的には北海道から嫁に来ただけの話ですが、名字が変わることに抵抗を覚え、友だちとは旧姓のまま付き合いたいと思っていました。結局は入籍し、子どもも生まれ、いまに至っています。。。

夫が亡くなった後、九歳の双子の女の子と高齢の義父母との暮らしになったとき、真っ先に思ったことは一家の暮らしを支える私が女だということ。他から軽んじられてはならない、ということでした。草刈りや畑の仕事、地域の当番など、他の「家」と同様にこなしてきたつもりです。人目を気にしているような自分を疑いながらも、弱みを見せたり弱音を吐くことは極力しないと決めていました。こんな在り方は女性の足を引っ張ることになるのだろうかと思いましたが、そうやってきてしまいました。

そんな中途半端で歯切れの悪い生き方を自覚している私は、凜とした生き方をしている女性に出会うと憧れと同時に気おくれしてしまうのです。もちろん自分を否定しているわけではなく、そういう生き方しかできないということなのです。

女であることにこだわっていたのは若いときの気の迷いかと思い、そんな自分を忘れかけていた頃、麗ら舎読書会に参加する機会を得、小原麗子さんという女性の生き方を目撃することになりました。それによ

って、女であることをいつも意識してきた（させられてきた？）私は、結局、この日本という国の中で自意識が芽生えた頃から死ぬ間際まで、女に生まれた自分の生き方を反芻し、迷い続けることになるのだろうと予感しています。そして、そんな機会を持つことができる「女に生まれた」ことは、ある意味で願ってもない境遇なのではないかと思っています。二十代半ば頃からは「女で良かったかも」と思うようになっていましたので、双子の子どもたちも女の子で良かった、「女であること」は精神的に自由に生きられることでもあるのだ、と思っています。

ここまで書いて読み直したら、いかにも独りよがりな説明不足な文章だと気づきました。どこまで説明できるか定かではありませんが少しだけ捕捉したいと思います。

二十歳を過ぎる頃まで女である自分があまり好きではありませんでした。男も女もなぜ「女だから」を強調するのかと、そんな世間に嫌悪感を持ち、「人間として」と考えれば良いのではないかと思っていました。女性解放運動なども私には遠い出来事として身近には感じられませんでした。声高に語られる女性たちの

声も、私にはさらに届きませんでした。

でも、組合活動の中で同じ職場で働く女性たちの声に触れていくうちに、「人間として」と捉えればいいのではないかという自分の考えに疑問を持つようになりました。そして「人間として」と括ってしまうとスッポリと抜け落ちてしまう何か大きなものがあると思うようになりました。

そう思うと周りの見え方が違ってきました。あるとき「あー、私は男性が書いた本ばかり読んでいた」とハツとしました、女性が書いた本を読みたいと書店巡りをしていたとき目に飛び込んできたのは『涙をたらした神』（吉野せい著）でした。

そんな経験を重ねていくうちに自分の浅はかさがイヤになったと同時に、私の生きづらさの根が見えたように思いました。それが二十三歳頃のことでした。それからは女性たちの闘い（？）を取り上げた本などに惹かれ読み始めました。

そんな独身時代があり、水沢に来てりんご作りと子育てに熱中していた時期を経て、麗ら舎読書会に出会いました。そこでまた新たな「女（おなご）」たちに再会し現在に至っています。

麗子さんへのラブレター

相川元美

“麗子さんへのラブレター”を皆で書こう”という案が出たのは、田村和子さん著『強制収容所のバイオリニスト』の読書会があった9月のことでした。

読書会終了後、お祝いのケーキと珈琲をいただきながら、次回の『おなご』の原稿についてどうするかという話をしていました。私はいつものように、読むだけの立場で聞いていました。

麗さんが、「一人でも書くという人がいる限り、私は出しますよ」と、きっぱりと言いました。

一昨年、二か月間入院し、後遺症はないものの、まだ元のような完全回復ではない麗さんの“一人でも二人でも書く人がいる限り冊子『おなご』を出し続ける”という強い意志を聞きました。

頂いた賞金の遣い道についても話が出て、それならば皆で麗さんに宛てた手紙を書き、『麗子さんへのラブレター』（仮称）という形で、冊子を作ったら良いのではないかと話が進みました。手紙ならば書けるかもしれない、と賛成した私ですが、いざ書くとな

2017年7月、麗ら舎読書会は農民文化賞を受賞しました。

石川純子さんも以前に受賞したことのある賞ということでした。

本来は、麗子さん個人に授与される賞だったそうですが、麗さんが受け取らないと固辞したために、麗ら舎という団体として頂く形に落ち着いたということです。

ると逃げたい気持ちです。

でも、麗子さんを祝う記念として皆で書くことと決めたのですから、まずは参加するしかありません。

私が小原麗子さんを知った日に遡ります。

初めてお会いしたのは、2003年6月でした。その数日前に、金ヶ崎で活動している女性グループのことが新聞で紹介され、その集まりに水沢から出掛ける行きました。

その時、小原麗子さんは『二階棲み』『戸籍』という自作の二編を、朗読し紹介してくれました。

朗読後、「私にとって詩を書くことはフェミニズムです」と、凜とした声で言ったので、なんて恰好い！と感激しました。詩もとても印象に残りましたが、何よりも「フェミニズム」という言葉を、年上の女性から聞いたことは新鮮な驚きでした。帰り際、「あとで手紙を書きます」と自分の名前を告げました。

その手紙にどんなことを書いたのか、はつきり思い

出せませんが、会った日の感想や、ひとり親として働 きながら子供と生活していることなど、自己紹介が主 だったと思います。

その時、私は四七歳でした。

東京の学校を卒業した後、ちゃんと働くこともなく 結婚し、新潟から岩手に移り住んで、長く専業主婦で 子育てをしていました。その後、夫と別居・離婚し、 初めてフルタイムの仕事に就き、末娘がやっと高校を 卒業するという時期で、自分の生き方を模索していた のだと思います。女性問題に関することに、アンテナ を伸ばしていました。女は、特に離婚した女は見下げ られると痛感していました。手紙を送ると間もなく、麗子さんから大きな封筒が 届き、「おなご通信」など読書会のレポートが入って いました。農業や戦争に関しての聞き書きなどで、少し 意外に思いましたが、優しいカットが添えてあって、 とても嬉しいお手紙でした。

麗ら舎に初めてお邪魔したのは、その半年後位のこ

とだったと思います。紅白の小さな餅を枝に飾りつけていました。おなご正月だったのでしょう。簡単に紹介された皆さんは、いろいろ活躍されている方ばかりで、「場違いのところに来てしまった・・・」という気分になりました。

それでも読書会は、色々な話が飛び交う刺激的な場所で、集まってくる素敵な女性たちに会いたくて、仕事の都合をつけては折々に通いました。

思えば、先の金ヶ崎の女性グループの中心に田村和子さんがいて、その時に薦められた本が石川純子さんの『まつお媪百歳を生きる力』でした。その後、一読者として石川純子さんとお近づきになりました。それからまた、手作り絵本展の常連受賞者として、名前だけは良く知っていた児玉智江さんも読書会のメンバーの一人でした。いつも淡々と迎えてくださる麗子さんのお陰で、私は自由に参加させてもらってききました。初てお会いしたあの日から、もう14年です。

いつだったか「私は戦死した人の生まれ変わりなの

ではないかと感じるくらい、戦争というものに恐怖感を持つている」ということを話した時に、「その感受性は大事。そのことについて書いてみて」と言われたのでした。麗子さんのその言葉を忘れてはいません。ずっと未提出の宿題があると思っています。

今回、麗子さんとの出会いや、読書会に参加した日のことなど、きちんと記して置けば、もつと様々なことが具体的に思い出せたのにと悔やんでいます。まさに麗子さんの言うように、書くことは、『自分の生を編む』作業なのだと感じます。わかっているのに実行できないという意志薄弱な私を、長くお仲間の中に入れていただき感謝しています。

2011年の震災後、私は一関にある夫の家に移りました。農業を主にすることに決めたのです。ところが放射能の影響で山菜は出荷できず、草地は除染が必要になりました。まず玉ねぎの苗を二万本植えました。私にとっては初の肉体労働。自然の風がどんなに気持ちが良いか体感しました。が、この後、玉ねぎは雹の

直撃を受け、ハウスは台風に潰されました。本当に農業は大変だと思いました。

この初めての農業生活について、久々に手紙を書きました。

麗子さんからの返信には、「一関での百姓仕事、とてもいいことだと思います。それにしても二万本の玉ねぎとは。本格的な百姓です。(中略)くれぐれも無理なさいませんように」と書いてありました。

あの頃、コトバが、次々と溢れ出てきて、「詩は経験から生まれる」という麗子さんの言葉を思い出したものでした。翌年から、また私は外へ勤めに出ることになりましたが、農業の何も知らなかった私にとって、大きな気づきの年となりました。

厳しい農業にも携わり、麗子さんは詩や文章を書き、地域の女性たちと繋がり、「田も作り、詩も作る」女性達を育て、読書会を長く主宰してきたのですから、本当に凄いとしか言えません。

麗子さんは、即座にズバリと本質をつきます。

いつも書いて、自分の考えを整理し把握しているからですね。

*

*

小原昭さんの声が聞こえます。

「もっと早くに麗子さんに出会いたかった・・・」
石川純子さんの言葉も思い出します。

「だれの気持ちもわかる、宇宙のように心の広い人」

*

*

我が家の玄関を開けると、すぐ目の前に

「宇宙に包まれているんだね わたしたち」

という白い文字が大きく出た赤い風呂敷があります。その下に細字で『日本国憲法』前文が記されています。

この赤い風呂敷を麗子さんにいただいたのは、何時だったでしょう。

「日本国憲法を方言で読む」読書会もありました。いつも、きりつとした標準語で話す麗子さんですが、花巻の方言はおっとり響きます。

麗子さんとの出会い

宮崎 順子

小原麗子さん主宰の麗ら舎にご縁を頂いたのは、奥州市水沢区の佐藤秀昭さんからお誘い頂いたことがきっかけでした。「女子（おなご）の読書会があるが、今度の旧正月行って見ないか」と誘われて行ったのが、麗ら舎おなご正月でした。教養の高い人達が真面目に遊ぶ姿は新鮮で私の今までにない場面でした。「ただのお笑いでないぞ」「面喰いながらも、頭を働かせないと楽しく遊べない不思議な楽しさに熔け込んでいました。着物を裏返して神主の姿になり、現代社会風刺、珍しい楽器で歌い踊り、その後鉛筆と紙が渡されて、俳句、短歌を作る駄句の会になる。「え？ 今此处で」20人ほど沈黙考、私も夢中で駄句を書く、テストのように集めると思いきや、自作を読むと居並ぶ皆に2回ずつ唱和される。いきなり発表は恥ずかしく緊張した。私は満州国で銃殺された父のことを詠んだと思

う。

私は、人生の紆余曲折があり、夫が亡くなり、途中長い間休みましたが、お茶の会の仲間でお世話になっている佐藤恵美さんに「いつまでも泣いてないで、麗ら舎読書会に出ませんか」と促されました。

夫の看病に続き葬式を出して、抜け殻のまま整復院で患者さんの診療をしていました。

私は出来る限り参加しました。そして惹かれたのは、麗ら舎のすつきりして垢抜けた、清潔感のある佇まいでした。

手作りのお菓子やご馳走と銘酒、麗子さん特製の小豆粥を頂き、大雪の帰り路、私の心は今までにない温もりに癒されていました。

今迄、患者さんの病気にばかり向き合って来ましたが、「そうだ、私の暮らしに欠けていたものは本の偏食と遊心ではないかと気が付きました。そして、麗ら舎の門をくぐりました。麗ら舎の黎明期と長い歴史があるにも関わらず、おろおろしている私を暖かく包み込んで頂いて、エネルギーを与えられるきっかけをありがとうございます。

絵本との出会い

阿部容子

両親を見送り、子供達も離れて刺激のない平穏な日々、これからの生き方を模索していたところ、小原麗子さんから『麗ら舎』の活動を紹介され訪れました。考えをしっかりと持ち、堂々と意見を語れるすばらしい仲間の集いに出会ったのです。

その反面、唯唯聴くだけの情けない自分を感じながらも例会の葉書が届けられるたび、事務局の石川純子

さん、佐藤恵美さん、兒玉智江さんのステキな挿絵とコメントに惹かれて出向きます。

会主の小原さんと話をしていいた中で『語らなくても、書かなくていい、書かなくても作品を『声を出して読む』ということもあるのではないかとアドバイスをいただき一冊の本を紹介されました。

『石ころに語る母たち（高橋セキの場合）』

これは『麗ら舎』の諸先輩の方々が十年以上もかけて検討し作成された手作りの絵本です。出来上がって間もないこの絵本には「魂」が込められ「惹かれる」ものがありました。

胸をつまらせ涙しながら数えきれないほど時間をかけて読んでいるうちに感情を押さえることが出来た時、この絵本を朗読して語り伝えたい思いが湧いたのです。

『麗ら舎』に姿を見せなくなった純子さんは闘病中で心配です。彼女の為に何か出来ないものかと思案し、練習中の朗読テープを届けました。早速電話をいただ

いた時、病人と思えない程の元気な明るくいつもの声「私ねこのテープを聴きコープンして二度も聴いたのよ、うれしかったありがとう、おかげで寝不足したからこれから休息します」

テープは四十五分掛かる内容です。よろこんでくれてうれしかった。

ところが翌日電話があり「あのテープ電気屋さんへ頼んで『ダビング』していろんな人に送ることにしたからね」という事で驚かされました。練習途中のテープだったのに「何故？」今になって彼女の心中を察することができました。

未熟な一本のテープから新しいつながりが生まれます。絵本の『絵』を描かれた愛知県豊田市在住の柴田貞雄、和子さんご夫妻との出会いです。純子さんから送られたテープを聴いてから、どうしても直ぐに朗読を耳にしたい、身内にも聞かせたいからは非豊田市に来て朗読会をしてほしいとの熱意のある丁寧なお便りをいただきました。顔も知らない、人物も全くわか

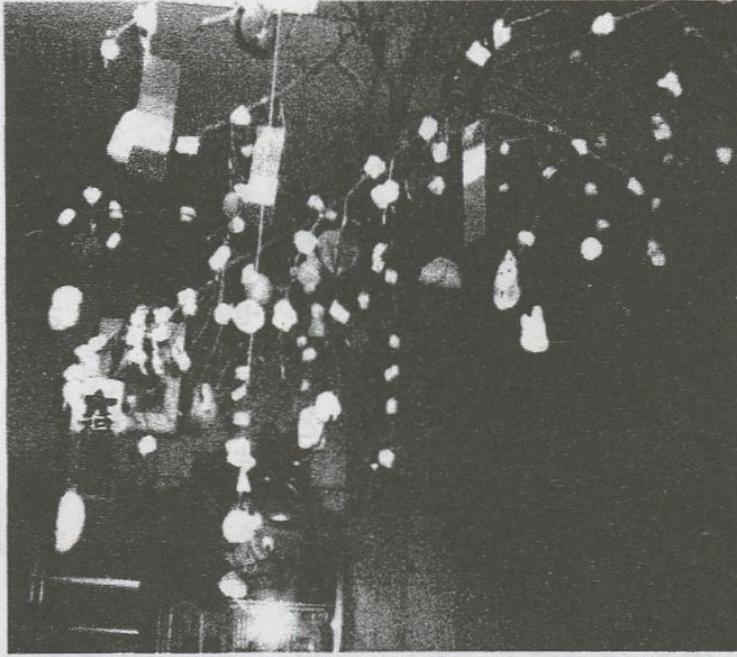
らない遠方とのやりとりが半年ほど続き、平成二十二年六月三十日北上駅から出発します。目印は奥様とお揃いの手づくりの帽子です。名古屋駅には帽子を被った奥様と白い扇子をかざしたご主人が満面の笑みで迎え、一目でわかりました。

高速バスで豊田市へ直行、さすがここは『世界のトヨタ自動車』だけあって街一色と思う程全てでした。ご主人は戦中戦後のトヨタ自動車に従事し会社を支え兵役はなく研究者として内地にての勤務を命ぜられるなど戦中に対する複雑な思いが胸につまみっていると語っています。

二泊三日の旅を終え北上駅に降りた時、昔話の『浦島太郎』を思い出しました。すばらしい人たちに出会えたこと、生れてはじめての数多くの経験を思い出すだけで熱くなります。朗読することに生きがいを感じ『夢』を実現させたく何事にも挑戦していききたいものです。

わたしと麗ら舎

高橋 哲子



麗ら舎
おなご正月

長沼の農道の奥へと車を走らせ離れた先の真新しいモダンな家に着きました。夫に連れられ玄関先で赤卵を5つ6つ手渡し、彼女とあいさつをしました。

あ！北上市農協で見かけていました。日配の牛乳を届けに事務所に入りマゴマゴしていたらやさしい仕事で対応してくれた美人の女が小原麗子さんで、今日の前にもいます。手渡した卵は幼稚園の息子とエサをやり飼っている鶏の産みたての赤卵だったのです。家には手作りものはそれしかなかったからです。夫は以前から文芸活動や、和賀東中学校内にある古墳存続運動などで知っており、何よりも夫のただ一回の絵の個展で、作品を買い求めていただいております。

入会して舎を訪れた時に、すぐ見える居間の壁に掲げてある夫の作品が目飛び込んできました。実は私が現物を見るのは初めてなのです。売れていない数々の絵は新婚当時から古びた家の座敷の間の方に、立て掛けていてほこりをかぶっております。

一九八六年の頃です。夕方時分、和賀町農協のスト

アでスカーフをかぶった小原麗子さんに「お久しぶりですネ」とあいさつをしたのです。「もう私も七〇歳になるのヨ」と言った笑顔もまた、きれいだなーと思つて見ました。スツと別れ、私は急いで店内をめぐり買い物を済ませて帰りました。

子育てと兼業農家にとつて、家計は厳しく私も近くの会社にパート労働として通いました。

後藤野部落にも三人の麗ら舎会員が居て彼女らの出版本や、舎の活動内容やらも折にふれて知っていた様にも思いますが、どうにも、私には文才もありません。生活に入る込む余裕も無いまま時間は立ち、私は六〇歳近くになり、小原麗子さんの詩集やらを目にして読んでいる内に好奇心というか、人と交わり学ぶことへの焦りが欲求に似た感情の気持ちで、とうとう折居次郎さんに話して、入会の旨を伝達してもらいました。早速、年間活動のプリントを頂きましたが、やはりまだ時間は取れず何事もなく過ごしてしまいました。

そして、二〇一一年を暮らし次の年、パート勤務も、六〇歳の定年まで働きました。もうフリーですし後は老後です。家の事では日々いろいろ勃発しましたが、私は自分の思いを突き通して、やっと、小原麗子さんの扉をノックしてみました。麗子さんに電話してみました。「いいですよ……」おそろおそろ家を訪ね、舎の話の内容を聞きました。「来月七月陸前高田に村上さんの墓参に行くの……」「行ってみませんか……」「はい」東日本大震災の犠牲になり生命を亡くした会員の村上末子さんが居た事。同じ人間で岩手県に居乍ら、テレビのニュース、新聞でしか惨劇を知るだけで何の手助けもしないで、ただ自分の日々の生活だけ過ごしている者の責務のようなものがあつたのですから……。今からでもこの目で現地を見て見る。そして考えなければならぬ事があると思つたのです。

陸前高田行きのバスの車中には、初めての顔ぶれの会員の友がおりました。

軽やかな声の事務局の佐藤恵美さん、いつの日か畑

の花々を根こそぎ掘り、庭に植えて見なさいと言って下さいました。やっと、どの花も色鮮やかに咲きました。嬉しい事です。

会計を任されている佐藤弘子さんには手作りのなばん味噌を頂きました。精一杯の活動にまね出来ない凄いです。

兒玉智江さんは、黒南校の先輩だったことが後でわかった。おなご正月にはお餅を突いてきます。何でもこなす女なのでビックリです。お話がなんとも明るくおもしろいです。

小平玲子さん、リング農家の素敵な方です。おいしいリング作りに懸命ですが、きつと娘さん達が彼女を活かして輝かせてくれると思います。

ミス柳原恵さん、一番若い色白のしっかりした方です。女性史を研究しています。ファイト容姿は、今は一児のお母さんになり、私には嬉しくも頼もしい女に見てとれます。

八重樫励子さんは前から知っていた方のように親

しく話し込んでしまいます。相川元美さん、植田朱美さん、宮崎順子さん、村上佳子さん、藤原訟姫恵さんも凄いです。

小原道子さん、いつも手作りのもの、農作業に忙しくても楽しく、目標をもって向かわれている精神に感動しています。コスモス咲いていますヨ。

田村和子さん、翻訳した出版本は、仕事とはいえ本当に脱帽です。年齢のわりに穏やかで優しい気持ちの方なのでビックリです。

千葉ちたえさん、レポートの講習は、頭が混乱するほど重い課題が次々と出るので、勉強して根気よく理解しようと思います。

阿部容子さん、長身に手作りの洋服を着ている姿。朗読のボランティア活動に精を尽くして見ごとです。いつも落ち着いたお話し方に感心しています。

渡邊満子さん、渡邊真吾さんにお会いできたのは何よりと感じます。満子さんの戦時中の学生の頃の文面を読みますと、彼女の信念の強さは今見ている様です。

とにかく明るくおしゃれな老婦人にあこがれと近親感を持っていて話していますね。

毎年の千三忌は、母セキさんが建てた墓を皆で拝み、舎の二階で会食しその後、駄句づくりが始まります。ペンを取り集中しても頭の中は、まんねりのそのままの感想のみで知恵はしぼり得ません。書いて作り終えれば、みなさんで唱和しての声、声、ゆかいというか楽しいかぎり、私はいつも馴れ馴れしくなる状態。

数年前には知らなかったせいか。友人に会えて、皆で学び、考え話し合う仲間が居ることは、何と素敵なことか。気ぜわしい所もありますが、楽しい時間作りをしてくれる人間が近くにいてくれる事への喜びは久しく味わっていなかったと思う。あの会社での飲み会や、小旅行とは別ものなのですネ。地区の中でのお母さん達とのつき合いとは全く別ものでした。

自分をフルに活動させ、思考と友の声を聴くことへの学びなのです。今までのわたしの生活には欠けていた部分もありました。夫の感化で本を読むことは努

力しています。そうしていくと、他の者の考えや個性をも解ろうとします。生活環境は各々であっても教わる知恵、健康の状態、命の尊さも今更にして解ろうとします。舎に入って強く感じましたね。これからも、おそわることへの努力と知識など、まだまだ自分の子らに語り伝えなければならぬとも思います。

友、仲間らへの愛情と、麗子さんへの信ずる心は変わることなく、出来る限りのことを成すことにします。ありがたいことです。



仲間とのつながり

村上佳子



・平成20年3月20日・写

向かって右
から

- ・村上末子
- ・佳子の娘
- ・村上佳子

麗ら舎読書会の小原麗子さん、兒玉智江さん、渡邊満子さんと初めて出会った。2011年7月10日、大津波で犠牲になった村上真一さん、末子さんの葬式が、陸前高田市の光照寺であった時に参列していたのであった。

2011年3月1日朝、高田町大町のいち日(び)で偶然に末子さんに会った。その時、末子さんが3月2日に大腸ポリープ手術で入院予定があると言う事を聞いた。その日は真一さんの好きな海産物とおかずを買っていた。

その後、声をかけられて、お昼と一緒に食べたいと言われた。村上末子さんと真一さん、佐竹強さんと私の4人でお話をしながら食べたうどんがとてもおいしかった。残念だが、これが最後の食事になってしまった。

村上末子さんは3月2日、大船渡病院へ入院した。その日の夕方私は病院にお見舞いに行った。3月3日午後5時ごろ大腸ポリープの手術をした。入院中、私は毎日病院へ行った。お話をして「大丈夫」と声をかけていましたが、家にいる夫を心配し「早く退院したい」と言うので、検査結果が出るまで居たらとすすめた。だけど彼女は3月7日退院した。

3月11日大津波で村上末子さん、真一さんは行方不明

になった。3月22日住田町生涯スポーツセンターで村上真一さんのご遺体が見つかった。(今も末子さんは行方不明)3月25日軽米町で火葬することになった。

横浜に住む息子さん、お嫁さんは、毎週高田へ来て、市内の各安置所に行き捜したが末子さんの遺体は見つからなかった。心に区切りをつけるために、7月10日に村上末子さんと真一さんのご葬儀を行った。

その時、参列者の女性達に「どこから来たんですか、もしかして末子さんの親しい友達ですか、よろしかったら、住所と名前と電話番号を教えてください」と聞いた。これが、麗ら舎読書会のみなさまとの不思議な出会いだった。

2012年7月読書会の仲間が村上末子さんの被災した自宅跡地を訪れ、光照寺の墓前では、詩人渡邊真吾さんの詩が朗読された。そして、末子さんのために詩に曲をつけテープから歌がながされた。空にいる末子さんへ届くと思った。

翌年の2013年7月17日(水)、読書会の仲間20人が村上末子さんの墓で新しい詩を朗読し線香をあげた。その後、高田市気仙町の佐藤直志さん(津波で住宅が被災し、消防士の息子さんが津波で犠牲になった)の自分で再建し

た自宅で各自持参のお昼を食べ、被災者との交流を深めた。



・2013年(平成25年)佐藤直志さん宅前にて

子どもが小学生のころ、私の夫が病気で入院した。私も体調を崩したことも重なり子供を育てることが困難だった。村上末子さんは男の孫3人いるのだが遠くにいることもあり、私の娘をいつも自分の孫のように世話をしてくれた。

休みの日には、たくさんの料理を作り、私と娘にごちそうをしてくれた。とてもおいしかった。末子さんのお宅へ遊びに行くと、末子さんの夫の真一さんも娘の事をかわいがり、冬休み中の宿題も見てくれた。ぞうきんも一緒に作ったこともあり、正しい礼儀を教えてくれた。梅干しの作り方を教えてくれた。色もきれいに、長持ちさせるために少しお酒を入れる方法も教えてくれた。今も忘れていない。今もおいしく作って食べている。

震災後、多くの友人、親戚も津波で失い、さびしく、苦しんだ時もあった。その時、心を支えてくれた読書会の仲間たち、何でも相談にのってくれた。末子さん同様、親切でやさしかった。娘が高校入学後、体調を崩した。しばらく学校を休んでいた。兒玉智江さんに電話をかけ相談し、乗り越える力になってくれた。一番つらい時に心を支えて

くれ、一緒に北上展勝地へお花見に行ったり、映画を観たり、心を癒してくれた。

2015年11月18日北上の兒玉智江さんお宅での読書会へ参加した。一人一言での時、娘が学校を休みがちになり、学校を辞めるか続けるかの選択に迫られ、どうすれば良いのか悩んでいることを話した。その時真吾さんは、「一人で悩まないで、とにかく諦めないで、身体が回復することを信じて」と言ってくれた。知恵と乗り越える勇気をもらった。

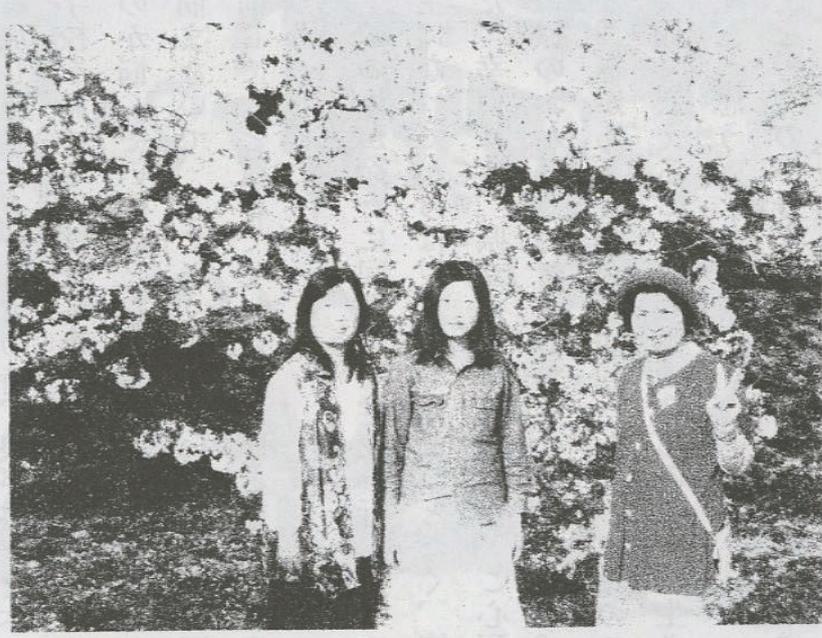
その後、娘の体が徐々に回復し、学校へ行くようになった。3年生になってからは、1日も休むことなく、皆勤賞をもらった。幸いにも、県立大学に無事合格。ご心配かけましたが皆様のおかげでここまで来ることができた。

不思議なご縁がある読書会の仲間たち、みんなのことが大好き、笑顔で会えることが一番の楽しみ。今、生きる中で宝財産だと思う。

私は、文を書くのが好きだが、綴り方がへたなので勉強中だ。皆さんの言葉を聞くことで心が癒された。陸前高田市復興が進んでいる。今年(2017年)は複合商業施設『アバッセ』が完成、町が大きく変わって来た。皆で支え

て共に生きていることを大切にしたい。これからも読書会の皆様の健康を祈っています。わからないことも沢山教えてください。読書会の仲間から感謝しています。

2015年11月25日



*北上展勝地（2014年4月26日写）

―農民文化賞によせて―

『私のなかの

“東北のおなご”を

書き換えた麗子さん』

柳原 恵

麗子さんとの偶然の出会い

2006年秋頃、大学4年生の私は、ウーマン
リブをテーマとする卒業論文執筆のために、図
書館で本を調べていました。

手に取った一冊、『新版・女のネットワーキング』（1991）のなかに、麗ら舎読書会が紹介されていました。本のなかで紹介されている女性のグループは、すべてがフェミニズムの視点から活動している団体ではありません。しかし、「『麗子さんの家に泊まる』と夫に言えば、仕方がないという風に納得するらしいわ。本当は、それでは問題の解決にはならないのね。農家が依然多いこの土地は、特に女が主体的に家事以外で学んだり、集まったりすることに抵抗があるのよ」という麗子さんの短い語りのなかに、麗子さんとのこの会がもつフェミニズム的なスタンスを察しました。

同時期、女性史家もろさわようこの『女の百年4 女のからだ』（1979）に掲載された石川純子さんのエッセイ「垂乳根の里へ」（1975）を読みました。私はおやつと思いました。エッセイのなかに東北の方言が使われていたからです。多くの資料のなかで初めて目にする東北弁でした。エッセイの初出であるリブの代表的雑誌『女・エロス』5号（1975）を確認すると、「女かわら版」というコーナーの著者の連絡欄に水沢在住とありました。

もともと、卒論を書くに当たっては私の出身

地の東北地方のリブをテーマにしたかったのですが、残された資料や情報は東京など都市部のものがほとんどであるため、諦めた経緯がありました。そのため、岩手の地にてフェミニズムに関する活動をしていた女性の存在に心が躍りました。その後、インターネットで調べてみると、麗子さんと純子さんは活動をともにしてきたことも分かりました。

方言と凛とした知性と

2007年春、東北・岩手におけるリブ・フェミニズムについての研究を深化させることを志して、大学院修士課程へ進みました。研究の軸にしたかったのは麗子さんと純子さん。女性や東北という周縁的な立ち位置から社会を捉え返す視座を持っているのではないかと直感していたからです。

その年の夏、麗ら舎の電話番号を調べ、ドキドキしながら電話をかけました。女性運動を研究している学生であり、麗子さんの活動についてお話を聞かせてほしいと伝えると、二つ返

事です承してくれました。

数日後、麗子さんからその月の読書会についての案内電話をいただきました。そのときに、次回の講読文献が香山リカ『悩みの正体』(2007)と聞いたときに少し驚いたのを覚えています。本の選択が意外だったのです。出版されたばかりの、どちらかというと若者向けの本であり、麗子さんたちの感性や情報が新しいことに驚いたのです。岩手のおなごというものに、自分自身、先入観があつたんだなと今になって振り返ります。

読書会にお邪魔したあと、あらためて麗ら舎に伺いました。麗ら舎一階のリビングで、文芸学書が並んだ木製の本棚を背景に、麗子さんに半生を聞かせていただきました。凛とした、意思を感じさせる語り口。これまでの読書や人生経験に裏打ちされた、しっかりとした社会に対する考え。そして芯の通った生きざま。そして、そうした言葉が東北の方言で語られることに、衝撃に近いものを感じたのでした。

今思えば、それは自分のなかに作り上げてしまっていた、ネガティブな東北像、そして岩手のおなご像が崩れていく経験でした。

花巻の高校を出た私が関東の大学に進学したのは、東北を出たいという気持ちがあったことも一因でした。生まれ故郷に愛着をもち、東北を蔑視する価値観に憤りを覚えながらも、岩手の歴史や風土、方言に対する否定的な意識もどうしても消せない、そんな板挟みの状態にありました。

あとから勉強して分かったことですが、「標準語」と「方言」が作られた明治時代、「標準語」は教養ある東京の男性の言葉をもとに作られ、方言、とくにも東北弁は周辺に追いやられ、教養とは対極に位置付けられた言葉だったのです。大学の講義でも学術書でもなんでも、「知的」なものは標準語で話され、書かれています。だからこそ、麗子さんの方言による語り口が、私にはとても革新的に響いたので

世代は違えども共感の嵐

昭和60年生まれの際は、ちょうど麗子さんの孫の世代にあたります。大学にも女性学やジェンダー研究の講座があった世代です。

最初のインタビューの際に、『稲の屍―小原麗子散文集』(1982)をいただきました。これに収録されている、娘時代の麗子さんが書いたエッセイを読むと、なんと共感の嵐であることか。「そうそう、そうなんだよ、これが言いたかったー！」

これまで岩手で生まれ育った少女として経験してきた、女性であることを理由とした言いようのないもどかしさ、怒りや悔しき、そういった思いが言葉になっていくことに救われるような気持ちになりました。こんな思いをしてきたのは私だけじゃなかったのか、と。

時代を経ても、岩手の女子を取り巻く環境の根底は、実は変わっていないように思いました。

「女は結婚すれば終わりなのに、娘を大学へ行かせるなんて金をドブに捨てるようなものだ」という大人が私の周囲にもいました。

そのようなことばに腹を立てながら育った私は、そのことばの背景にある価値観に従って生きる女性、それゆえに女性を蔑視し、軽視する女性たちにも腹を立てていました

麗子さんは、フェミニズムということばが無かった時代から、自分の考えをしっかりと書

きながら思想を鍛え上げ、おなごとしての自律的な生き方を実践してきました。もし私が麗子さんの時代に生きていたら、麗子さんのように生きられたらどうか……？

詩を書きつづけ、結婚しない生き方を選び、自分の稼ぎでおなご舎・麗ら舎を建てる。

この岩手の農村部で、それを実践することがどれだけ困難なことであつたか。私は心から尊敬します。

新しい東北のおなご像を体現

麗子さんは、私自身が内面化（その社会や文化がもつ価値と規範を、自分の価値と規範として、受け入れること）していた、「どうせ東北の女だから」という気持ちを書き換えてくれた存在です。

教育の機会も得られず、角の無い牛と呼ばれながら男を立て、家と子どもに尽くしぬく、犠牲者としてのおなご。その抑圧の裏返し、あるいは内面化した女性蔑視によって、若い世代にとって抑圧者ともなるおなごー。私の中にあつた、そんな悲しく固定的な東北のおなごの姿

は書き換わりました。

戦後民主主義の機運のなか、青年団で活動していた頃の麗子さんは、次のように書いています。

「農村婦人が書くことによつて、自分たちの姿を叩きこわしてゆくように、農村の女子青年という一般的な、イメージが壊れていくであろうほど、バラエティーに富んだ女子青年がふえて来るであろうことの、一つの現れでもあつたのです。

その一つ、一つのキバを眠らせるものがあるとするなら、そのことの為に運動は展開しなければならぬのでした。

眠るな そのエネルギー。その一人一人の個性、眠るなー。」「『ささえ』7号「あとがき」1962)

きつと人生のその時々で、一番響いてくる文章というものがあるのでしょうか。いまの私は、この文にとても胸が熱くなります。

個性とエネルギーを持つおなご、それは「キバ」を持ったキカナイおなごになるでしょう。「キバ」を眠らせず、書きつづけること実践してきた麗子さんは、まさに農村のおなごの姿を革新し

てきました。

書き続ける人生のお手本として

私はいま、はじめての本を書きおえたところで
す。

その本のあとがきにも書いたのですが、20代から30代にかけて、就職、出産と育児、そして夫の海外赴任の帯同などの出来事によって、度々研究を中断しながらも、一冊の本を書き上げることができたのは、困難があっても書きつづけることを決して辞めなかった麗子さんの眠らないエネルギー、そして麗子さんの作った麗ら舎に集うおなごたちの、さまざまなきざまがお手本としてあったからです。

本のなかで描いたのは、あくまでも私の目線で捉えた麗ら舎読書会の姿でしかありません。しかし、私の本が、麗子さんが築いた麗ら舎の足跡をさらに次の世代へ継承するものになれば、こんなに嬉しいことはありません。

実は、麗子さんたちにもっと早く出会いたかったなあと思うのです。十代の頃、女であるゆえの生きにくさを感じつつも、それを言葉にでき

なかった頃に出会いたかったなあ。

「人は一生において会うべき人には必ず会える。しかも一瞬早すぎず一瞬遅すぎない時に。」

純子さんが最期に語ってくれたことばです。恩師の金言なのだそうです。

麗子さんとの出会いを振り返りながら、このことばを思い出しています。

麗子さんと出会ってから、ちょうど10年になります。(2017年11月10日)



「地域」に根ざし、

「地域」を越えた麗ら舎

（農民文化賞受賞祝いに代えて）

植田朱美

一九七〇年代後半、当時私は二〇代後半で二児の子育て中だった。地域も社会も遠く、二人の子どもとほとんど三人だけの日々に疲れ、鬱屈して出口を探していた頃、活字で出会ったのが、岩手の一条ふみさんだった。

大阪で生まれ一八歳まで育ち、東京で大学生時代を過ごした私に、岩手は遠い未踏の地。『淡き綿飴のため』に、戦時下北方農民層の記録』『永遠の農婦たち』『東

北のおなごたち・境北巡礼者の幻想』をむさぼるように読んだ。

一条さんが直接語りかけるような農婦の記録は、何よりも「ひたむきさ」を伝えていた。私が知らない東北・岩手・農婦そして戦争だった。今思えば、方言の語り口は難解だったけれど、一条さんの心は受け取ったと未熟ながら感じていた。それ以前に、福岡の森崎和江さんや熊本石牟礼道子さんから、それぞれの地域女性のおおらかさと勁さをいただいた。その頃の出会いから「女性史」の分野で、記録を遺したいと思い始めていた。

のちに、岩手県との生の出会いがあるとは、夢にも思わなかったけれど、何処にも根を張る機会のない私には幸運な出会いだった。

一九九一年、夫の宮古市への赴任を機会に、以降二十六年に亘る岩手の方々とのご縁がつながることになった。宮古市で合計六年、遠野市で七年、盛岡市で合計四年目、それ以外の年月は神奈川県のお宅との往還の日々。居場所が定まらない不安や不満の日々もあったけれど、今は「だからこそ出会えた」ことを活かしたいと思う。

二〇〇〇年、もりおか女性センターの「女性史入門講座」を担当して出会いは広がり「岩手女性史を紡ぐ会」を開くことができた。

学位論文のテーマに「岩手のウーマンリブ」を研究したいとの相談を受けたことが、小原麗子さんと麗ら舎読書会（以後、麗ら舎）に出会うきっかけとなり、それ以降、修士、博士と研究を積み上げていく柳原恵さんとの出会いでもあった。

麗ら舎創設からの会員・石川純子さんも『まつを媪百歳を生きる力』出版後に、盛岡の「岩手女性史を紡ぐ会」例会を訪ねてくださった。その後ほどなく、つながりも再会も果たせぬままに早逝されたことを知り、無念さだけが残った。まつを媪の記録から、一条さんから得たような大きな衝撃を改めて受けた。さらに、小原麗子さん、麗ら舎の皆さんと本格的に出会うのは、東日本大震災の直前になる。私が、盛岡に職を得て、神奈川から移転したことから、「千三忌」や「おなご正月」に参加でき、小原麗子さんと麗ら舎に魅せられてハマっていった。

『自分の生を編む…小原麗子詩と生活記録アンソロ

ジー』（二〇一二年、大門正克編・解説）の出版記念で大門正克さんにも出会い、この頃から、「第十二回全国女性史研究交流のつどい『岩手』」の企画構想がほぼ固まって、動き始めていた。大槌町で小原麗子さんのご講演を企画し、ご相談に伺ったのは、二〇一三年のこと。私は、麗ら舎と小原麗子さんの活動を全国の女性史研究者と地域グループにつなげたいと熱望していた。

二〇一五年のご講演は、小原麗子さんの急病で果たせなかったが、急遽引き受けてくださった大門正克さんが、見事に全国の参加者に伝えてくださった。決して代役としてではなく、歴史学とくに農村社会史研究者としての視点が生かされて全国の参加者の感動を呼び起こした。

私もまた地域を越えてつなげる役目を果たせたように思い、小原麗子さんと麗ら舎に感謝した。

麗ら舎が、和賀地域（現北上市）に根ざして、三十年以上の活動歴を刻んでこられたことは、何よりも「自由で平等で穏やかなつながり」の証だと思っている。

言葉にすると当たり前のような響きになるが、これ

がどれ程、希少な原点かを何か所もの地域や団体、グループを経た体験から強調したいと思う。

一九七〇年代にうぶ声をあげた「ウーマンリブ」も九〇年代から達成を目指した「男女共同参画社会」への取組みでもこの原点を持ち続けることの難しさを痛感している。小原麗子さんの最大の功績として讃えたい。

小原麗子さんと麗ら舎の皆さんにこれからもお世話になりつつ共に年を重ねながら、さらにつながりを強くし全国と世界に発信していきたいと思う。

■二〇一七年十一月十日千三忌・駄句を詠む

麗ら舎にそっと吹く風千三忌

野々小道

セキさんの涙の顔浮かぶ千三忌

万古神

滋賀の酒 口に濡らして千三忌

赤とんぼ

滋賀県のシホンケーキのやわらかさ

吾亦紅

末子のヒマワリ我が庭に咲く

吾亦紅

念ずれば花はひらくよ千三忌

われる

セキさんの思いをいただき帰秋（秋田）する

流水星

ICANにコメントできぬ日本国

もと

ICANに連帯しようWE CANで

もと

明日選挙安倍さんグラツとするかしら

ふくれ女

この世から戦争消えぬあきらめぬ

ふくれ女

父母の歳こえて恨みを次に渡す

母子草

秘めしことはじて紅きほうせんか

山彦

想う念ずる祈る反戦の思想

甚古神

新党名決まる小さい政府の党

甚古神

千三忌原爆の絵本で花束ありがとう

万古神

千三忌車のカギ五分さがす

万古神

反戦を誓うともがら千三忌

吾亦紅

いつまでも子らの笑顔を千三忌

どんぐりころころ

ベトナム反戦友は逝きて五十年

流浪の民

枯葉剤のこり平和は遠く

流浪の民

体験を語る言葉はみなあつく

吾亦紅

窓よぎる鳥の一群千三忌

吾亦紅

智江さん力あるね絵本受賞

ふくれ女

子どもの日の北上川ババになっても北上川

ふくれ女

セキさんの思い新たに千三忌

ふくれ女

へあとがき

繋がる

年の暮れ、細雪が舞っている。平成もあと一年五カ月で幕を下ろします。昭和の時代は遠くなり歴史のワンシーンとなってしまうのでしょうか。

十二月八日、美容院に行く。美容院で働いている姪に聞いてみた。「十二月八日、何の日か知ってる?」。知らないと言う。「この日は日本が真珠湾を攻撃し、戦争が始まった日なの」。全然知らなかったという返事だった。私は彼女に説明をする。

今から七十六年前の一九四一年（昭和十六年）十二月八日、旧日本軍が米ハワイ・オアフ島の真珠湾にある米軍基地や艦隊を戦闘機などで奇襲攻撃し、太平洋戦争が始まった日なんだよ。彼女は初めて知ったと言って驚いていた。私は戦争が始まった日のこと、戦争中のことなどを姪に話して聞かせた。

私が小学三年生の冬休みだった。わが家は祖母、父母、姉二人、弟、妹三人、私の大家族だった。みんなが寝静まったあと、一人炬燵でラジオを聞きながらマフラーを編んでいた。明け方近く突然ラジオから緊張したアナウンサーの声。「臨時ニュースを申し上げます。本日未明、日本はアメリカに宣戦布告をしました」。私はびっくりして眠っていた母を起こして「母さん、戦争が始まったよ」と言った。急に屋外から人声がし騒々しくなったことを。戦争中は物資不足、食糧難が続いた。なかでも一番辛かったの

はご飯をお腹いっぱい食べられなかったこと、昆布や細かく刻んだ大根の入ったとろとろしたお粥を茶碗で一杯しか食べられず、何時も空腹で白米のご飯を腹いっぱい食べたなら死んでもいいと本当に思っていた。父の生家が小島崎の農家だったので、澤幸さん（展勝地に桜を植えた人）の家の所から北にのびている長い道を歩いて行った。「きたんちゃ」と言う優しいひっこ婆さんが出て来て「入れ、入れ、よぐ来た」と言っただけで直ぐに白いご飯をたべさせてくれたことを忘れられない。

また、西念寺の境内にワラ人形を作って立て、隣組の人達が朝早く一列に並んで竹槍で「ヤーッ」と大声で突いたり、バケツリレーや火叩きで消火訓練をさせられたり、今考えると随分馬鹿げたことをやっていたと思う。

女学校に入学した年（終戦の年）は毎日作業で授業は全然なかった。鍬を担いで和賀川の河原や後藤野に開墾に行ったこと、学校のテニスコートやバレーのコートにソバを蒔いたこと、終戦の前日、明日は黒沢尻の町が空襲になるというので家族で二子の山にリヤカーに荷物を積んで疎開したこと。終戦になる少し前、お茶屋旅館の前から特攻隊の人達を見送ったこと、少年のような顔をしていたことが強く印象に残っている。

姪に「現在は一見、平和のように見えるけど、あの忌まわしい戦争になる前のような事態があることを知っておいてね」。戦争絶対反対!」。聞いていた姪が言った。

美容院から帰宅。岩手日報に眼をとおす。社会面に次のような記事が載っていた。『76年前のきょう、真珠湾攻撃に参加「蒼龍」の実戦伝える』。一九四一年十二月八日、米ハワイ・真珠湾攻撃に参加した空母「蒼龍」の艦上機搭乗員の日記が埼玉県熊谷市の親類宅に残されていることが分かった。開戦当日の戦果は大勝とする一方で、艦上機事故や、帰還しなかった爆撃機や戦闘機もあり「戦闘(闘)ノ悲惨ナル状況ニ始メテ接シタ」と実戦の過酷さも綴っていた。開戦時の状況や兵士の心情が分かる資料となりそうだ。という内容であった。(二〇一七・十二・九記)

農民文化賞贈呈式が、平成二十九年二月十九日、ブランニュー北上で行われました。会員八名が参加。麗子さんは挨拶の中で「別冊おなご」を長く続けて来たことを話し、会場から大きな拍手がありました。個人で受賞することを固辞し、賞金の十万円は麗子さんの意向を尊重し読書会に入金させて頂きました。

私は今、「別冊おなご」1号から34号までを机に並べて眺めています。新ためて「継続は力なり！」という言葉をかみしめています。(渡邊満子)

別冊おなごの編集に関わって

始めて別冊おなごの編集に取り掛かった。10月28日の原稿締め切り日に向かって、原稿が寄せられる。原稿が遅れる方達からも「少し遅れる」との連絡があり、27名の原稿は冊子の中に

次々収められて行く。会員からはメールで原稿が送られてきた。それに、手書き原稿は会員が手分けしてパソコンで打ってくれた事で編集がしやすかった。編集委員長の渡邊満子さんは全原稿を校正、スムーズに編集がはかどって行っただけです。印刷所へ編集した原稿をそのまま持つて行くことが出来る。第2回の編集会議も終え、別冊おなご35号が生れる。編集に取り掛かって見てやはり楽ではなかった。「私は、大変ではなかったの、ただ原稿が寄せられるのが何より嬉しかったの」と、今まで34号まで、一人で編集をしていた小原麗子さんの言葉に頭が下がるばかりです。(兒玉智江)

編集委員

主宰・小原麗子	編集委員・相川元美
編集委員長・渡邊満子	編集委員・高橋哲子
編集委員・佐藤恵美	編集委員・千葉ちた江
編集委員・田村和子	編集委員・佐藤弘子(会計)
編集委員・小平玲子	編集委員・兒玉智江(事務局)

別冊おなご 35号

発行日 2017年12月30日

発行者 麗ら舎読書会

発行所 北上市和賀町長沼5・343・3

電話・0197・73・6673

2018. 3. 25

愛宕舎読書会にて。

(生涯学習センター)

